

ふて見ると、先づ車が四臺位しかない、其一臺は南滿洲鐵道會社の特別の好意に依りて自分の一行に貸與へて呉れられたので、一車の中に一行四人が這入つてもさう廣くは感じなかつた、それから途中で食用品等を求めることはなかく、難いので、辨當であるとか、或は飲料であるとかいふものは總て安東縣からして用意して行つたが、輕便鐵道の事であるから従て其動搖が非常に甚くて、自分等は湯を沸して飲む爲めに火鉢を入れて、それに藥籠を掛けて居つたのであるが、屢々轉覆して灰神樂を立たしたといふやうな譯で、始めて鐵道にても乗るものは餘程不愉快に感ずる鐵道であらう、速力も勿論非常に遅いので、丁度安東縣からして奉天に行く間二日掛るので、前に申した線路の危険があるといふことから夜行はしない、安東縣を先づ朝八時頃に出發をする、さうすると其夕景の五時から六時頃に草河口といふ所が山間にあるが、其處に車が停り、其翌朝草河口を發して其日の夕景に奉天に着く、斯ういふ風な極く緩くりした鐵道なので、途中の宿驛である草河口といふ所は随分山間であつて、人家が數十戸位點在して居る計り、宿屋はちよつとした所があつて、如何なる高貴の人でも其宿屋に宿泊しなければならぬ、此宿屋に宿泊すれ

ば鳥のすき焼位食はすといふやうなことで、極く邊僻の場所であるが、旅亭は一夜の安眠を食ふことの出来るだけの設備がしてある、我々が泊つた時に西洋人なども來て泊つて居つたやうであるが、或部屋には粗末ながら寢臺が据え附けてある所もあつた。

此安奉線の最も人口に膾炙して居るのは、極く危険であるといふこと、途中の風景が非常に良いといふことである、此途中の風景の佳いといふことは是は内地の眼を以て見れば何等の價値が無いものである、併しながら大體滿洲の如き廣漠たる平野にして先は地平線よりしか見えぬといふやうな所を始終旅行して居る人が、一度び道を安奉線に取るといふことになる、或は山を潜り川を渡つて隨分幽邃な所があるので眼を慰むるに足る、一番景色の佳い處は所謂橋頭といふ驛の附近であつて、此附近は南滿洲鐵道の案内記などには滿洲の耶馬溪と稱して居る所で、或は清流の潺々と流れて居る處を通るかと思へば、奇岩怪石が削立して居るやうな山の麓も通るといふやうなことで、多少は日本の風景を樂むことが出来る、又鳳凰城の附近の景色、殊に虎の棲むといふ鳳凰山の雄姿等も隨分旅客の眼を慰

むるに足るだけの趣きがある、橋頭驛の前後を走る鐵路は前きにお話した如くに軍事上急速に造つたものであるから、隧道を成べく造らぬことにしてあるので、グル／＼百足の巻いたやうに廻つて山を越すことになつて居るので、一番上の線路から見下すと、前通つた線路が三段にも四段にもなつて下に見えるといふやうな所がある、丁度是等の状況と少しく趣は異にして居るが瑞西のやうな山國では斯ういふ鐵道があるので、只瑞西あたりに鐵道の架つて居るのは山を螺旋狀に登つて行くが、是は中に隧道を造つて、さうして隧道と隧道で無い所とグル／＼螺旋狀に廻つて行くやうな仕組に出來て居るが、自分などは曾て瑞西あたりを旅行した時の山水の景色などを思ひ出して餘程愉快であつた、安奉線は今お話しした通り山腹を廻つて行くのであるから、其廻る所などは速力でも少し早くすれば直ぐ列車が谷底に落掛るといふやうな所があつて、成程此鐵道で夜行などは出來ぬものであるといふ實驗をしたのである、斯ういふ鐵道は兎に角支那に於ては珍しいので、支那の鐵道は各所に於て乗つて見たが、何れも立派なものであつて、滿洲鐵道の本線にさう譲ることはなく、寧ろ或所には是より立派な鐵道が架設してあるといふ

次第であるから、此安奉鐵道といふものは一種の妙味がある、此鐵道を皇軍が大に露西亞と戦ふの用に供したといふこと等の歴史を結び付けて見ると餘程面白いことである、併し此鐵道ももう二年もすると立派な鐵道になつて仕舞ふのであるが、自分は幸にしてさういふ鐵道も經驗をしたので耳新しきことではないが雜談の一つとして極く概要を御話して置くのである。

奉天は兎に角清朝の起つた所であるから、漫遊旅客の見物すべき所が多くあるので、其市街も滿洲に於ては支那町としては一番立派な所であるし、それから見物する所としては前に御話をした愛親覺羅氏の廟即ち東陵、清の太宗の廟即ち北陵であるとか、昔の宮殿の迹であるとか、或は喇嘛寺であるとかいふ様なものがある、自分で閑を偷んで是等の處を見物したが、なか／＼面白く感じた、此宮殿であるとか、或は陵であるとかの模様は總て明の建築法等に依つてやつて居るのであつて、是は後に明の長陵のことを御話をする時分に少しく詳しく御話すれば、大體そんなものかといふことが分るから、茲には之を省いて置く。

喇嘛寺は奉天に大きなものが四つ程あつて、東西南北に立つて居る、其中の二つ

## 奉天の風物

ばかりは壊れて居るやうであるが他の二つは儼然として居つて、是は漫遊の客が行つて、滿洲あたりの宗教は一體どういふものであるかといふことの概念を是で以て得ることが出来るだらうと思ふ。

支那馬車

それから此奉天の郊外などになると殆ど道路といふものは無い、是は奉天のみならず支那地方の都會は一步出れば道路といふものは先づ無いのである、畑でも何でもドシ／＼歩き廻るといふ譯である、併し耕作の規模が非常に大きいから、少々畑の外廓の所を馬車がのたくつて歩いた所が、百姓がそれを見て居つても、其處を通つてはいかぬとかいふやうな小言も言はず平氣で居る、それだから一度び郊外に出れば輿に乗れば一番の紳士であるが、其外は馬に乗る、さうでなければ支那馬車で行くことになる、此馬は普通は驢馬が驢馬と普通の馬との所謂間生兒で驢馬といふものである、此驢馬が物を曳く力の非常に強いものであつて、耕作其他にも用ひ又乗用にもするらしい、支那馬車は日本で云ふと概又は樾みたやうな木造であるので非常に堅牢なものである、車にはバネなどは附いて居らぬ、之を先づ普通二頭位の驢馬を以て曳かせ、道が悪くなれば四頭も五頭も附けるといふ譯で、其

中には一人は格に乗れるが、支那人などは數人も固つて乗つて居る、右の馬車で以て道路の無い所を歩くので、慣れぬ間は非常に苦痛を感ずる、道の悪い處に来ると馬車の天蓋で腰々頭を打つといふやうなことであつて、逆も長距離の旅行をすることは困難である、併し支那人は之に慣れて居るからして、能く調子を取つてうまく乗つて居る、自分が此前に御話した奉天から東陵に行き、農事試験場に寄つて歸つて來た、此距離が往復五里であるが、其間支那馬車に揺られた爲めに殆ど生れて覺えのない齒痛を起して、十五日間ばかりそれが爲めに惱まされたといふ次第で、自分の友人の田君は先年支那を旅行した折に支那馬車に各所で乗つて、それが爲めに歸つて來て數ヶ月も肝臟とかの病氣をしたといふことを聞いて居る、随分えらい交通機關であるが、併しあの道の無い所をのたくつて歩くにはどうしてもア、いふ支那馬車でなければいかぬので、土地相應な交通機關が發達して居る、其馬車の中にはなか／＼立派なのがあつて又一輛の代金が彼は二三百圓も掛るといふことである、是はどうしても滿洲に行つた者は一度其味を試みなければならぬものであらうと思ふ。

奉天滞在中に總督に會ひ又あすこの度支使即ち東三省の大藏省部而の人に面會したとがある、其狀況を少し御話するが、奉天では相當な旅店が無いから滿洲鐵道の宿舎に行つたら宜からうといふので、其所に泊つて居つたが、總督府は其處から約四五丁の處に在るので、是は半ば煉瓦、半ば木造の立派な西洋風の建物である、領事館の心配で通譯を同伴の上、總督錫良に敬意を拂ふ爲め、或日訪問した、總督府を這入ると直ぐ右側が應接室になつて居つて、疊で云へば三四十疊も敷けるやうな純粹の西洋造の間であるが、其處に我々が通された、支那人は一體人と應接するにも非常な大勢の人が前後左右を擁して居るやうな譯であるが、二三分俟つて居ると錫良氏は日本語の通譯を二人ばかり連れて出てこられた、通譯は會て日本に留學して居つたことのある人で、其中の一人などは矢張り財政經濟の事等を調査の爲我大藏省へも來たとのある人で、自分は寧ろ忘れて居つたが向ふは顔を知つて居るといふ次第であつた、自分等が會て聞いて居つた事大主義の支那を想像して居つた所から較べて見ると、比較的錫總督は開けて居つて萬事頗る簡單であつたやうだ、先づ年齢は五十五六に見受けらるゝが支那人としては目張り肩怒ると

いふやうな人で、ちよつと日本人に近いやうな風采を有つて居る、話振等も頗る壯嚴な、餘り御世辭はないやうであるが、淡泊な人らしかつた段々話をして居る中に、自分の話すことは經濟や財政方面に係ることで、短時間であつたが、さういふ話題に就て話をする中に、總督は何れも知らぬことは明かに知らぬと言ひ、自分は滿洲に來てから間もなし、殊に財政經濟の方面はまるで分らぬからといふやうなことで、非常に其處らの挨拶が淡泊なもので、支那人としてはちよつと様子が異つて居るやうに感ぜられた、これは能く支那では有ることであるが、人に應接をして居ると、彼處の口からも此處の窓からも多數の人が覗いて見たり、或は話を立聽するやうな風のことゝが至る處にあるといふ話を聞いて居つたし、又自分が歩いた上に就てもそれを經驗したことであるが、此處ではさういふやうな風が割合にない、どちらかといふと先づ少しこつてりした西洋風といふやうな態度があつた、兎に角錫總督は遣手であるといふ話を會て聞いて居つたが、成程相當な人物といふ風に自分等は見えて來た、度支使に張錫鑾といふ人がある、其人にも會つて總督と話をしたよりも今少し細かい財政上のことを數十分位話して來た、此人は六十近い年配

の人であつたが、併し滿洲には兎に角長く居つて、比較的財政上の事などを知つて居ると稱せらるゝ人で、極く温厚篤實な人らしい、併ながら斯ういふ人にして、矢張り一般に亘つての經濟とか財政上の觀念といふ者は不幸にして少い様に自分等は思ふた、併し此人等はどちらかと云へばさう事大といふことがなく、應接談話を交へる中に比較的簡単な人らしく見受けた。

奉天から大連、旅順あたりに往つたことは前に御話した通りであるが、別段見物としては大したことはなかつた、併し旅順は兎に角日露戦争の時に、例の非常な慘劇を演じた所であつて、旅順の砲臺廻りといふものが餘程面白いので、露西亞の旅順に對する經營はなか／＼素破らしいもので、二〇三高地を始め鶏冠山であると、か何とかいふ十數の砲臺があるが、それ等の砲臺は巾二間若くは五間位の立派な道路が附いて居つて、馬車で以てズット一周することが出来るやうになつて居る、丁度一周をするに就ては總督府から當時の戦争に参加して能く事情を知つて居る人を案内に附けて貰つて、其人と一緒に各所を馬車で廻つて半日ばかり歩いて見た、當時の二〇三高地とか或は鶏冠山であるとか、其他何れも戦争の極く激烈で

## 旅順の砲臺廻り

あつた所を廻つて見、又ミステンコ將軍の死んだ所も見、其他戦争の鹽梅等の説明を聽いて、非常に感慨を深うした、僅半日でズット各砲臺を廻れるのみならず、二〇三高地あたりに登つて見ると、旅順市街は無論のこと、旅順港、旅順港外の有様、即ち閉塞船の有様、斯ういふやうなものが手に取る如くに見えるどうしても彼處に漫遊する者が一度び此處に来ると大に士氣を鼓舞し、且つ非常に感慨を深うする、或人が日本の學生等が暑中休暇などの折に斯ういふ地方に来て、色々激戦の迹を尋ねたり、砲臺等を見物するといふやうなことは、士氣を鼓舞する上に大に必要だと言つて居つたことがあるが、自分等でも猶ほ感慨に堪へず、士氣自ら昂るといふ有様になるを感じた。

大連とか旅順とかでは滿洲鐵道會社がホテル業を營業して居つたが、滿洲鐵道のホテルの標本が詰り其處にある譯で、何れの建物も非常に立派であつて、設備等も相當に能く行渡つて居るらしい、併しまた西洋人を主として手掛けぬから、サーヴスの點の於て非常に缺けて居るやうに自分は思つた、滿鐵ホテルで矢張茶代が要るといふことをいふ者もあるか、歐米では先づホテルなら小者に心附をやる位

## 滿洲の旅

なことはするが、茶代をやるといふことは餘り聞かないが、一方にホテルの看板を  
 かけ一方に於ては日本風に茶代を相當に置かなければならぬといふ習慣がある  
 らしいので、是は誰がさういふ悪い習慣を附けたのか知らぬが、餘程頓珍漢な滿洲  
 に於ける不思議の一つだらうと思ふ、之に反して滿洲各所に日本の宿屋があるが、  
 何れも日本風に茶料を包まなければならぬ所が、營口に行くに競争の結果か、茶代  
 を取らないといふことがあつたので、自分等は滿洲各地を歩いて、營口に往つて茶  
 代が無いといふことを聞いた時は、滿洲ホテルが茶代を要するといふこと、對照  
 して餘程奇異に感じたことである。

それから自分は哈爾濱に行つたので、哈爾濱のことを少し餘談として御話をし  
 て置きたい、哈爾濱では露西亞風のホテルに泊つた此ホテルは此處では一番良い  
 ホテルだといふので泊つたが、家屋其他設備等に至つては劣等で、逆も滿洲鐵道の  
 ホテルの比較にはならない、是は詰り露西亞が戰敗の結果、一時哈爾濱が十數萬の  
 人口を持つて居つたのが、非常に減つて仕舞つて寂れたといふことにも原因する  
 であらうが大體餘程汚い宿屋であつた、併ながら宿屋の料理は、露西亞風に佛蘭西

哈爾濱雜

風を加味した料理で、久振で西洋料理といふものを味つた氣持がした、是は滿洲鐵  
 道のホテルの料理などに較べると純粹の西洋料理であるから、至極結構であつた、  
 哈爾濱の總領事は川上君である、同氏は以前から自分が知つて居る人であつて西  
 比利亞、北滿地方の事情には精通されて居る人だ、色々北滿洲に關する經濟上又は  
 貿易上の話等を聞き、舊交を温めて愉快に感じた、先きに北滿洲の貿易事情等は餘  
 り話をしなかつたが、丁度川上君のことで聯想をしたから、極く大體のことを序に  
 御話をして置く、尙ほ北滿洲のことに就ては同氏の著述に係る北滿洲の産業とい  
 ふ書物がある、數字は多少古いかは知らぬが、餘程有益なる参考書であるから紹介  
 して置く、北滿洲の昨年中の貿易額が三千六百萬留程になつて居つて、之を輸出  
 に區別すると、輸出が二千二百五十萬留、輸入が千三百六十萬留といふことになる  
 それで尙ほ此貿易を交通機關に依つて區別して見ると、東清鐵道に由るものと、そ  
 れから松花江に由るものと、其他支那馬車に由るものと、其三つに由るものである  
 といふことを御話した様に思ふが、此三つに區別して見ると、輸出の中で鐵道に由  
 る者が千四百萬留、松花江に由るものが三百五十萬留、支那馬車に由るものが約五

百萬留である、それから輸入に就ては鐵道に由る者が九百五十萬留、松花江に由る者が十萬留、支那馬車に、由るものが四百萬留、斯うなるらしいのである、それで北滿に於ても支那馬車といふものが交通機關としての効能が非常にあるといふことが是で分るのである、此輸出の中で日本人がどれ程取扱つて居るかといふと、全體が四百萬留であつて、其中輸入が百二十萬留、輸出が二百八十萬留である、其中で純粹に本邦人の取扱に依るものが輸入に於て七十萬留、輸出に於て百二十萬留といふことになつて居る。

北滿洲の輸出貨物は、申すまでもなく其主たるものは穀類であつて、其穀類の輸出される道に依つて假に之を區別して見ると、長春を経て輸出されるものが約百八十四萬八千留、松花江に依つて輸出されるものが八十五萬九千四百留、バイカルの方面は滿洲里といふ停車場を經過して行くものが十三萬三千留、ブクルニチャといふ所を經過して行くものが二百四十四萬留といふことであつて、是等の穀物の全體の斤量が五百二十八萬二千五百ヒクル、即ち之を噸に直すと三十一噸二千五百三十餘噸といふものになる、是だけ北滿洲から出る、北滿洲の生産物のことは

先きに御話して置たが、穀物類の内麥と大豆が重なるもので、此大豆の輸出は歐洲貿易が、始まつてから随分盛で、本年などは一層巨額に達すべしと豫想されて居る、

大體斯んなやうな話であつたので、是等の事は尙ほ詳細なことを川上總領事等が川上總領事から聞いた話の顛末であるから、若し一層詳しく北滿洲に於ける貿易の狀況を研究さるゝ人達は右の雜誌を御覽になることを御勧めする、又露文を讀まるゝ方は露文の報告書もある、

哈爾濱は戰敗の結果として露西亞人が段々引揚げる、其他露西亞の軍隊が駐在して居るといふことを見込んで其處に集中して居つた人間も段々に引揚げるといふことで、今日では寂れて居るし、又尙ほ寂れつゝある狀況であるが、一方に哈爾濱の市街に接し松花江に臨んで田家甸といふ支那町がある、此支那町が極く最近に出來たのであつて、我々は川上總領事と共に其支那町をドライブしたが、今日の所ではまだ立派な市街は成して居らぬが、兎に角僅三四年の間に支那人が其處に集中し始めて、今日の所では二萬ばかりの人口があるらしいので、其田家甸で取扱

つて居る穀物貿易の高が昨年あたりは約六百七十萬留といふ様な多額に上つて居るらしい、それで哈爾濱の町はどちらかと云へば漸次衰退しつゝあるといふ状況に在るに拘らず、此支那町は漸次擴張しつゝあるといふ状況になつて居る、是は適切な例と云へないが、大連に於てもさういふ様な關係がある大連の町續きにも小崗子といふ支那町がある、是は初は數十軒のものであつたらしいのであるが、年々増加して今日では二萬人以上の支那人が住んで、相當な町を成し、相當な商賣人も出來るといふので、此支那町も哈爾濱に於ける田家甸と同じ譯で、年々に發達し來つて居るに反して、大連の日本街は哈爾濱の如く衰退の機運は見へないが、昨年以來内地の不景氣を受けて非常に貸家が多い、商賣も振はぬ、是は餘程面白い現象であつて、旅行者は大連に往けば小崗子、哈爾濱に往けば田家甸の如きは一見する値打がある所であらうと思ふ。

哈爾濱の大體の狀況は衰微を表して居るが、茲に又哈爾濱で一時隆盛を極めて居つた製粉會社、此製粉會社は松花江に臨んだ宏大なる煉瓦の建物で、十數個所もあるらしい併ながら露西亞の勢力の不振と共に段々衰微して、或製粉會社の如き

は露清銀行から大變な金を借りてとう／＼整理が出来なくて、露清銀行が自か製粉會社を取つて經營して居るらしい、噂に依ると露清銀行は此製粉會社の爲めに約五六萬百留の金を固定したといふことになつて居るらしい、他に一二煙を立て、やつて居る製粉會社があるやうだが要するに其營業狀態は甚だ有望でないといふ風に聞いて來た、露清銀行は一時滿洲の經濟的政策の爲めに露西亞が非常に力を入れてやつて居つて、金融機關としては誠に恐るべき勢力を有つて居つたのであるが、今日は露清銀行の滿洲根據地たる哈爾濱に於ても製粉會社などに大分資本を固定したとか其他の事情に依つて餘り近頃は貸出等に就ても滑かにないので隨つて其營業等も振ふて居らぬらしい。

哈爾濱の市街は露西亞人の經營だけに歐羅巴風に出來て居つて相當に立派ではあるが、一體の所寂れ掛つて居るし、其商店としては露西亞から西比利亞其他滿洲地方に主に出て居る政府關係の商賣人が幾らか盛にやつて居る、それは即ちクンストアリベルス、チューリン、ノーベルと云ふやうなもの、是等は先年自分が西比利亞に行つた時に見たが、浦鹽斯德にも、ニコライフスクにも其他重要な土地に



は皆店を出して居る。是等は兎に角相當にやつて居るやうだ。殊にチューリン商店の如きは哈爾濱に於ても今日唯一の立派な商店として存して居るやうであるが、一般に商業の餘り振はないといふことは、是は十人が十人さう話して居るから事實であらうと思ふ。

此哈爾濱に就て我々が多大の趣味を有つて居るのは、明治三十一年に自分が西比利亞地方を歩いた其時は、哈爾濱が始めて出来る時であつたので、自分が浦鹽斯德に居つた時に餘程面白い話を聞いて居つた露西亞の官憲からして本日の貿易事務館に持つて来て、今度哈爾濱といふ町を開く、就ては此町を開くにつき必要のものは女であるから、日本の醜業婦を二百人よりも哈爾濱に寄越して呉れまいか、相當な保護を與へて決してお前の國の迷惑になるやうなことはしないといふ話があつたかの如く聞いて居る。其時は貿易事務館でなか／＼議論があつて例の國辱論もあつたらしく到頭其照會に對しては承諾をしなつたらしい併し事實として哈爾濱を開いたのは日本の醜業婦が初に乗込んで行つて、是が基礎になつて段々人が集中して來るといふやうなことであつて、三十七八年の戰爭頃には十數萬

の人口を有する大市街になつたといふことであるので、哈爾濱創設の昔噺等を回顧して見ると、餘程趣味を感じるのみならず、哈爾濱に往つて見ると彼處の長官をして居る人がチチャコフといふ人であつて、此人は自分が西比利亞に往つた時に浦鹽斯德の知事をして居つて數回會つて色々話もするし便宜も與へられた人であつた。尙ほ又當時浦鹽斯德で亞米利加の貿易事務官をして居つたグリーンといふ人が居つたが、此人も哈爾濱に來て駐在して居るといふ話があつて、これを川上總領事から聞いたので、是は面白いからグリーンなり或はチチャコフ將軍を訪ねて久濶を叙し且つ色々話を聞いて見やう、斯ういふ考を持つて居つたが、生憎のことに哈爾濱に到着したのが土曜日の午後である、其翌日曜である、日曜に官衙を訪問する譯にもゆかず、又其翌日が露西亞の祭日で休みである、露西亞は御承知の通り日曜以外一年を通じて五十日餘り祭日があつて、休みの多いので有名な國であるが、さういふことで日曜から露西亞の休み日即ち月曜の朝自分は長春の方に向つて立つたのであるから、是等の人に遇ふことは出来なかつたのは遺憾であつた。哈爾濱には日本人が相當に行つて居るが、大多數は例に依つて醜業婦である、其

他は小さい商賣人が行つて居る、日本の煙草會社員等も居る、併し大體に於て小商人が彼處で成功して居るやうな者は一人も無いらしい、尤も三井物産會社が彼處に支店を有つて居つて、豆の買出しを主としてやつて居る、前にも數回御話した如くに、浦鹽德斯からして約十五萬噸の豆が出たといふことは、其大多數は矢張り三井物産の買出した豆であつて、此仕事が此滿洲に於ては今年より始つて來たものだから、三井物産も北滿洲に就ては益々力を入れるといふ有様で、其支店長をして居るのが河井某といふ人で、丁度自分が川上總領事と一緒に哈爾濱の町をドライブして居つた際に、其店に立寄つて色々面白い話等も聞いた、豆の輸出の状況からすると、三井の店も段々擴張されて縮少するものでは無いだらうと思ふのみならず、斯ういふものが段々進んで來れば従つて他の商業貿易といふやうなことが起つて來るに違ひない、即ち哈爾濱に於ける、日本の商業上の關係等は日々に發展をして行くといふ將來の曙光が今日でも見えて居るやうである、それで我邦人は此哈爾濱といふやうな所に向つては將來餘程注意を拂つてゆがなければならぬ、殊に經濟上北滿洲を決して度外に置くことは出來ないといふことは前にも御話し

たが、此關係から言つても益々注意を拂はなければならぬ所ではないかと、斯ういふ感想を起して來た、併し一體西比利亞あたりの都會は皆さうであるが、東方に出て居る露西亞人等の内には随分無賴漢が多いので、夜分歩くといふ場合に、人殺があるとか何とかいふやうなことがなかく、行はれるのであつて、それは自分が曾て西比利亞を歩いた時分にも屢々經驗して居る、支那人等が度を殺されたなどを見聞したのであるが、哈爾濱も矢張り極く雜鬧した市街は別だが其他の淋しい町などは夜分に出歩くのは非常に危険であるさうだ。

哈爾濱の狀況は大體さういふやうなものであるが自分等は尙ほ長春に於ては燐寸の製造所を見るとか、或は鐵嶺に於ては麥粉の製造所を見るとか、博物館を見るとか、種々なことがあつたが、茲に略することゝして兎に角滿洲では非常に風が強いので、我々は丁度こちらから旅行する折も友人等に、滿洲に行けば埃避けの眼鏡を用意して行かねばならぬといふことを言はれて居たので、如何あらんかと思つて居つた所が、仕合せに自分が旅行する間は、成程埃が非常に立つて所謂黃塵萬丈といふやうな場合を経験もしたが、さりとて眼を開けて居られぬといふ場合に

## 大陸の塵埃

出喰はしたことは餘りなかつた、所が哈爾濱で丁度三井の店を訪問して休んで居つた三十分位非常な風が吹いた、此時には殆ど埃が地平線と並行して吹飛んで居るやうな譯で、所謂咫尺辨せずで、滿洲で人の警戒する名高き埃といふものは斯ういふものであらうかといふ感じを自分は起した、それも非常な埃を感じたのは、丁度滿洲の大體視察を了つて奉天から山海關に行く途中の汽車の中であつたが、強風で従つて砂埃が非常なもので、數時間は汽車の窓から展望しても一閃先も見えないといふやうな状況であつた、名物の滿洲の埃も先づそれで經驗をした。

この外別に滿洲に於て珍しいと自分の感じたことは無いが、何處を歩いても詰り一望千里といふやうな平原であつて、樹木といふものは殆ど見ることが出来ない、稀に例の楊柳が彼處此處に點在して居るに過ぎない、此滿洲の旅行中、奉天から山海關に行く途中は今のやうに半ばは埃に埋められて居つたのであるが、此京奉鐵道の設備が餘程埃に適して居るやうに出来て居る、それはどういふことかといふと窓硝子が青くしてある、是が普通の硝子であれば旅行中の平原言葉を換へて云へば恰も砂漠中を行くやうなものであつて、殆ど黄色い土の色が眼にキラ／＼

## 京奉鐵道の列車

して、或は今の埃で以て全く黄色い煙の中に在るやうな工合で不愉快で堪らぬ、其關係から汽車の窓硝子を空色にしてあるので爲めに非常に神心を爽快ならしめて、外部の風物が能く見得るやうにしたといふことは、特に滿洲の中を通つて居る鐵道として注意の届いて居るものゝやうに自分は感じた、此京奉線の鐵道は其設備等に至つても別段滿洲鐵道會社の鐵道とさう劣ることもない、餘程良く行届いて居るのみならず、今の窓硝子の色を着けてあるといふやうな點も非常に心地良く感ずるし、それから支那の汽車に最も愉快に感ずるのは、右の如き埃が非常に烈しいので、窓等にも充分注意がしてあるが、それでも猶ほ埃を浴びることになるからして、支那流で絶えず熱い湯で手拭を絞つて来て呉れるさうしてそれで汗を拭き又埃を拭ひするといふ、是は日本人のやうな極く潔癖の強い、風呂に這入るのを好むといふやうな人間は、旅行中に無上な愉快を感ずるので、支那人に多少の酒代でもやれば殆ど五月蠅いやうに熱湯で手拭を絞つて來るので非常に愉快に感ぜらるゝ、それともう一つ異様に感ずるのは、山海關附近に來ると各停車場に鐵道線路護衛の爲めに兵隊が居る、其兵隊が汽車が發着する度毎に——停車場に一小隊

位の僅の兵隊であるが——是が整列して一同汽車に向つて捧銃で敬禮をする、是は餘程不思議なことである、どういふ譯でさういふことをするのかといふ話を聞いて見ると、露西亞が此處を占領して居る時分に露西亞の立派な軍人が一等汽車に乗つて居る、其他立派な外國人も乗つて居るといふ譯で、高貴の人が乗つて居る一等汽車には敬禮を施せといふことを吩咐してあつたので其情性が今日まで遺つて我々が一等汽車に乗つて停車場に發着すると兵隊が捧銃で敬禮をする、是は他に於て見ざる奇觀であつた。

山海關

山海關に来て日本の宿屋に一泊した所が此山海關は何にも見物するやうな所も多く無し、名物といふやうなものも別段ないが此處では鮎が大變捕れるので、山海關の鮎といふものは日本人のやうな魚食人種には大變快感を與ふるものらしい、山海關で見物すべきものが「天下第一關」即ち萬里の長城の最東の端が山海關から起つて居るのであつて、長城の一斑を此處で見ることが出来る、自分も到着の翌朝長城に登つて其附近を展望して見たが、なかく景色も佳し、成程萬里の長城は偉大なるものであるといふ感を感じた、兎に角八達嶺あたりに行かぬ人は萬里の長

城を見る爲めに此處に来るので、其處に大きな門があつて、稱して天下第一關と謂ふ額が掲げてある、大に詩文の嗜のある人などは所謂錦心繡腸を揮る所なので、一見するに價值のある處と自分は思つた。

尙ほ色々細かいことを述べれば幾らでもあるが、滿洲の雜談は先づ是位にして、此山海關からして愈々支那本部に這入るといふことになるから、次回からは支那本部に就ての大體の御話をすることにしよう。

第四 支那本部所見

今日から支那本部に關する御話をしたいと思ふ、併し御承知の通り支那本部といふものは非常に廣大なものであつて、到底是が經濟状態とか其他各種の事を詳細に御話することは無論出来ず、のみならず自分が實際旅行した上から見ても支那本部の揚子江以北をざつと歩いたばかりであるので、全體に亘つての御話をすることは出来ないのである、それで支那に關しても歐米人の著書日本人の著書、又支那官衙其他より出る所の各種の報告等がそれ／＼備つて居るので、それ等の參

考書に就ては何れ後に纏めて御話する積りであるが、大體の事は皆それ等に譲つて茲には支那を觀察した上に就ての一部分の御話をしたいと思ふので、支那の御話は寧ろ餘談の方が長くならうと思ふ。

### (イ) 清國行政の概要

先づ第一に支那のことを御話する上に就て、順序として矢張り支那の行政の鹽梅を極く大體御話をしたいと思ふ、尤も此支那の行政組織といふものは中央部は比較的簡單であるが、地方の行政組織になると非常に込入つて居る、殊に明治四十年七月頃に新官制が出て居つて此官制は十五年を期して行ふことになつて居る、そして督撫の考により先づ實行のし易い方面より新官制を適用して行くといふことであるから、今日支那の行政組織の實際は舊官制と新官制との混淆であつて、益々了解に苦しむやうになつて居るらしい、そこでこれ等を一々詳しく御話するといふことは茲には避けて、ホンの大體の所を御話をしたいと思ふ。

#### 一、中央行政組織

先づ支那の中央部の行政組織がどうなつて居るかといふと、第一に宗人府といふものがあつて、是に親王其他清朝の帝室に關係のある方が現今の所では約六名ばかりで以て組織されて居る所のものである、別には是は政治上、行政上に何等の關係を有つて居らぬものである、此宗人府の主席即ち宗令が禮親王である、第二に御前大臣といふものがある、此御前大臣といふものは今日の所では四人で成立つて居るが、其中の二人は親王であり、他の二人は矢張り清國の王室に關係の有る血の續いた所の人である、是等も表面上の行政機關としては何等の資格も有つて居るものではない、其主席が那親王である、第三に内務府といふものがある、此内務府は四人ばかりの人から成立つて居るものであつて、是も表面上の政務に關係する場所ではない、極く内輪の宮廷の事などの世話するものらしい、何れも總管内務府大臣の肩書を持つて居つて其首座が奎俊である、第四に内閣といふものがある、此内閣は主として大學士、學士といふ者から成立つて居るので、現今の所大學士が六名、それから學士が十名、其他に侍讀學士といふものがある、是が七名ばかり、これ程で成立つて居る、張之洞とか、那桐とか或は鹿傳霖であるとかいふやうな人は皆それぞれ大學士の號を有つて居る人で、例へば張之洞が體仁閣大學士とか、那桐が東

閣大學士とか、鹿霖傳が文淵閣大學士とかいふやうな尊號を持つて居る、此内閣は雍正十年頃まで政治の中樞であつたが、現今では日本の内閣といふやうなものではなく、時々出會ふ位に止つて居るので、行政の機關としては別段に勢力を有つて居る所のものではない、第五に軍機處といふものがあつて、此軍機處に内閣に代つて實際の政權を握つて居る五人の大臣がある、前に大體御話をしたと思ふて居るが、此軍機處といふものは日本で云へば本當の内閣に當る所のものであつて、總て清國政府の立法、行政、其他の事柄は皆此軍機處が之を統べ、軍機處から割出されることになつて居るので、官制にも行政の總匯とある現今の所では其大臣として親王が一人と、滿洲人が二人、漢人が二人、此五人で以て之を組織して居る現今此大臣である人は慶親王、世績、張之洞、鹿傳霖、那桐などであつて、張之洞は先達歿したからして、此軍機處大臣署理として戴鴻慈が任命された次第である、第六に會議政務所といふものがある、是は義和團事變に皇帝が西安に蒙塵された節起つたもので、軍機處大臣、内閣大學士各部尙書等によりて組織され、今日では軍機處と殆ど異名同體になつて居る、第七に外務部といふものがある、是が即ち日本で云ふと外務省であつて、此の外務部組織の少しく日本と違ふ所は、外務行政の長官は尙書と稱へるものであつて、此の尙書が日本では先づ外務大臣に相當して居るものであるが、即ち今日の梁敦彥のやつて居る仕事である、然るに清國には其上に持つて行つて又外務部の全體の事務を總理する人が置いてあるので、是は今日は慶親王がやつて居らるゝ、それで普通の外務の事務は無論此尙書が裁斷をして行くことになつて居るのであるが、極く大きな事になれば、隊を容れるといふことであるから、日本の外務省の組織とは少しく異つて居る。

是から以下御話する各部には今申した尙書といふものゝ外に日本で云へば次官といふ風な者が二人づゝ居る、それは左侍郎、右侍郎と稱へるものである、左侍郎、右侍郎と云つても、政務官、事務官といふ區別があるので、無いので、唯何のことはない二人置いてあるに過ぎない、それから其下に左丞、右丞といふものが置いてある、是に相當する所の者は日本には無いやうであるが、大體局長とも謂ふべきものである、其下に參議といふ者が又二名あつて、左參議、右參議といふ者であつて、是が日本の先づ勅任參事官とも云ふ風のもので、是等が即ち各部の大官を組織して居

る。日本で云へばざつと勅任官以上といふことになつて居る。

第八に吏部といふものがある。此吏部は主に文官の黜陟封爵等其他の事を掌つて居るものであつて、是れも矢張り尙書があり、侍郎、丞、參議といふやうなものが具つて居る。第九に民政部といふものがある。此民政部が日本の内務省に略ぼ相當する所のものであつて、肅親王が今日民政尙書としてやつて居らるゝ。第十に度支部といふものがある。是が日本の大藏省に相當するものであつて、其尙書は今日では載澤公がやられて居る。此度支部には侍郎、丞、參議等の役の外に特別の役を持つて居る所の勅任官相當の人が居るので、即ち清理財政提調といふ者が居る。是は各地方に清理財政官といふものを置いて、地方財政の整理をするといふことの御話はおよつとしたやうであるが、詰りそれを統括して居る所の人である。それから大清銀行の總監督といふものと、大清銀行の副監督と云ものがある。此大清銀行のことは後に支那の金融機關の御話をする時分に大體御話をするから、其節に譲つて置く。又造幣總廠の正監督、副監督といふものがある。それから又財政學堂の監督といふものもあるのである。第十一に稅務處といふものがある。是は日本ならば本來度支

部に屬すべきものであるが、清國では別の組織になつて居るやうであつて、督辦稅務大臣、幫辦稅務大臣などといふものがあり、提調といふ風なものがあり、それから總稅務司といふものが之に屬して居る。彼のブレンドン(清名裴式楷)は署理總稅務司として此の處に居るのだ。又稅務學堂總辦といふものがある。此の稅務處は主として海關稅の方の關係から別に置かれて居ることゝ思ふ。其外に北京では御承知の通り城門を這入る折に稅を取る。即ち佛蘭西あたりで謂ふオクトロアールといふ風の稅を取つて居る。此爲めに崇文門稅務衙門などといふものが別に出來て居る。第十二は禮部といふものがあつて、是は曠んで字の如しであつて、支那は禮樂を貴ぶ國であるから、其爲めに特に省を置いて居るものと見へる。第十三に學部といふものがある。此學部は尙書から丞、參議といふもの、それから國子丞、大學堂の總監督とか、其他法政科、文科、醫科、農科、工科、商科といふやうな各種の學校があるが、其學校の監督が其下に附いて居る。此學部は今の尙書の外に尙ほ丁度慶親王が外務部の事務總理をやつて居らるゝやうな關係に於て、監理學部事務といふものがある。是は先達まで張之洞がやつて居つた。第十四に法部といふものがある。是は日本の司

法省に當る所のものであつて、別に説明を要しない。第十五に農商工部、日本の農商務省に當る所のもの、第十六に郵傳部、是が日本の逓信省に相當する所のもの、此郵傳部には例の左右侍郎、左右參議の外に鐵路總局長、上海電政局總辦、總管電政、大清交通銀行總理、同辦理といふやうなものが之に屬して居る、後に金融機關の御話をする折に大體御話をしますが、郵便電信の收入を取扱ふ上から特に此金を預けたり出したりする爲めに交通銀行といふものが出來て居つて、其銀行が詰り郵傳部に隸屬して居るからその監督を郵傳部に屬せしめて居るといふことになつて居る、第十七に陸軍部といふものがある、此陸軍部といふものは尙書といふものゝある上に學部に監理學部事務があつたと同じやうに、監理陸軍部事務といふものゝあつて、是が今日慶親王がやつて居らるゝ、尙書が鐵良である、日本の海軍、陸軍といふ風に相對して二つの省が出來て居るといふ關係から見ると稍々おかしいのであるが、海軍處正使、海軍處副使といふものがあつて、矢張り海軍に關係する事務もやるやうであり、是は支那の海軍が極く微々たるもので特に大なる幹部を置くといふ必要が無い所からさういふことになつて居るのだらうと思ふ、併し此外に籌畫海

軍基礎といふものがあつて、慶親王、肅親王、載澤、鐵良等の人々が之に任じて、支那の海軍の復興といふやうなことに専ら力を盡して居る、尙ほ南北海軍統制官といふものもあるそれから其他に理藩院、翰林院、大理院、といふものがある、理藩院は蒙古、青海、西藏等の藩屬地の行政を統轄するもので、其長官は尙書である、翰林院は國史編修、進講等を掌り、其長官を掌院學士といつて居る、大理院は日本で云へば大審院の如きもので、其長官を正卿といひ、是等は餘り注意するに足らない、行政官府らしい。尙ほ此外に都察院といふものがある、是はなか／＼大きなものであつて、行政會計の監督、彈劾、終審裁判に干與の權を有して居る、都察院に都御史といふものがある、是が都察院の長、其の下に副都御史といふものが二人ある、其又下に御史といふものが居る、日本には丁度斯ういふものはないが、先づ検査院見たやうな風のことになるので、それは會に會計上の検査をするといふやうな意味でない、地方の官吏は無論、中央の官吏にしても、此御史が常に見張りをして居つて、若し不都合があるとかいふやうな場合に始終之を彈劾するといふ役目を持つて居るので、なかなか有力なもので、支那では大概上は大臣より下小官吏に至るまでの任免黜陟



は御史の彈劾に由るといふことが非常に多いのである。此御史は右の如き次第であるからして支那全國各省に亘つて殆ど置かれて居るやうである。其外臨時的の官府としては資政院とか憲政編查館であるとか國史館であるとかいふやうな種々なものがあるやうであるが、特に説明を値するやうなものもない。

それから北京には日本に於て東京府といふものがあると同じやうに順天府といふものがあつて、是に順天府尹、事務府尹、府丞、斯ういふ風なものがあつて、北京の行政權を總て持つて居るといふことになつて居る。

此外に文官で極く臨時の役目を有つて居るものがある。即ち特別差使と稱へて、禁烟大臣とか會辦商約大臣とか、考察憲政大臣とか、考察財政大臣とか、それから變通旗制處大臣といふやうな例で、臨時に阿片のことで或る調査を要するとか、又は憲法の調査を要するとか、財政の調査を要するとかいふ風のことが出る時分には、皆何々大臣といふやうな名で以て派遣する。斯ういふ特別な組織がある。併し茲に謂ふ大臣といふのは前の軍機處大臣などといふのとは餘程意味が違ふのであつて、例へば現今の所では盛宣懷といふ者が上海に居つて、是が會辦商約大臣といふ

ものである。先達日本に來た唐紹儀といふ者は考察財政大臣である。それから李家駒が考察憲政大臣であるが、是等はどれ位の地位を有つて居る人であるかといふと、侍郎即ち次官位の資格の人である。併し是が特別の任務を帯びて或は外國に使用するとか何とかいふことがあると、何々大臣といふ名を附けてあるらしい。

其他陸軍に關しては、日本其他歐米の式に倣つて新式陸軍といふものを組織して居つて、それと所謂八旗の制が今日でも残つて居つて、北京には滿洲八旗、蒙古八旗、漢軍八旗といふやうな軍隊の組織がある。是は極く特別な組織である。北京の中央政府は大體右の組織になつて居るので、是等も尙ほ漏れて居る所のものもあるが、極く大體は間違ない積である。併ながら其職務權限等が日本の如く劃然として一糸紊れずといふ風にやつて居るかといふと、さういふことでもないのであつて、大體は各其主管に依つてそれ／＼處辨して行くけれども、實際に於ては或官衙が他の政務に涉ることもやるといふやうなことも多いやうだ。是等は支那が泰西若くは日本の中央行政組織等を模倣してまだ煮へ切らぬ結果であらうと思ふ。

右御話したことは至極錯雜して居るから、分り易いために行政の主要部分を尙ほ

簡約して示せば先づ斯うである。

外務部	慶親王(總理外務部事務)
吏部	梁敦彥(會辦大臣尙書)
民政部	陸潤庠(尙書)
度支部	肅親王(尙書)
稅務處	載澤(尙書)
軍機處	那桐(同)
禮部	那桐(同)
學部	張之洞(管理學部事務)
陸軍部	榮慶(尙書)
陸軍部	慶親王(管理陸軍部事務)
法部	戴鴻慈(尙書)
農商工部	溥頌(尙書)
郵傳部	徐昌世(尙書)

右中央行政事務分配等の大體の御話をしたから是から地方の大體の事を御話をしたいと思ふ。

二、地方行政組織

地方行政の事は前にも御話した如くに頗る込み入つて居るが現状の處を大體御話して見ると、大概此前三省の組織を御話したのと略ぼ似て居るのであるが、地方官の中で一番重要な地位を占めて居る所のは申すまでもなく總督であつて、其總督は居る處と居らぬ處とがあつて、餘程妙なことになつて居る。例へば直隸總督と云つて直隸省に一人居り、兩江總督と云つて蘇江省と安徽省と江西省と此三つを合併した處に一人居る、即ちそれは南京に居る、前のは天津に居る、陝甘總督と云て陝西省と甘肅省と一緒にしての總督があつて、蘭州といふ所に其政廳を有つて居る、閩浙總督といふものがある、それは福建省と浙江省と此二つを一緒にして一人居るので、其駐在所は福州である、次に湖廣總督といふものが居る、是は湖北と湖南と此兩省を一緒にしたので武昌に駐在して居る、四川省には一人總督が居る、是は成都といふ所に駐在して居る、兩廣總督といふものが居つて、廣東、廣西此二省を統轄して一人居り、其駐在所が廣東である、雲貴總督といふものが居つて、雲南と貴州、此兩方を總括して居り、雲南に駐在所を持つて居る、其他山東省である

とか、或は山西省であるとか、河南省であるとか云所には總督を置いてない、新疆省即ち蒙古の方に寄つた處であるが、其處にも總督は置いてない、せ右等の處に總督を置いて居らぬかといふことに就ては自分は一向知らぬが色々沿革があつてさういふ慣例になつて居るのであらう。

此總督の下に巡撫といふものが居る、是は東三省でも御話をした通りである、此巡撫も省に依て居る處と居らぬ處とがあるので、直隸省の如きは此巡撫といふものは無い、山東、山西、河南、是には各一人宛巡撫が居る、江蘇、安徽、江西即ち西江總督の下には一人宛各省に亘つて巡撫が居る、陝甘總督の下には甘肅省の方には巡撫といふものは居らなくて、陝西省の方に巡撫が一人居るといふことになつて居る、それから新疆省であるが、其處には一人巡撫が居る、又閩浙總督の下には、福建には巡撫といふ者は居らぬが、浙江に巡撫が一人駐在して居る、湖廣總督の下には湖北省には巡撫は居らぬが、湖南に巡撫が居る、四川省には巡撫は居ない、兩廣總督の下には廣東には居ないが、廣西省に巡撫が居る、雲貴總督の下には、雲南には居らぬが、貴州に巡撫が一人居る、斯ういふことになつて居る、巡撫の駐在して居る場所を云ふ

と、山東省の濟南、山西の太原、河南の開封、江蘇の蘇州、安徽省の安慶、江西省の南昌、陝西省の西安、新疆省の迪化、浙江省の杭州、湖南省の長沙、江西省の桂林、貴州省の貴陽である、斯ういふ風に餘程妙な官制になつて居る。

次に布政使といふものが居る、此布政使は各省に亘つて必ず一人宛駐在して居る、又提學使といふものが居る、此提學使は此前に御話した學務の事を掌つて居る者であるが、是も各省に亘つて一人宛は分配されて居る、それから按察使といふものがある、是れは主として司法の事を掌るものであるが、此者が新疆省を除いては各省に一人宛分配されて居る、其以下になると鹽運使、交涉使、清理財政監理官——鹽運使といへば支那は鹽が專賣になつて居るから其鹽の方の長官であるし、交涉使は前に御話した外交の長官であるし、清理財政監理官は財政清理の爲めに置かれて居る、さうして此者が各所に適宜に分配されて居る、けれども必ずしも此三官が各省に皆居るかといふと、さうではないのであつて、清理財政官といふものは前に御話した如くに清國の地方財政を整理するといふ目的で置いてあるのだから、各省に亘つて分配されて居るやうであるか、鹽運使といふやうな者は鹽の出来る

其場所のみに居るので、例へば直隸省に居る、山東省に居る、江蘇省に居る、浙江省に居る、廣東省に居るといふやうなことで、其他には此者は居らぬ、交渉使といふものは是は居る所が極めて少ないのであつて、直隸省と雲南省に居るだけである、さうすると交渉使の名を持つて居る者は支那全國を通じて現今滿洲に一人と、直隸雲南に各一人と斯ういふやうになつて居るのである、其下には道臺といふものが居つて、此道臺は各州に居る、例へば海關道とか或は清河道とかいふものがあるし、勸業道其他巡警道督糧道など、各職務に依つて區別された各種の名目を持つて居る道臺が各省に居る、是も必ずしも各省同じ種類の道臺がスツカリ揃つて居るといふことではないので、其省の必要と便宜に依つて居る所もあり居らぬ所もあり、各種になつて居る、例へば上海の如きは上海の海關道といふものが居つて、それが總て上海の事をやつて居るといふやうなことである。

文官の極く大きい所は右の如き鹽梅に配置されて居るので、此下になると所謂府とか縣とかいふ風なものがあつて是等に各々知府が居るとか、或は知縣が居るとか、いふことになり尙ほ其下の行政區劃になると各種の名目の附いたものがある。つて、殆ど枚舉に堪へぬ程居る。

以上文官の方であつて、武官の方では、將軍都統が各部に置かれて居る、是は前にもたしか話したかと思ふが、清國が明を滅して支那を統一した際に各々重要な場所を持つて行つて、滿洲人の將軍と云ふものを駐屯さして置いて、清朝に向つて反旗を擧げるとか、いふやうな者があれば直ちに事を未然に豫防するとか、或は事が起れば之を征伐するとかするので、日本の徳川氏が大名を鎮撫する上に就て自分の親藩とかいふ風なものを各所に配置したとか、或は坊主を各所に配位して其動作を探つたとかいふやうなやり方をしたと詰り同じ性質のものである、今將軍の居る所が東三省は前に御話したが直隸省に熱河と張家口とに二人居る、此直隸省に居るのは將軍といふ名でなくして、都統といふ名になつて居る、其外の所は山西省に一人、江蘇省に一人、陝西省に一人、甘肅省に一人、新疆省に一人、福建省に一人、浙江省に一人、湖北省に一人、四川省に一人、廣東省に一人、各々將軍が置いてある、此將軍の下には副都統といふものが一名若くは二名配置してある、是で陸軍の方は總て統卒して居る譯になつて居る。

此外に提督といふものが居る、元來支那の兵制は八旗、綠營、鄉勇の三者に區別されて居る、此綠營の指令長官が提督といふので、是は將軍が滿人であるに反して漢人である、現今提督の居る所が直隸省、江蘇省、陝西省、甘肅省、新彊省、福建省、浙江省、湖北省、湖南省、廣東省、廣西省、雲南省、貴州省である。

右の如き文武の大官の配置で以て支那の地方を統括して居るのであるが、此外に尙ほ邊疆大官といふものがあるので、是は主として蒙古であるとか、滿洲、西藏、青海等の所謂邊境に居つて文武の權を統括して、其地方を抑へて居るのである。

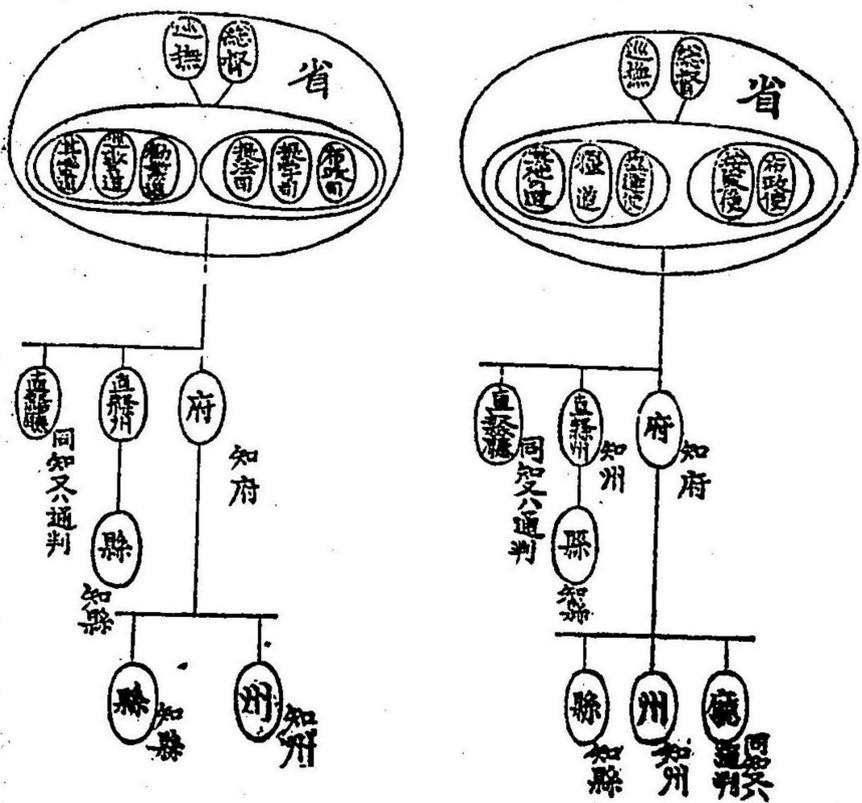
右は支那の現況につき御話したのであるが、前にも話した通り現在は新舊官制混淆に成つて居るのである、地方文官の組織を尙ほ分り易いために新官制に依りて略述して舊官制と比較して見やう、新官制は明治四十年七月七日に外省官制として發布されて居る、これに依ると、總督は一省又は數省に置き、外交、軍政、文武官統轄、地方行政事務總理の權を有し、巡撫なき場合には巡撫事務を兼管することになつて居る、巡撫は各省に一人是を置き、地方行政總理、文武官統轄の權を有し、總督なき場合には外交、軍政をも掌る、總督あるときは其訓令を受くることになつて居る。

巡撫の下には秘書、交涉科、吏科、民政科、度支科、禮科、學科、軍政科、法科、農工商科、郵傳科、參事員等の行政機關を備へて居る、各省に三司を置き、布政司、提學司、提法司と名付け、布政司は戶口、強理財賦、地方官吏考核等の職權を有し、提學司は教育事務、提法司は按察使に代りて司法事務を掌ることになつて居る、各省に又二道を置き、勸業道は農工商、交通、驛傳事務を巡警道は巡警、消防、戶籍營繕、衛生事務を掌り、又地方の情況によりては鹽運司、鹽茶道、督糧道、關道、河道等を置くことになつて居る。

地方區劃は是を府、直隸州、直隸廳に分ち、府には知府を置き、府の下に州あり、知州を置き、州の下に縣あり、知縣を置く、直隸州の長官を知府とし、其下に縣あり、知縣を置く、直隸廳の縣を有するものは州に編入し、縣なき直隸廳には同知を置く、各直隸州、廳、州及縣には警務長、視學員、勸業員、典獄員、主計員を置き、尙ほ釋奠、灑掃の爲文廟奉祀官一名を置くことになつて居る、尙ほ府廳州縣議事會、董事會、高等審判廳、地方及初等審判廳を漸次置くことになつて居る、此新舊官制を圖面で示せば大體左の通りである。

大體の所、省が十八で、府が百八十三、縣が千四百七十といふことである。

新官制 舊官制



右のやうな次第で地方の行政といふものが出来て居るのであるが、尙ほ行政等のことに就ての説明は支那の書物にも色々書いてありまするが、千九百八年に出来た書物で、モールズといふ人の書いた『支那帝國の貿易及行政』といふものがある、此書物を見ると其四十六頁以下に於て稍々詳細なる説明が下してあるからして、尙ほ詳しいことを知らんと欲する人は少しは古いが此書物に就

て見るのが比較的簡明であらうと思ふから、此書物を推挙して置いて行政制度のことは是で御話を止めて置きたい。

(口) 清國財政の概要

次に財政のことに就て極く概要の御話をしたいと思ふ、此財政の事に就ても前に御話したモールズといふ人の書物に比較的詳細なることが書いてある、尤も支那の財政は非常に混沌として居り、且つ秘密の事が多いのであるからして容易に之を知ることが出来ない、又中央の財政の大體は多少之を知り得るとしても、地方の財政の状況がどういふ鹽梅であるといふことは、地方の同に當つて居る者以外には殆ど何人も之を知らぬといふことを断言しても宜いのである、清國中央政府に於ても地方の財政が如何になつて居るかといふことは承知しないのである、それが故に屢々御話する清理財政官といふ者を各地に置いて地方の財政の状況を調査して居るといふことである、支那の歳入といふものが大凡どれ位あるかといふことに就ても種々な説があるのであるが、モールズの擧げて居る説に據ると、支那の歳入全體が約一億三千萬兩といふことになつて居る、其歳入の主なる項

目を舉げて見ると、第一に地租、是が約二千五百九十萬兩ばかりになつて居る。第二が各種の割賦金である、是が約七百五十萬兩。第三が内地の關稅、是が四百萬兩程になつて居る。鹽の免許料が千二百六十萬兩、外國稅關即ちブレンダンの支配して居る稅關の收入が約三千五百十萬兩ばかり、釐金稅が約千三百九十萬兩、其他各種の稅が三百八十萬兩といふことになつて居る。

それから歳出の方が總體で一億三千六百五十萬兩になつて居つて、此歳出の主なるものを言つて見ると、第一が穀物の運搬に要する費用であつて、是は清國に於ては現金で稅を納めるといふ主義にして居るが、尙ほ現品を以て稅を納めるといふことが残つて居るので、それ等に對する各種の費用が掛る、それが約五百八十萬兩位になつて居る、それから邊境防禦の費用が約五百四十萬兩、海軍の基金が百四十五萬兩、陸海軍其他の費用が約二百二十萬兩、砲兵工廠の費用が三百四十萬兩、黃河其他防砂工事等の費用が約百四十萬兩、外國稅關の諸費並に燈臺の諸費等が三百九十萬兩、地方行政の爲に要する俸給其他の諸費用が約三千四百萬兩、それから外國債等に對して拂ふ利子、手数料等を合計して四千二百萬兩、斯ういふ風のもの

が主なるものであつて、其他尙ほ細目の費用があるが、大體斯ういふことになつて居るやうである。

それで此數字に依つて見ると、歳出の方が稍々歳入に超過して居るといふ有様になつて居るが、此超過歩合は清國に於て又臨時に各省等に割賦して、填補をして居るといふのが慣例であるらしいので、清國の中央財政といふものは右の表に據つて見るとあの太國にして僅に一億四千萬兩位な費用で以てやつて居るといふことは、誠に同國の總ての行政が振はぬといふ證據でもあるのみならず、一方から言ふと、如何に地方の財政が紊亂して、地方で以て各種の獨立した經濟を立て、居るといふやうなこと等も豫見することが出来るので、それで此收入の點から云ふと、大體清國に於て法令に依る率で以て、又其規定に依つて極く嚴格に收入を舉げて往くといふことにすれば、非常な額に上るのであるが、併し事實此稅は地方で多くは消へて居つて、中央の歳入が非常に少いといふ事實になつて居る。此根本の中央政府の收入、支出の大體に就て改良を加ふることをしなければ、逆も清國が其隆盛を希望することが出来ぬので、此點に就ては清國政府も無論氣が附いて居る。

ことで即ち屢々言ふ清理財政官といふものを地方に出して、地方の財政の統一を圖り、地方と中央との財政の聯絡を極く明確にするといふことを銳意企圖して居るのである。併ながら是はまだ其緒に就くといふ譯にはいかぬので、幾年先に此成績が擧るかといふことは何人と雖も豫言することが出来ない。

今御話した如くに清國の中央政府に集つて來る所の歳入が實際非常に少いといふ一例として斯ういふことがある。地租は僅に二千五百九十萬兩位な中央政府の収入であるがサー、ロバート、ハートの如きは、今日現に行はれて居る所の支那の地租の率に依つて、正確に支那全體に向つて其税を徵收することが出来れば此地租だけでも約四億萬兩は取れるであらう。斯ういふことを言ふて居ると云ふ、又其他の人も或は三億五六千萬兩位は必ず徵收が出来るとであらうといふことを言ふて居るので、其事實徵收して居る所と、徵收さるべき額とは右の如く非常なる懸隔を來して居る。此の如き懸隔が何に由つて起るかといふと、申すまでもなく支那の地方の官吏が數階級に亘り税を徵收する上に於て私囊を肥すといふやうなことが一番に關係をして居る。モールヌなどの書物を読んで見ると、貨幣交換打歩の作

用等に依つて地方の官吏が納税の上に就て儲けをするといふことが非常の額らしいので、それは滿洲の幣制のことを御話をした時分にちよつと述べて置いたと記憶して居るが、支那は貨幣制度が統一をして居ないので各省、各州、各府各縣到る所に違つた貨幣が通用して居つて、此貨幣を一々換算をして往かなければならぬので、最初税を徵收した其處の貨幣を假に北京まで送るまでには十遍も十五遍も他の貨幣を潜らして行くといふことになる。さうすると其間に交換打歩といふものが非常に生じて來る。其歩合は地方官其他收稅官の所得になるといふやうなこともある。其他手数料とか何とかいふ名義で收稅吏、地方官の各種の段階を経る毎にそれ／＼税額がへつられて往くといふことであるからして、地租の如きは三億五六千萬兩乃至四億萬兩も取れるものが、北京の國庫に遁入るまでには僅に二千五六百萬兩と云ふことになつて來る。是は實に地租のみならず、其他の收入に就ても右の如きことが大分あるであらうと云ふことは像想せらるゝ。唯收入の中で外國税關の収入だけは是は詰り支那の税關は英國人の請負になつて居るので、即ちサーロバート、ハート以來ズット英國人がやつて居ることになつて居るからして、其



數字が稍々正確であるといふことだ。

右の如き状態であるからしてどうしても支那の財政の鞏固を圖らうとするには、地方部の財政の整理改革といふことをせねばならぬのであつて、清國が清理財政官を置いて右の整理改革に着手をしたといふことは餘程頼もしいことなのである。併ながら右の如き悪習慣は清朝になつて起つたことではないので、容易に之を改革することは出来ないのみならず支那の如き廣大なる疆土を持つて居つて、中央政府の總ての權力權能が薄弱である所で、なか／＼十年や二十年で右の目的を達するといふことは、所謂黄河の清むを待つといふやうな感があるので、清國でも物の分つた人は勿論、外國人等は其點に就て如何にして支那が財政を整理するかといふことの問題に對しては何人も明確なる答を與ふことは出来ないといふ状況である。

右の如き清國の財政状態であるからして、其詳細なことに至つては何等研究した者も無いのであつて、又假に之を研究するにしても、非常な日月を費さなければ其真相は分らぬので、清國財政の模様を知らうと思ふ人は、前に申したモールヌの

書物の八十頁以下に書いてあることを通覽すれば極く大體の觀念が得らるゝだらうと思ふ。

### (ハ) 清國公債の概要

財政のことを御話する序に清國の公債のことを少し詳しく御話をして置く必要がありはしないかといふのは、清國が公債を持つ抑々の初は則ち二十七八年事件であつて、事件の結果として多大の公債を歐米に於て募集し、其以後又北清事件でも公債を起したる外、尙ほ鐵道敷設等の爲めに公債を起して外資に依つて清國が仕事をし來つて居るので、後に此清國に於ける交通機關の大體を御話する上にも關係をすることであるから、公債のことを爰で御話をして置きたいと思ふ。

支那の公債の事歴は一面から之を能く研究すると外交の歴史であつて、從つて茲に支那の公債のことを詳しく説明するといふことは既往の事には屬するが、外交關係のことになるので御話することを遠慮すべき點が多い、併ながら支那の公債のことを研究することは餘程面白いので、今言つたやうに此國の公債は悉く國と國との關係から原因して出來て居るので、特に此事を研究する人には非常な

る快味を興ふることであらうと思ふ。

清國が既に持つて居つた公債の中で約二千三百萬兩位のものがあつたのであるが、是は償還済となつて居る。此公債も何れも外交上から來た公債であるか、此歴史は茲に御話することを省いて置いて、現に残つて居る所の御話をしたいと思ふ。現に残つて居る公債の額は大體一億三千六百二十四萬磅である。是が先づ支那の公債の現存して居る金額と見ることが出来るだらうと思ふ。此公債は之を大別すると、國際關係の事から生じて來た所の公債と是も或意味に於て國際關係のものであるが、鐵道の公債と、此二つに大別することが出来るのであつて、第一に擧ぐべき公債は千八百九十四年に募つた公債であつて、其額が百六十三萬五千磅、是は七分利附、十年据置きで千九百十四年に償還するといふことになつて居る。借入先は香港上海銀行であつて、關稅が擔保になつて居る。第二次には千八百九十五年に起債したものであつて、此金額が百萬磅、年利六分で、据置六箇年、十五箇年間に年賦償還をする。此公債は怡和洋行即ちジャーデンマデソン商會から借りて居る。第三次に同額の百萬磅、是も矢張り千八百九十五年に起債して居る。此公債は瑞記洋行と

いふものから借りて居つて、年利六分で、矢張り前の公債と同じく六年据置、十五箇年に償還をするといふことになつて居る。第四次が同年に矢張り起債したものであつて、三百萬磅といふものがある。此三百萬磅は矢張り利子が六分であつて、香港上海銀行から借りて居り、五年据置、十五箇年賦で償還するといふことになつて居る。第五次は千八百九十五年に露國の保證で以て佛蘭西に於て千六百萬磅といふものを募集して居る。是は利子が四分で、三十六箇年賦、第六次に尙ほ千八百九十六年に千六百萬磅といふものを五朱の利息で以て獨逸及び英吉利から借りて居る。是も償還期限は前のものと同様であつて、三十六箇年に年賦償還をするといふことになつて居る。第七次に千八百九十八年に尙ほ英獨兩國からして千六百萬磅の公債を募集して居る。其利率が四朱五厘であつて、四十四五箇年に之を年賦償還するといふことになつて居る。以上述べた公債は日清戰爭の費用並に償金に充つる爲めに募集したものであつて、總額が五千四百六十三萬五千磅の内未償還額が約四千六十七萬磅である。此等は皆海關稅が擔保になつて居る。第八次に團匪事件の列國に對する償金四億五千萬兩を得るため公債を起して居る。是が千九百一年で

あつて、此公債には五種類あつて、即ちA B C D Eと斯ういふ名稱になつて居る。此中Aの公債が千二百二十五萬磅、Bの公債が九百萬磅、Cの公債が二千二百五十萬磅、Dの公債が七百五十萬磅、Eの公債が千七百二十五萬磅、此各種の公債の利率は四朱であつて三十九年賦償還の方法になつて居る。是が即ち債金を拂ふことに對して公債として支那が負擔して居る所のものであつて、此中には即ち我邦に拂ふべき額も含まれて居る。此四億五千萬兩の中約千二百萬兩は償還濟になつて居る。尙ほ米國の債金減額が約二千萬兩位あるであらう。此公債を發行して猶ほ爲替其他の關係、又金銀相場の變動等に依つて茲に不足が出じて來るといふことからして、補充公債として千九百五年に百萬磅といふものを五朱の利子で、二十箇年償還といふことで、香港上海銀行から借りて居る。是が先づ團匪事件に關係した公債と云ふても宜い種類になつて居る。

第九次に千九百五年に郵傳部公債といふものが出て居る。是は其額が五百萬磅であつて、利子が五朱になつて居る。此郵傳部公債のことは後に鐵道のことを御話する時分に猶ほ能く御話する積りであるが、即ち京漢鐵道買收の爲めに郵傳部が

英佛銀行から借入れた所の者であつて、清國政府は此鐵道を白耳義の資金に依つて建設して居つて、其の額が佛蘭西の貨幣にして一億千二百五十萬法其上に更に千二百五十萬法といふものを借入れて居つた。此一部分を右の公債募集金で以て償還をするといふ爲めに公債を起したといふことになつて居る。是等の公債に對しての償還の擔保としては、例に依つて海關稅其他の釐金等が遣入つて居る。次に千八百九十八年に北京牛莊鐵道を敷設する爲に、五朱の利附で以て二百三十萬磅を借りて居る。千八百九十六年に東清鐵道の爲めに六朱の利子で以て五百萬磅を借りて居る。千八百九十八年に京漢鐵道の爲めに五朱の利子で五百萬磅といふものを借りて居る。又千八百九十八年に正太鐵道の爲めに、同じく五朱の利息で四千萬法といふものを借りて居る。千九百四年に汴洛鐵道の爲めに、五朱の利息で二千五百萬法といふものを借りて居る。千九百四年に滬寧鐵道の爲めに、五朱の利息で二百九十萬磅といふものを借りて居る。千九百五年に新奉鐵道の爲めに三十二萬圓といふものを五朱の利子で借りて居る。千九百七年に吉長鐵道の爲めに、五朱の利息で二百五十萬圓といふものを借りて居る。同年に九廣鐵道の爲めに、五朱の

利息で百五十萬磅といふものを借りて居る。又同年に粵漢鐵道の爲めに、五朱の利子で百十萬磅といふものを借りて居る。千九百九年に五朱の利子で津浦鐵道の爲めに五百萬磅といふものを借りて居る。千九百七年に滬杭甯鐵道の爲めに五朱の利子で百五十萬磅といふものを借りて居る。是等の鐵道の借款のことに就ては、後に鐵道のことを御話する時にもう少し詳しく御話をするからして、國債の部類では大體其類だけの御話をして置く。

之を要するに清國の公債は、悉皆外債であるといふが其特色で、總額一億三千六百二十四萬圓の内大數上一億千三百萬磅が生産的公債で二千七百萬磅が生産的公債と云つて宜しいのであつて、今日と雖も清國の公債は此國の全體の富に較べて見るとさう多額とも思へぬので、日本が今日外債を有つて居ることが約十三億位であるが、日本が有つて居る外債の高は殆ど其額を支那全體の公債と同じうして居るといふことであるからして、此公債の側からして清國に對してさう悲觀するまでのこともないであらうと思ふ。併ながら清國として考へなければならぬのは、此公債の利息を假に五分としても六千七八百萬圓といふものを外國に正金を

輸出しなければならぬといふ關係になるので、なかなか重大なことであらうと思ふ。

此清國の公債のことは別段に詳しく書いてある書物といふても無いやうであるが、例の政治家年鑑等にも出て居るし、前に述べたモールヌの書物あたりにも出て居るやうに記憶して居る。其數字に至つては大體に於ては一致して居るが、多少の相違はあるといふことは免れないので、總て支那のことはさう正確な數字で以て示すことは出来ぬのであるから、其點は讀者に注意をして貰はなければならぬことであらうと思ふ。

### (三) 幣制問題

支那の財政の事を御話をするに當つて特に御話をして置かねばならぬことは、所謂支那の幣制問題であるので、國際條約に於て清國が幣制を統一し、度量衡を一定するといふことは強要されて居ることであつて、清國としては此條約の義務を成べく早く果さなければならぬし、又列國が利害關係上、度量衡を一定せしめ貨幣制度を統一さすといふことを成べく早く實行せしめなければならぬといふ状態に

在るので、此事に就ては種々議論の多いことであつて先年亞米利加のゼンクス氏が日本に渡來した時分に、日本の財政經濟部面の當路者を訪ふて、親しく此支那幣制に對する意見を圖はし、又自ら清國に行つてあちらの財政當局者等に遇ふて其話をしたといふことがある。又清國に於ても此點に就ては今申した條約上の義務があるを以て、色々研究を重ねて居り、殊に昨年であつたか唐紹儀が財政考察大臣として日本に來り、又米國其他を遊歴したといふ、其任務の中には此幣制の事を調査することもあつたらしいので、唐紹儀などは支那の大官中特に此幣制の事を研究して居るらしい。

併ながら支那の幣制を統一するといふことは困難中の困難であつて、先達自分が彼地に往つて色々大官を訪問して幣制統一問題に就いて話をした際に、彼地の人の言つて居るのには、此事に就ては充分研究を重ねて居るが、要するに清國は今日の所、金貨本位を取るといふことは出來ない、矢張り銀貨本位で、銀で以て先づ統一をして行くといふ大體の方針が定つて居る、併ながら銀とすれば何を單位とするか、例へて見やうならば、弗を以て單位とするか、或は兩を以て單位とするか等の

問題が今日當面の研究問題となつて居るといふやうな話をして居つた、多少其點に就ては清國政府も心配をして居ることであらうと考へらるゝ、併し自分の見る所を以てすると、なか／＼清國の幣制統一といふことは非常な困難なことであつて、此事が五年や十年の間に實行さるゝやうな望が殆ど無いではないか、若し關係諸外國にして幣制統一の無い爲めに非常に不利益を蒙つて居つて、成べく之を早く實行さすといふことになれば、餘程人爲的手段を執つてやらなければ、自然の傾向に任して置いてはなか／＼むづかしいことであらうと思ふ、其むづかしいといふ理由は種々あるが、

第一には幣制を統一するといふ爲めには資金を要するといふことがどうして必要であるので、是は日本に於ても經驗して居ることであるし、韓國の部に於て前に御話したが、目賀田顧問が幣制の統一をやる、あの小さい經濟の上に就ても猶ほ多くの資金を要したので、此資金が如何にして調達されるかといふことが是がマア餘程問題である。

第二に幣制統一をするといふことには、中央の金融機關といふものが是非整備

しなければ出来ないことであつて、例へば日本の幣制を統一して今の整備を來したといふことは、矢張り日本銀行といふ制度が出來て、さうして其働に依つて始めて此幣制統一の實效が擧つたといふやうな譯であつて、此銀行の設立を要するのである。併し清國に於て中央銀行の設立といふことは餘程困難なことであり、又日本銀行の如き機能を爲す中央金融機關を作るといふ考がなかく、清國人の多數には頭に入らなかつて居らぬやうに見受けらるゝのである。

第三には、正貨準備であるとか、又は爲替基金の調達であるとか、斯ういふことが必要であるが、是等も前に御話したと同一の理由で以て、なかく、今日是が出來やうにも見えない。

第四に考へて見なければならぬのは、常に御話して居る如くに清國では各種の銀行又は錢舖とか、票莊とかいふ種類のもものが澤山あつて、勝手に紙幣を發行するといふやうなことをして居るが、之を全く止めて仕舞はなければならぬが、此事も久しい間の情性になつて居るので、なかく、容易なことではない。

第五には、清國に於ては御承知の如く外國貨幣が澤山通用して居るのである。此

外國貨幣の通用を禁止しなければならぬ。例へば紙幣にしても日本からも正金銀行が往つて紙幣を出して居る、それから香港上海銀行が出して居るとか、或は獨亞銀行が出して居るとかいふ風に、各種の紙幣を出して居るのみならず、又外國貨幣も自由に出入して使用されて居ることになつて居るから、之を禁止するといふことをしなければならぬ。是もなかく、困難な仕事である。

第六には、今日の所では貨幣を鑄造するといふことは中央政府が一手で以て之をやつて居るのではないので、或は各處の總督が適宜に鑄造權を有つて居るといふことになつて居る。是等を矢張り制限をして、貨幣の鑄造權をすつかり中央に集中して仕舞ふといふことも、理窟は出來ることであるけれども、實行上餘程困難である。

第七には、清國の如き警察權が普及して居らぬ所では、本位貨幣を定めて之を發行するとした所で、通貨の偽造贋造とか、或は私に之を鑄造するとかいふ等のことを防遏することは、是は殆ど困難であつて、到底見込の無いことではないか、殊に注意すべきは警察のことであるが、清國に於て今日は日本の制度に倣ふて主なる都

會等には警察制度も行はれて居るが、自分は殆ど形態だけを寫したものであつて、其働は餘り仕て居らぬかの如くに見聞して居る。又清國人の性質とし又今日の政府の狀況として、此警察が完全に行はれるといふことはどうも想像し難いのである。それ故此考から見ても餘程困難である。

第八には、清國人が今日文明の狀況に達して居るといふ者もあるが、併し大體に於てまだ世界的の財政とか金融とかいふやうな頭を有つて居る清國人はどうも見出すことが出来ない。尤も上海に居る盛宣懷の如きは随分經濟思想を有つて居る有力なる人のやうに聞いて居るが、併し右の如き人が幾人あるかといふと、まだ今日の所では容易に之を見出すことが出来ないであつて、詰り確實の幣制を施すとか、或は中央銀行を設けるとか、其目的を達する爲めにやる手段方法を執る上に就て、之を能く運用して往く人を得ることが出来ない。是等の人を得るにはなか／＼二年や三年で養成が出来るとはないのであつて、假令制度が出来たとしても、運用する人がなければ實行が出来ぬといふことになるのであるから、此點から云つても餘程むづかしいことではないかと思ふ。

其他色々あるが、先づ大體右等の理由に依つて清國が今日幣制を統一するといふことは甚だ困難なことゝ信ずる。尙ほ皮肉な論評をする人は斯んな事をも云ふて居る。第一に幣制を統一するといふことになる。と商賣人が困るといふことがあるので、それは前に清國の商賣人の特質の御話をした時分に、貨幣の種類の数限りないのを利用して、其相場の差を巧みに儲けて居るといふことを言ふたが、どうも此事は疑ふべからざる事實らしいので、若し幣制が統一をして或一定の通貨を遣ふといふことになれば、商賣人は是等の利益を悉く失ふといふことであるから、商賣人は何を苦んで今日幣制の統一といふことを欲するか、却て統一したら困るといふやうなことになるはしないかといふことがある。それから第二には、是も前に御話を置いて置いたが、支那の官吏が幣制の統一といふことを大體に於て欲しないといふことではなからうか、即ち右の各種の貨幣の相場に依つて支那の地方の役人等が利益をして居るといふことは、是も殆ど公然の秘密になつて居るのであつて、右の如き状態の所で幣制が一度に統一されるといふと、是等の利得といふものが無いことになるのであるからして、先づ地方の役人等は此幣制の統一といふこ

とに就ては餘り利益を蒙らぬといふことである。假に清國に於て最も有力なる商賣人又は官吏が之を欲しない、却て其不利益になるといふことであれば、此幣制統一といふことをさう熱心にやるやうなことは困難なことではなからうか。此幣制統一を支那に就て考へると、國の債權債務の關係上とか或は極く將來を慮つた貿易上の關係とかいふので、幣制統一といふことが必要であるが、目下の状態に於て支那が幣制を統一しないと不利益があるかといふと、さう目立つた著しき不利益はないのであるから、斯ういふやうな極く卑俗な點から考へて見ても支那の幣制統一といふことはなかく二年や三年で行へるものでないのであつて、若し幣制統一といふことがありとすれば成文上或は近き將來に於て出来るかも知れぬが、其實行されることは多くの星霜を俟たなければならぬことではないかと、斯う考へらるゝ。

清國は右の如き幣制々度の状態であるからして、能く世人が滿洲の幣制を統一しなければならぬ、即ち銀にしなければならぬとか、或は金にしなければならぬとかといふ議論をする人があるが、是は右の如き大體の趨勢から推して見ると、滿洲は主として日本が彼地に往つて經營をして居ると云ふても、大體支那の主權の下にあつて、清國人が大多數に住居して居るやうな處に持つて往て、彼處の幣制を統一することは到底出来ないといふことは能く分りはせぬかと、斯う考へらるゝのである。

右の如き状態であるから支那の幣制統一といふものは甚だ困難であるが、併し支那の幣制が統一しないと、いふと清國に對する貿易國は非常に不利益を蒙るのであつて、清國人殊に清國の商賣人が幣制不統一の爲めに不利益をするといふ反對の意味に於て、開明國がそれ等の點に於て常に不利益を蒙つて居るといふことであるから、一日も早く清國の幣制統一といふことは望ましいことであるので、今日の如き状態で遷延するといふことは甚だ遺憾であるからして、是は識者が何とか相當の方法を設けて、成べく早く清國をして條約上の義務を履行させるといふことにしなければ、大體に於て非常な不利益なことではないかと考へらるゝ。

### (本) 清國貿易の概要

次に貿易のことに付て、是も極く大體の處を御話して置きたい、それは支那の國



勢を見る上に於て大體の數字を知つて居ることが必要であるから御話をするのである。其細かいことは、上海で貿易に關する税關の報告が出て居つて其報告は十年を一纏めにしたもので、毎年出るもの、又は一箇月毎に出るものといふ各種の統計書が出て居つて、是は皆英文で記述され、比較的支那の統計では正しいものであるが、之を見ると貿易の大體は無論のこと、各開港場に於ける貿易に關する詳細なること、又各商品に關する所の消長等は詳しく分るからして、若し、清國貿易に付て研究されんとする所の人達は第一に此報告に據られることを希望する。又参考の爲めに申して置きたいのは、英吉利文としては倫敦で發行して居る所の領事報告書といふものがあるので、即ち支那の事に付て言へば清國の各開港場には殆ど領事が駐在して居る、其領事が常に貿易状況及關係の事項に關し詳細なることを政府に向つて報告をする、其報告を商務院から印刷をして出して居るものがある、是が數字のみならず其事柄に付て相當な説明が與へてあるもので、貿易のことを知るのには宜い参考になる之を第二には見なければならぬ、此等貿易關係の書類で先づ大體を知り、踐込んで實地の商賈をやるとかいふやうな人は、又それ／＼其道の

専門に就て詳しく調査することにすれば、支那に向つての貿易をやるといふ上に付て、さう大なる間違ひがなく進んで往くことが出来ることゝ考へらるゝ、故に特に右等の印刷物と貿易のことを御話をする前に紹介をして置く。

それで清國の外國貿易の總計が幾らになつて居るかといふと、最近の統計は千九百七年のが今日分つて居るばかりであつて、其以後はまだ統計書が出来ぬから分らぬ、其千九百七年の統計書に依るといふと、輸出入總計が約七億六百萬兩、是は香港兩、此中で輸入が四億二千九百萬兩、輸出が二億七千七百萬兩、斯ういふことになつて居る、さうして此貿易の進歩の度合を見ると、丁度十年前の千八百九十八年の貿易金額が三億八千七百萬兩になつて居る、即ち十年間に貿易の發展が約倍達したと斯う言へるので、支那の貿易は漸次發達して居る。

此貿易が如何に各開港場に分配されて居るかといふことを見ると、安東縣が約四百七十六萬兩、大連が千三百八十三萬兩、牛莊が三千二百二十九萬兩、天津が九千六百七十七萬兩、芝罘が二千八百六十四萬兩、杭州が二千八百六十三萬兩、重慶が二千七百萬兩、宜昌が六百五十萬兩、長沙が七百三十萬兩、漢口が一億一千五百萬兩、九

江が三千萬兩、蕪湖が二千百三十九萬兩、南京が一千四十萬兩、鎮江が三千二百四十萬兩、上海が一億三千七百萬兩、寧波が二千五百萬兩、福州が千九百萬兩、廈門が千七百六十萬兩、汕頭が四千五百三十六萬兩、廣東が一億三百七十八萬兩、九龍が五千四百三十八萬兩、ラツバが千七百萬兩等であつて、其他開港場が十箇所餘もあるが比較的貿易が小さい。

右の計數に依つて見ると、支那の何れの地方が最も外國貿易が旺盛であるかといふことが一目して分るだらうと思ふ。

尙ほ如何なる貨物が輸出入するかといふことの極く大體を述べることが清國貿易の大體の觀念を得るに付て必要であらうと思ふから、同じく千九百七年の貿易の輸出入の物品に付ての梗概を御話をしやうと思ふ。

輸入の主なるものを擧げると

- 綿織物類 一億千八百九十二萬兩
- 米 三千四百四十一萬兩
- 阿片 二千八百六十五萬兩

- 砂糖 二千六百三十五萬兩
- 石油 千九百九十九萬兩
- 金屬類 千九百九十四萬兩
- 麥粉 千三百九十八萬兩
- 鐵道用品 千二百八十萬兩
- 魚類 八百三十五萬兩
- 染料 八百萬兩
- 石炭 七百六十萬兩
- 材木 六百二十一萬兩
- 機械類 六百萬兩
- 燐寸 四百八十九萬兩
- 毛織物 四百三十四萬兩
- 煙草 四百十二萬兩
- 綿織物以外の織物類 三百二十八萬兩

毛綿交織物

二百五十五萬兩

右等が主なる輸入品であつて尙ほ詳細なることは前に御話した貿易表に依つて細かく之を知ることが出来るだらうと思ふから省略して置く、次に輸出品の主なるものは

生絲

六千七百八十八萬兩

茶

三千百五十二萬兩

綿絲

千六百九十六萬兩

毛皮

千二百四十一萬兩

絹織物

千六十萬兩

豆粕

九百十五萬兩

麥稈真田

六百八十萬兩

羊毛其他

四百五十萬兩

花火材料

四百二十一萬兩

豆油

四百二十萬兩

莫座類

三百七十萬兩

家畜類

三百四十萬兩

紙類

三百三十七萬兩

右の輸出入の品目に付て見れば如何なる物品が輸入され、如何なる物品が輸出されるといふ大體のことが能く御分りになるだらうと思ふ。

尙ほ此輸出入の外に金銀銅の輸出入があるので、其輸出入に就て大體御話をすると、金の輸入が八百二十七萬四千兩、銀の輸入が七百六萬九千兩、銅が十二萬五千兩、之を合計すると輸入が千五百四十六萬八千兩、輸出に付て云へば、金の輸出が五百八十二萬三千兩、銀が三千八百二十七萬七千兩、銅が七千兩、此合計が四千四百十萬七千兩、此數字を以て見ると清國より銀の輸出といふものが相當にあるので、是が前に御話した矢張り貿易のバランスを充たす所の一つの材料になつて居る譯である。

此輸出入に付て如何なる國が最も關係をして居るかといふ點から考へて見ると輸入の方面から云へば英吉利が第一であつて、英吉利から清國に輸入する全體

の貨物が二億二千八百三十三萬七千兩、日本が六千五百八十六萬八千兩、獨逸が三千九百七十一萬三千兩、佛蘭西が千三百六萬九千兩、諾威が八百四十三萬八千兩、埃地利が四百五十三萬千兩、北米合衆國が三百七十三萬三千兩、和蘭が三百四十八萬五千兩。

輸出の方は何うであるかといふと、是も矢張り第一が英吉利で六千八百八十四萬兩、日本が二千七百三十六萬七千兩、佛蘭西が二千四百萬五千兩、獨逸が千五百三十四萬兩、諾威が五百三萬二千兩、露西亞が百八十二萬三千兩、亞米利加が百五十六萬四千兩、是で外國との貿易に付て國に依つて何れ位の割合になつて居るかといふことが大體分るであらうと思ふ。

此貿易のことに關聯してちよつと一言御話をして置きたいのは、清國にどれ程の外國人が居つて、どれ程の外國商店があるかといふことで、大體に於て支那の貿易の狀況を知る参考の一つになるから、此數字を茲に擧げて置く、是も千九百七年の統計である、清國に居る外國人の數は左の通りである。

總計

六萬九千八百五十二人

内

日本人	四萬五千六百十人
英吉利人	九千二百五人
葡萄牙人	三千八百八十八人
亞米利加人	二千八百六十二人
獨逸人	三千五百五十三人
佛蘭西人	二千二百一人
伊太利人	八百五十四人
露西亞人	四百七十九人
白耳義人	二百九十二人
和蘭人	二百八十六人
西班牙人	二百六十六人
埃地利人	二百五十九人
諾威人	百八十二人

- 丁抹人 百九十七人
- 瑞典人 百五十七人
- 朝鮮人 四十一人
- ブラヂル人 一人
- 其他の各個人 二百十九人

右の比例で以て外國人が清國に滞在をして居るのであるが此中で商店若くは會社を組織して居る者が二千五百九十五といふ數になつて居る、是は何れも清國の税關の報告に依るので、先づ大體に於て確な數字であらうと考へらるゝ、  
 以上で外國貿易のことを至つて簡単に御話をしたのであるが支那の内地貿易のことはどういふ鹽梅に行はれて居るかは統計表等もないので、何にも御話することは出来ぬ。

清國の輸出入の關係を見ると、前御話した如くに非常なる輸入超過になつて居る、此千九百七年の分が一億五千萬兩ばかりも輸入超過になつて居る、其他の數年を平均して見ると約一億萬兩以上は常に輸入超過になつて居るといふことであ

るので、此輸入超過は何で償はれて居るか、貿易のバランスといふものは支那に於てはどうなつて居るかといふ事が研究すべき問題であつて、此貿易の數字の如くに常に一億萬兩以上の輸入超過が清國に於て續くといふことで、他にバランスを保つて行く所の方法が無いといふ以上は、清國は遠からずして衰微して仕舞ふといふことになるので、段々此事に付ては自分が彼地に行つた折に清國の官憲にも質して見たのであるが、何等要領を得なかつた、併し清國の事であるから確たる數字は無論分らぬが何處の國でも貿易以外に正貨の收支があるので支那でも千九百三年に税關では是を調べた事があるらしい、其時の貿易以外の收支が斯うである。

出之部

- 一金額 三七〇〇〇〇〇〇
- 二外債利子 四四、二一〇、〇〇〇
- 三公使館、領事館、留學生費 四、三二〇、〇〇〇
- 四外商利益金、保險料運賃 二二、七五〇、〇〇〇
- 五軍需品 五〇〇〇〇、〇〇〇

計

入之部

一金銀	一一三、二八〇、〇〇〇
一鐵道、鑛山資金等	二二、〇〇四、六〇〇
一領事館、公使館、駐屯兵、病院、學校、宣教師、旅行者	二七、〇〇〇、〇〇〇
一陸地貿易過	五一、五〇〇、〇〇〇
一移民送金	二〇、〇〇〇、〇〇〇
計	七三、〇〇〇、〇〇〇
差引入過	二〇四、五三六、〇〇〇
	九一、二五六、〇〇〇

年によりて無論多少の相違はあるが右に示した項目は常にあるものと見て宜しいのみならず數年來非常の増減はないものと見ることが出来る。斯んな關係から一億位の輸入超過があつても清國ではさう困難して居らぬ。斯ういふ事を大體に於て知ることが出来る。この事は尙ほ研究を要することであるが、極く重要な問題であるから、茲にホンの概念だけを述べて置いて、尙ほ他日之を研究する人の問

題として提供して置くに止めたいと思ふ。

(へ) 買辨問題

それから商業者としての支那人といふことに關係しては、前に滿洲の商業のことを御話した時分に大體御話をしたが、是れは矢張り支那の殆ど全體に通じて居るものと見て大なる過はないやうに思ふ。唯此場合に一つ御話を附加へて置きたいのは、外國人が支那人と貿易商業をする場合に常に買辨即ちコンボラドルといふものを置くといふのが舊來の例であるので、歐米人は無論であるし、日本の大なる商賣人とか、或は銀行とかいふやうなものは何れも此買辨といふものを置いて居る。唯大なる會社にして三井物産會社だけは買辨を置いて居らぬが、其他の大きなものは大體買辨を置いて居る。此買辨といふものは然らば如何なるものであるかといふと、是は清國人にして或は商業に従事し、又は銀行事務に従事したとのある經驗があつて、相當の資産と信用を有する者の中から選擇をして、さうして相當の保證金を納めしめ、従つて莫大なる報酬を與へて居るといふのが普通である。此買辨が如何なることをするかといふと、清國人との商業取引であればどうしても

能く清國の言葉を話し、又清國の商業取引の事情に通じ、又商賣人等の身元信用等を知つて居るといふことが必要なので、此買辨が總て右等のことを心得て居つて、例へば或清國商賣人と商業を營むといふことにすれば、向ふの商賣人の身元から地位信用其他總てを買辨が調べて、其買辨の報告に依つて商業をするとか、或は銀行或支那の商賣人に向つて金を貸附けるといふやうな場合にも同様に買辨の證明に依つて、取引を始めるといふことになる。それで頗る便利なのであつて、日本の大きな銀行、例へば正金銀行の如きは支那、滿洲各所に支店、出張所を持つて居るが、重要な處には殆ど清國人の買辨を使つて居る。又日本の日清汽船會社即ち楊子江の航路に従事して居る會社の如きは買辨を使つて居る。尙ほ其外に買辨を使つて居る處は多々あるが、總て是等の買辨の價值といふものは充分認めて使つて居るらしいのである。併ながら當今に於ては買辨を置いて仕事をすることが果して適當であるや否やといふことが大分問題になつて居るらしいので、それは昨年あたり天津に於て大分外國の商館が倒産したことがあるが、主として是は獨逸の商賣人が迷惑を蒙つたやうであるが、此關係等は又買辨があつたが爲めに詰りさうい

ふ不利益を蒙つたといふやうなことも一の理由に擧げられて居るらしい。それで支那人は信用を重じて餘程固いものであるといふ觀念が是までヅツトあつたやうであるが、前にも御話したか知ぬが兎に角外國人に接觸をして居る支那人即ち半文明化して居る所の支那人といふものは存外其中に横着な者が多いのであつて、自分が買辨として商店なり、會社なり、銀行なり信用を得て居るといふことからして、其の信用を濫用して可怪仕事をやつて、會社、銀行、商店などに損害を掛けるといふ者が段々出て來た。それで又斯ういふこともあるらしい。それは買辨といふものは前に申した通り比較的融通の利く、相當に財産も有るといふ者が選ばれてなつて居るのであるが、銀行の役員であるとか或は商店の番頭であるとかいふやうな者が此一時の金融に困つた場合に、買辨から金を融通させるといふことがあるさうすれば相當な金は買辨が用立つてやるといふことになる。して見ると此買辨が多少不正な事を營んで、會社若くは銀行等に損害を蒙らすといふことがあつた場合に、右の如く買辨の助けに依つて金融を得て居るといふやうなことから、さういふことがあつても大目に看逃して置くといふことになる。そこで其損害は益々

大きくなり、買辨の不徳不義の程度が段々擴張されるといふことになつて、詰り商店若くは銀行等が非常な迷惑を蒙つて、甚しきに至れば倒産の悲惨なる境遇に立つやうなものが續々出て来る、斯ういふ關係からして我々が支那を旅行して居つた間に買辨の必要、不必要に付て各方面で話を聞いた所に依ると、非常に必要だといふ者もあるが、又買辨といふものはもう今日では餘り必要はないのみならず非常に危険なものであるといふ説を爲す者が段々あつた、支那人の商業道徳は今日の如く歐米人若くは日本人等と接觸をして行く以上は、餘程疑を挟むべき餘地がある、買辨などいふものは漸次に廢れて来るものではなからうか、又さういふことは廢した方が寧ろ宜いのではあるまいかといふ考を自分などは持つて居る、此事は商業貿易に餘程關係を有つて居ることと思ふから、見聞した所の大體を附加へて御話をしたのである。

### (下) 清國金融機關の大要

次に金融機關の御話をしたいと思ふ、清國の金融機關は舊來は前に滿洲の所で御話をした通り、錢舖とか票莊とかいふ種類のもものが無數にあつて是が詰り金融

の仲立をして居り、所謂泰西の思想に於ける銀行といふやうなものは無かつたのである、併ながら漸次に歐米又は日本と經濟上の關係が密になるに従つて銀行といふものもポツ／＼發達をして來た。

先づ主なる銀行として最初に出來たものが戶部銀行といふものである、此戶部銀行は即ち其名が現はす如くに、戶部と云へば今日の度支部であるので、大藏省の銀行といふ意味である、併ながら此戶部銀行は明治四十一年に新に大清銀行が出來た爲めに止めたのである、此大清銀行の出來た所以は、大體に於ては日本の正金銀行といふやうなものの機能を爲す爲めであるらしい、併ながら今日の場合に於て設立後猶日淺く且つ銀行の機能が一般に充分發達するといふ時機でないから働は餘り爲して居らぬ、此銀行の資本は最初四百萬兩であつた、大清銀行に變つて居る、目下拂込濟のものが全額八百五十萬兩である、此銀行は紙幣を發行するの權能を有つて居つて、尙ほ内地で云へば國庫事務及び官金の取扱、若くは政府の委託に依つて公債證書其他各種の證券を取扱ふといふ働をして居る、是が尙ほ地方



の金融の緊縮の際に當つては度支部より借入金をして之を救済するといふやうな方法も講せられて居る。今日の所では支店も随分數多くあつて、其本店は申すまでもなく北京に在るので、支店の數が約十八萬箇所あるといふことである。現今之として居る者は張允言、それから總支配人をして居る者が周度録を總裁といふ者であつて、北京の本店のみに於て使用して居る人間が約六十ばかりもあるといふ話である。尙ほ此銀行は北京に於ては北京貯蓄銀行、即ち資本金十萬兩の此銀行を貯蓄金吸收の機關として持つて居る。是が支店の主なるもので上海とか、天津とか、漢口とかいふやうな場所に於ては相當な働をして居る。併ながら清國の大にして此銀行が充分なる働をなすことは出来ぬので、先づ今日の所では漸く銀行といふものゝ面目が出来たといふ位な程度に在るに過ぎない。

次に交通銀行といふものがある。此交通銀行は前にも御話をしたと思つて居るが、郵傳部即ち日本で云へば逓信省の機關銀行であつて、此郵傳部の收支を取扱ふ組織になつて居る。本行は資本金が六百萬兩、其拂込金が三百萬兩で、政府が矢張り其株式の一部を所有して居る。天津とか漢口、上海等を主なる支店として、本店

を北京に持つて居る。此銀行も大清銀行と同様に紙幣發行權を有して居る。

次に公益銀行といふものがある。此公益銀行といふものは明治四十一年に設立せられたるものであつて、陸軍部の機關になつて居る。其資本金が百萬兩で、此中陸軍部より二十萬兩を出資して居つて、拂込高が二十五萬兩であるが、其外に尙ほ二十萬兩の社債を發行して居る。今日の所では本店を北京に有し、天津に一の支店を設けて居るが、尙ほ進んで漢口又は上海にも支店を設置するといふ計畫になつて居るらしい。此銀行は紙幣發行權は有つて居らぬので、貸附を主として居つて、爲替等の取引は殆どやつて居らないのである。尙ほ此銀行は公益商業貯蓄銀行といふものを機關に有つて居つて、一般の貯蓄資金を吸收して居る。元來公益銀行では五百圓以上の預金を預かることにして居つて、五百圓以下の少額の預金は右言つた貯蓄銀行で預かるといふ仕組になつて居るらしい。是等の預金者の主なる者は此銀行が陸軍部の機關であるといふことからして、主として軍人其他の役人である。其他上海に信成銀行といふものがあつて、其資本金が百五十萬兩、拂込が七十五萬兩、北京にも支店を有つて居る。本店の總辦を周某と云つて、此者は農商工部の願

間を勤めて居つて、鐵類其他の商業に従事して居る者である。此銀行は光緒三十二年に設立されたるものであつて、矢張り貯蓄預金又は定期預金を取扱ひ普通の貸出をして居る、併ながら爲替とか割引とかいふやうな進んだことは餘り無いらしいのである。

次に厚德銀行といふものがある。是は資本金百萬兩と稱して居つて、其拂込金が十五萬兩であるらしい。天津に支店を有つて居る。

尙ほ此外にも銀行と名の附いた所のものがボツ／＼あるが、大體に於て是等を特に銀行といふよりかは寧ろ前に御話した票莊とか、或は錢舖とか、銀號とかいふやうな種々のものであつて、舊來の支那風の業務に従事して居る外に多少銀行の意味の業務を加味してやつて居るといふことで、こゝに特に之を列記するだけの價値はないものであるらしい。

清國側の金融機關の御話をすれば極く大體の所右等の如きものであつて、内地の金融はどちらかと云へば小口の分は矢張り舊來の錢莊、票莊其他に依つて出来て居るものであつて、特種銀行は別として右等の所謂銀行の名の附いて居る所の

ものは稍々進歩したる外國貿易に關係をする其の商業者、工業者又は官吏等の機關になつて居るらしいのである。

此外に清國に於ては或は不動産抵當銀行であるとか、又は貯蓄銀行であるとかいふものゝ條例等は作つて居るが、併ながら其實物は今日まだ發達する程度に達して居らぬらしい。

右の如き金融機關の状態であるから支那の外國貿易は清國側の金融機關に依つてやつて行くことは餘程困難なのである。従て清國には外國銀行が數多店を出して居つて、此外國銀行の手に依つて清國の外國貿易關係の金融は大體に於て融通されて居ると云ふても敢て過言ではないだらうと思ふ。然らば清國に於て如何なる外國銀行があるかと云ふと、先づ我國の正金銀行を首めとして此正金銀行は上海を根據として、天津、漢口、北京其他各所に支店を有つて居つて、清國と我邦との間に於ける貿易の融通を充分に附けて居るのである。歐米の金融機關としては先づ第一に英國の代表者たる香港上海銀行、支那では之を滙豐銀行と唱へて居る。是が主たるものであつて、御承知の如く本店は資本金千五百萬弗すつかり拂込済にな

つて居つて、尙ほ法定積立金が千五百萬弗、各株主の責任準備金千五百萬弗といふやうな、極く鞏固な銀行であつて是が上海を根據として、漢口にも天津にも、北京にも、兎に角有望なる商業貿易地には皆支店を出して居つて、盛に金融の衝に當つて居る、尙ほ英吉利の代表者としてチャータード、バンクといふものがある、支那では麥加利銀行と呼んで居る、此銀行は本店が倫敦に在るので、資本金が百二十萬磅、すつかり拂込済であつて、百五十七萬五千磅の積立金を有し、株主責任準備金百二十萬磅を有して居る、是も有力なる銀行であつて、兎に角英吉利の金融機關を東洋に代表して居るものは香港上海銀行とチャータード、バンクであつて、是が清國に於ても有力なるものとなつて居る、其一例を擧げるといふと、上海に於て爲替相場が立つ、此爲替相場は香港上海銀行が立てる、正金銀行でも其他の外國銀行でも、其相場に皆従つて行くといふやうな譯で、外國銀行の中では是が牛耳を執つて居るといふ有様である。

次に獨逸を代表してはドイツツエアチツセバンクといふ者があつて、支那では之を德華銀行と稱へて居る、是は資本金七百五十萬兩、中五百六十二萬五千兩

といふものが拂込んである、法定積立金が百五十四萬二千兩といふ風な、是もなかなか有力なる銀行であつて、獨逸の利益を代表し、東洋に於ける獨逸人の貿易の金融の機關となつて居る所のものである。

佛蘭西を代表してはバンク、ランドシヌといふものがある、之を清國では東方匯理銀行と稱へて居る、是は本店を巴里に有して居つて、其資本金三千六百萬法の中、九百萬法といふものを拂込んで居つて、尙ほ三百六萬法位な積立金を有し、其外に二千九百九十二萬法の別途積立金を有して居る、是は佛蘭西が特に東洋に於ける佛蘭西の領地及び清國あたりの貿易の爲めに設けて居る所のものであつて、矢張り有力なる銀行の一になつて居る。

次に露西亞の代表としては所謂露清銀行——清國に於ては華俄道勝銀行と稱へて居る、此露清銀行は今日では内地人が能く知つて居る銀行であるが、其資本が千五百萬留で五百萬留の拂込、尙ほ七百萬留餘の積立金を有して居る、是も露西亞の機關銀行としては極く有力なる銀行であることは一般の知つて居る通りである。

又白耳義の代表としてはバンク、シノベルジュといふものがある、即ち清國では華比銀行と稱へて居る所のものは本店は白耳義のブラッセル府にあつて、五百萬法の資本で、全部拂込、尙ほ多くの積立金を有して居る銀行である。

其他極く最近になつて亞米利加を代表して居るインターナショナル、バンクといふものが出て來た、是は上海に店を出して居つて尙ほ北京にも此頃店を出したらしい、まだ今日の所では以前に述べた銀行等に較べて見ると充分なる働を爲さぬやうではあるが兎に角亞米利加が此一事を以て見ても如何に清國——廣く言へば東洋に對して利害關係を感じて居るかといふことを知るに足るだらうと思ふ。

尙ほ上海に和蘭を代表してネザールランド、トレーディング、ソサイエティーといふ銀行がある、此銀行はアムステルダムに本店を有つて居つて、資本金が四千五百萬法である、是も相當に商業取引の機關になつて居るらしい、其外にインペリアル、バンク、オフ、チャイナ及マーカントイル、バンク、オフ、インディアなどいふ外國銀行が上海に在る。

之を要するに清國には歐米の強國が何れも大きな銀行を出して東洋貿易の爲めに便宜を計つて居るといふことは彼地に旅行した者の著しく感ずる所である、尙ほ此事に付て一言致して置きたいのは、上海であるとか、天津であるとか或は漢口であるとか、此の如き重要な貿易地に是等の銀行が支店等を持つて居るといふとは勿論であるが、東洋殊に支那に對しては歐米強國が財政的政策を講じて居るので、即ち商業地としては少しの價値の無い北京に於て是等の銀行が何れも宏壯なる建物を持ち、有力なる支配人を置き、互に相對峙して居るといふ奇觀を呈して居る、北京の崇文門を這入りたる通は此等の銀行が公使館と相參差し壯觀旅客を驚かしむるものがある、先づ北京に於ては香港上海銀行を代表してヒリヤーといふ支配人が居る、又德華銀行を代表してコルドといふ人が居る、佛蘭西の東方匯理銀行を代表してはカスナーヴといふ人が居る、露清銀行を代表してはウキルフアールといふ人が居る、此外に是の銀行を代表しては無いが、所謂怡和洋行(ジャードン、マヂソン商會)を代表してブランドといふ者が居る、ボーリング商會を代表してロード、フレンチといふ者が居る、此ボーリング商會といふのは即ち京奉鐵道

を請合つてやつた所の有力なる商會である。

### (子) 清國鐵道の概要

次に支那の交通機關のことを御話するのであるが、交通機關と云つても先づ鐵道のこと、それから揚子江の航路のこと、此事を主として御話をするので、支那の全般に亘る交通機關のことは廣大にして、逆も一朝一夕の御話で盡す譯には往かない、鐵道のことにしても、自分の乗つて見た鐵道は清國既成鐵道の中の約半分位であつて、是も全體を盡す譯にもいかなないのであるからして、要するに大體の所を御話するに止めて置かうと思ふ。

清國の鐵道には今日まで知られて居る所のもので、其線路の名を異にして居る所のものが約六十ばかりあるが、其中で或は豫定線路に係り、又は敷設の準備中のものを除いて、既設鐵道が約十五六しかないのであつて、交通を開始して居る所の鐵道は、第一が京奉鐵道、是が六百一哩、第二が京張鐵道、是が約百五十哩、第三が京漢鐵道、是が約八百哩、第四が西陵鐵道の二十六哩、第五が正太鐵道の百六十六哩、其他洞溝鐵道の九十哩、汴洛鐵道の百三十六哩、山東鐵道の二百八十三哩、滬寧鐵道の

二百三哩、浙江鐵道の十二哩、萍潭鐵道の六十哩、大冶鐵道の二十五哩、粵漢鐵道の四十四哩、潮汕鐵道の二十哩、龍州鐵道の五十哩、滬杭鐵道の約百五十哩、總計の所今日の既成線が約二千八百哩、此哩數等も右申したのは極く精確でないかも知らぬが、大體に於てさして大差ないこと、信ずるのである。

以上列擧した中で自分が實際乗つて居るのは京奉鐵道、即ち奉天からして山海關を通り、天津を経て北京に行く鐵道、次に京張鐵道、即ち北京から八達嶺を経て張家口に至り、尙ほ蒙古の方に延長さるゝといふ所の線である、此一部分を自分が旅行したといふことは前きに御話をしたことである、次に京漢鐵道、即ち北京から漢口に至る鐵道であつて、是が有名な白耳義シンデゲートの經營した所の鐵道なので、次が大冶鐵道、大冶の鑛山に行く爲めに架けてある所の鐵道、次に南京市街鐵道、是は今申した數の中には特に數へなかつたのであつたが、僅に七哩程の極く短距離の鐵道であつて、即ち揚子江の河岸の下關といふ所から南京の町に行くだけの鐵道である、次に滬寧鐵道、是は南京から上海に至る所の鐵道、それから最終に乗つたのが滬杭鐵道である、此の滬杭鐵道といふのは上海からして杭州に至る鐵道で

あるので、是は自分が旅行して居つた時には全通をして居ないのであつて、兩端からして汽車が不規則に通じて居るといふに過ぎなかつたので、其一部分を乗つて見た、併ながら、今日は既に開通して立派に交通が開けて居るといふ報道を得て居るのである。

先づ右の既成鐵道に付ての極く大體の御話をする前に、先きに國債のことを説明する場合に、清國の公債は國際的關係から起つたものか、或は鐵道關係から起つたものであるといふ大別を御話をしたのであるが、此鐵道の中で公債を以てやるものゝ御話を大體して置かうと思ふ、尤も此鐵道公債でやる部分の中には既成線でないものの中には含まれて居るといふことを御承知を願ひたいのである、此鐵道公債を起して鐵道の敷設を計畫して居るものが、

第一が吉長鐵道であるので、此吉長鐵道は最も能く本邦人の頭に響き渡つて居る所のものであつて、今日起工準備中である、此吉長鐵道の敷設の總資本金が約四百三十萬圓といふことであつて、此中で二百五十萬圓だけは南滿洲鐵道會社から貸すと、斯ういふ話になつて居るので、是は既に其契約を實行して、昨年の八月に現

金を清國政府に渡したのである。

第二が新奉鐵道である、此新奉鐵道は即ち新民屯と奉天との間の鐵道であつて、今日では既に敷設されて居るので、新民屯の問題が大分喧ましく奉天に連絡するといふとはなかく、容易に出來上らなかつたのは極く最近の滿洲の外交問題であつたので、是はもう一般に熟知して居る所である、此敷設の總資本金は三百四十萬圓、此中で三十二萬圓は同じく南滿洲鐵道會社から借りて居るといふことになつて居る。

第三に關内外鐵道、今日では只今申した奉天と新民屯とが連絡されて居るので、名を變へて京奉鐵道と稱へて居る所のものであつて、此京奉鐵道を敷設するに付て清國政府が借款を起して居ることが二百三十萬磅であつて、即ち千八百九十九年に此借款を起して居るので、其利息が年利五分で、償還期限が四十五年といふことになつて居る、是等は主として香港上海銀行から借りて居るらしいのである。

第四に京漢鐵道であるが、此京漢鐵道の總資本金が五千八百萬圓であつて、此金額に對して一億二千五百萬法の借金をして居つた、此借金の利子は年利五分で、白耳

義のシンヂケイトから之を借りて居つた。然るに清國政府は明治四十一年に於て英佛からして五百萬磅といふ外債を起して、此全部を買収して、今日の所ては純然たる官營といふことになつて居るのである。此京漢鐵道は右の如く清國人の經營に成つて居るのであるが、自分の旅行した所に依ると尙ほ鐵道の要部の役人には佛蘭西人若くは白耳義人が残つて仕事をして居つて、此鐵道からして出す所の時間表であるとか、其の賃金表の如きものが支那語の外には大概佛蘭西語で書いてある。又停車場あたりで見ると所の揭示の如きものも佛蘭西語で書いてある。鐵道の役人の話す所の言葉も主として佛蘭西語を使ふ。斯ういふことになつて居る此事が餘程北の方から支那を旅行する——即ち新奉鐵道を通つて京漢鐵道に行つて見ると様子が違つて居るので、新奉鐵道は歴史を話せば長いが、要するに露西亞が北からして東清鐵道といふものを敷いてきて、之を北京の方に段々と延長するといふ形迹があつたので、此の如く露西亞が北京の方に向つて手を擴げるといふことは清國に對する露國の勢力範圍が擴張されて、殊に清國の帝都を抱込むといふやうなことになるのであるから、是は餘程對清政策上、歐米列國が考へたので、就中

英吉利の如く舊來から清國と關係を有つて居り、且つ貿易關係に於ては前に御話した如くに第一位を占めて居るといふやうに、大なる利害關係を有つて居るから、先づあの京奉鐵道の鼻梁を抑へて、さうして露西亞が南進して來ることを切ることをやつたらしいのである。それであるから、此京奉鐵道の資金も英吉利から出て居るし、又英吉利人が管理して居るし、汽車に使ふ所の言葉は英語であつて、切符切に至るまで皆英吉利人若くは英吉利の言葉を使ふ者がやつて居るのである。此京奉鐵道に乗つて京漢鐵道に乗ると、全く英吉利から佛蘭西に行つたやうな氣持がするのであるが、併し官營となつてからはポリーイとか其他の小物は、大分支那人が京漢鐵道にも這入り込んで居つて、日本の旅行者は大體に於て英語も心得て居るし、又多數の旅行者が英米人であるからして、是等のポリーイ等は英語等を話す、しかし少しむづかしい話になるとなかく、英吉利語では分らないのである。其一つの實際がある。是は茲で餘談として話して置くが、恰度北京から漢口に行く切符を買つて汽車に乗込んだ、手荷物等を預ける爲めに、其切符を世話をする人に託して置いた所が自分等の一行が切符を受取らずして、汽車に乗つて仕舞つた、途中で切符

を改めに來た時分に切符の無いといふとに始めて氣が附いて支那人に其事を話した所が一向要領を得ない、是は言葉の通せざる爲めである、それで佛蘭西語を話す外人が來て、多少自分も佛蘭西語を知つて居つたから、ヤット談判して切符無しでとうとう漢口に到着する事が出來たといふことがある、此鐵道は支那の官營ではあるが本來が白耳義人がやつて居つたといふことであるから、佛蘭西語を知つて居らぬと往々不便を來すことが今日と雖も猶ある、此白耳義のシンヂケートは其裏には矢張り露西亞が居るといふことは、是は支那の關係のことを知つて居る者は何人も知つて居ることであつて、前に申した英吉利が京奉鐵道を中斷したといふことは茲に在るので、露國が一方に於て佛蘭西、白耳義のシンヂケートの假面を破つて、漢口からして北京まで鐵道を敷設して、一方は哈爾濱より段々南下して奉天より山海關といふ風に勢力を伸べて來たので、若し此間を連絡して仕舞ふと、清國は全く露國の全勢力の下に在るといふことになるので、そこで英吉利が途中で中斷して、自分の資本を投じて京奉鐵道が出來たといふ關係になつて居る、是等の關係は外交上の一例を話すのであるが、前にも申した通總ての鐵道に皆此外交の意

味を含んで居つて、研究をして見ると餘程面白いことであるらしいのである。

第五に正太鐵道——此正太鐵道といふは正定といふ處からして太原といふ處に至る間の鐵道であつて、此鐵道の爲めに借款をして居ることが四千萬法、是は年利五分、償還期限は借款日附後十箇年目より計算して二十箇年に償還といふことになつて居つて、此金は白耳義のシンヂケートから出て居る。

第六が汴洛鐵道——此汴洛鐵道といふは河南省の開封府から河南に至る間の鐵道であつて、此鐵道敷設の爲めに起した金額が二千五百萬法であつて、五朱の利子、此償還期限が發行の日より十年据置、十一箇年目より二十箇年に償還をするといふことであつて、其債權者は同じく白耳義のシンヂケートである。

第七が滬甯鐵道——是は前に御話をした通り上海から南京に至る間の鐵道であつて、此鐵道の爲に借款をして居ることが二百九十萬磅である、此資金は英吉利から借りて居るものであつて、年五分、五十箇年に之を償還するといふことになつて居る、此滬甯鐵道は清國に於て、其設備の點に於て、其結構の點に於て、第一であつて、列車の如きは實に立派なものである、併なから此鐵道が右の如く非常に立派な



鐵道であるが故に敷設費が大變餘計掛つて居るので清國では安いものは一哩五萬圓、普通七八萬圓位であるらしいが、此滬寧鐵道は十四五萬圓掛つて居るではないかといふ話がある、それで此鐵道の収入の點又は經費の點等から充分なる利益があるかといふと、寧ろ損失があつても利益が無いといふことであるらしいが、兎に角汽車の立派なことは清國第一であつて、我が滿洲鐵道の如きも到底滬寧鐵道に較べて見ると及ばないといふやうな感がある、此列車の構造は滿洲鐵道の車の構造とは餘程違ふので、滿洲鐵道は亞米利加式で、所謂ブルマンカーである、然るに此滬寧鐵道のは大陸式であつて、列車の一方に通路があつて、横に部屋を有つて居るといふ風な構造になつて居つて、之を構成して居る材木等もなか／＼の良材で、其塗り方等も實に立派で電氣其他の設備總て行届いて居る、尙最も日本人等には便利に感じたのは、普通の汽車には食堂があつても食堂が皆列車になつて居る、日本の如きも食堂は別にある、滿洲鐵道も食堂車が別にある、京漢鐵道も食堂車が別にあるといふことになつて居るのだが、此滬寧鐵道に限つては部屋が充分に取つてあるからして、其部屋の中にもちゃんと食卓が出来るやうになつて、其部屋に食事

を運んで呉れるといふことなので、此點は日本人の如き、殊に婦人等の旅行には便利な方法になつて居る。

茲に食堂のことを話したからちよつと言ふて置くが、京漢鐵道若くは此滬寧鐵道あたりの食事は滿洲鐵道のそれよりかは自分は能く感じた、併ながら京漢鐵道は一體清國人の手に渡つてから右の食事は勿論車の修繕とか掃除とかいふやうなことは行届かなかつたらしいので、大分汽車の中に埃が溜つて居るとか、ペンキが剝れ掛つて居るとか、いふやうなこともあるし、食事の如きも悪くはないが、以前から見れば大分劣つたといふやうな話を聞いた。

第八が津浦鐵道——此津浦鐵道は天津からして山東省を南に横切つて、揚子江を隔て、南京と相對する浦口といふ處に到着する線路である、此が出来ると長さが六百七十五哩とかいふ長い鐵道であつて、第一部分は例の大連河に沿ふて居るらしいので、今は着々其工事を進めて居る、此津浦鐵道の爲めに借款をしたのが五百萬磅であつて、年利五分、明治四十一年からして三十箇年に償還するといふ約束であつて、尙ほ細かい種々な契約になつて居る、要するに獨逸が膠洲灣を經營して、

山東省が其勢力範圍になつて居るといふことは何人も知つて居ることであるが、此勢力を尙ほ擴張をすといふ必要上から天津からして南京の方に向つて線路を引張るといふことで主として獨逸がやり掛けたのであるが、之を獨逸に全部取られることになる、又英吉利の揚子江に於ける勢力範圍にも影響することから英獨が其利益を分けるといふことになつて此借款の債權者としては英獨組合といふものが出来て英國も多少其中に資本を出して敷設するといふことになつて居る、併し主たるものは矢張り獨逸であつて、其借款のことを主として取扱つて居るものは獨逸の德華銀行である、此線路は天津からして起るものは獨逸が經營し浦口の方から起るものは英吉利が經營するといふやうに、兩方から約半分宛經營を始め、今日では餘程其工程が進んで居るかのやうに話を聞いて居る。

第九が滬杭甯鐵道である、此滬杭甯鐵道といふものは上海から杭州に杭州から寧波に行く間の鐵道である、此鐵道の一部分は即ち自分等が矢張り乗つた所で、先程滬杭鐵道といふて御話をしたものであるが、此鐵道の爲めに借款をして居るのが百五十萬磅である、(年利五分)明治四十一年に矢張り借款として、是も三十箇年に

償還をすといふことになつて居る、此資本家は英清組合と稱へて清國人も多少に混つて居るが、實際の資金は英吉利から出て居るらしい。

第九が九廣鐵道——九廣鐵道といふのは即ち廣東からして九龍といふ所に行く線路であつて、此長さは九十三哩、此鐵道は建設費として借入れた高が百五十萬磅であつて、年利が五分、明治四十年から始つて是も三十箇年に償還するといふことになつて居る、其資金は英吉利から供給して居る。

第十が粵漢鐵道——此粵漢鐵道といふのは漢口からして廣東に至る間の鐵道なので、其豫定線路の延長が五百四十哩であつて、此線路が出来ると詰り廣東からしてズット支那を貫通して、即ち西比利亞に行くことが出来るので、所謂支那の大幹線といふものゝ一になるので、非常に必要な線路である、此線路の爲めに借款をして居るのが、今日の所では百十萬磅であつて、利息が四分五厘で、明治三十八年に始つて償還が十箇年賦といふことの豫定になつて居る、此資金は香港政廳からして之を借入れて居る。

併し此粵漢鐵道のことは川漢鐵道と併せて現今問題となつて居ることであつ

て之を敷設するのにはなか／＼多額の資本を要するのであつて、此僅ばかりの金は殆ど其最初の準備費位に止まるので、英佛獨米、尙ほ露がそれに加はるといふやうなことで、此借款を例の外交上の關係からして種々に奪合ひをして、終には共同してやるといふ議も纏りつゝあつたのである。此鐵道のは例の張之洞が首腦になつて談判をしつゝあつたのであるが、張之洞も先頃亡くなつたといふやうなことで、先づちよつと立消えになつて居る併し、是は支那の大幹線のことであるからして、是非此建設の必要もあるし、旁此事は假令張之洞が亡くなつても其談判は繼續されて、何れ相當な借款成立し、此工事も進めらるることであらうと、斯う自分は信ずる。

其他極く僅ばかりの鐵道であつて外國から資金を仰いで居るものもあるが、是等は少し列擧するに憚る所もあるし、又さう御話をしなくても大體を知る上に於て大して差支はないと思ふから、省いて置く。

既成鐵道の中で借款の關係其他から既に大分説明し終つたのであるが、尙ほ御話をすることが抜けて居るものがあるからして、其抜けて居るだけを次に御話を

したい、それは第一が京張鐵道のことであるので、京張鐵道はちよつと御話をした如くに、即ち北京からして張家口に至るの鐵道であつて、北京南口間の約四十哩といふものは、是は前から通じて居つたのであるが、張家口まで開通をしたといふことは自分などがこちらに歸つてから後位の話で、極く最近に交通を開始して居るやうである。

此線路は最初露國が滿洲經營をやり、又蒙古の方に關係を有つて居るといふやうなことからして、同國が主として其敷設權を得やうと計つたものらしいので、外交上餘程込入つた事情があつたらしいのであるが、兎に角清國政府は此鐵道を外國人に敷設さすといふことはいかぬ、又外國の資金を以てやるといふことは不利益であるといふことからして、袁世凱等の上奏に依つて清國政府が自分の資力で清國人を使つて、一切外國人を干渉せしめずして造るといふ決心を以てやつた大鐵道であつて、其工費が五百萬兩と稱して居る、是は果して五百萬兩で出来たか否やといふことは問題であつて、八達嶺などを横断して居り、其工事も容易ならざる處もあるから、尙ほ多く掛つて居るのではないかと思ふが、兎に角五百萬兩と稱して

居る、自分が北京で振貝子殿下に御目に掛つた時に、支那の資本で清國人の技師を用ひ少しも外國人の手に頼らずして此鐵道を拵へたといふことは清國に取つて一新紀元を劃したものだといふやうなことを言はれて居つて、支那人が以て非常に誇りとして居る所の鐵道である。

此鐵道も南口といふ處までは自分も乗つて見たのであるが、技術上のことは少しも自分には分らないが、線路其他總ての設備等がなかく、良く出来て居るやうであつた。支那人の手で成功した鐵道としては餘程の大出来ではないか、支那人と雖も此點に付ては侮るべからざるものであるといふやうな感じを起した。

次は西陵鐵道であるが、是はもう説明をするまでの鐵道でないで、實は西陵といふ處即ち北京から二十六哩ばかりある處に清國の皇室の御陵があるので、例へば先達御崩御になつた西太后を葬つたとかいふやうな處なので、此處に行く便宜の爲めに設けた鐵道であつて、一般公衆の交通の便利といふ方から設けた鐵道でないで、強いて説明を要しないのであるが、此鐵道の敷設費は約六十萬兩ばかり掛つて居つて、千九百四年に竣工した極く簡單なる鐵道である。併ながら此鐵道と

雖も總て廣軌式に出来て居るので、自分は此鐵道に乗りはしなかつたが、此鐵道が客車を載せて走つて居る所は旅行中に見物することが出来た。

次に洞溝鐵道であるが、此鐵道も一般公衆の交通の便利に設けられたのでなくして、寧ろ是は或目的の爲めに設けられたのであつて、即ち嶺山鐵道といふ部類に這入るので、延長が約九十哩、其敷設の費用が總額約六十一萬磅位で出来て居るらしいのである。此鐵道は清國政府に賣却をするといふやうな話が附いて居る。

次に山東鐵道の御話であるが、是は獨逸が膠州灣を租借して此山東省に手を擴げるといふ關係から山東鐵道會社といふものを組織して、表面に於ては清國人も其株主になるといふことになつて居るが、主として獨逸人が其資金を出して敷設して居る鐵道であつて、二百八十三哩あるので、此鐵道は前に御話した津浦鐵道といふものが出来ると、矢張り是等に連絡を取る所の鐵道であつて、獨逸の山東省を經營するといふ上に付ては、非常に有力なる鐵道であるらしい之に關した詳細なことは分つて居るが、茲には省くこととする。

次に浙江鐵道——此浙江鐵道は僅に十二哩ばかりの鐵道であるので、殆ど説明の價値もないやうなものであるから茲に説明を省略する。

次に萍潭鐵道であるが、此鐵道は萍郷の石炭と漢陽の鐵廠へ輸送する爲めに敷設した所のものであつて、其鐵道の哩數が約六十哩で、千九百五年に開通して居つて、其敷設費は約二百萬兩を費して居るといふ話である。

萍郷炭坑

序に一言をして置きたいのは萍郷の炭坑のことであるが、此萍郷炭坑のことは先きにもちよつと御話をしたかと思ふが、今日なか／＼採炭高が多くなつて、漸次に其數を増す、漢陽の鐵廠は勿論、揚子江附近の製造場だとか船舶等が段々と其石炭を需要して居る、是は千八百九十八年頃から採掘されて居つて、今日迄其資本を投じたことが約四百四五十萬圓といふことである、目下の所一日の出炭高が約千噸であるが、段々種々な改良工事に着手して居るからして、一日二千噸を出すことは極く近き將來に在ると、斯ういふことを言つて居る、さうして此全體の炭量は一―最も正確ではないが——假に一日二千噸を採掘しても猶ほ百年間は繼續し得る炭坑であるといふことを言つて居る、此炭坑並に此鐵道は萍郷煤炭總局といふ

ものがあつて其經營をして居るのである、此局が本鐵道並に炭坑を經營する上に付て各方面から借入金をして居る、即ち獨逸の禮和洋行即ち、カルロウキツチ商會とも稱へて居るものであるが、此ものからして大分多額の金を借入れたといふ話もあるし、又其後に同商會からして三百萬馬克といふ金を借入れて居る事實もあるらしいので、其他茲に明言することは出來ぬが、某々國からも相當の借款をして居るといふやうな事實もあるので、種々な關係、殊に日本の石炭が揚子江附近に段々賣れて居つたのが、此萍郷炭の勢力の爲めに押されて、其販賣額が少くなるとか、いふこと、又將來撫順炭を採掘して支那の炭と競争をするといふ上に付ても、此萍郷の炭坑といふものは眼中に置いて考へねばならぬ所の、餘程注意すべき炭坑であらうと思ふ。

次に大冶鐵道——此大冶鐵道のこととは大冶の鐵山に行つた話を別にする積りであるから、其時に纏めて御話をするのが便宜であらうと思ふからして、茲には之を省いて置く。

次に潮汕鐵道——此潮汕鐵道は汕頭から潮州に行く鐵道であつて、僅に二十二

哩の短距離の鐵道である。是は廣東人が二百五十萬元の資本で以て潮汕鐵路公司といふものを組織して明治三十九年に開通をして居る相當な鐵道である。併し是は短距離なものであつて、餘り説明を要するものでもないやうである。

次に龍州鐵道——此龍州鐵道は佛領の東京の河内といふ所から涼山といふ所に至る鐵道に連絡をして、此涼山から龍州といふ處に至つて居る鐵道であつて、其延長が約五十哩である。此鐵道は佛國の會社と清國の會社が資本を出し合つてやつて居る所のものであつて、清國の出資が三百二十萬兩、佛蘭西の出資が二百八十八萬兩合計六百萬兩といふものを出して千九百一年に始めて開通をした所のものであつて、即ち是はどちらかと云へば佛蘭西の勢力範圍に在る所の鐵道の一つである。

以上御話をした所で既設鐵道の大體のこと又未設鐵道でも清國が外國の借款に依つて經營をして居る所の、又經營をせんとする所の鐵道の大體の御話を終つたので、其他未成線のこと又は豫定線路のこと等に付て御話をすることは餘程面白い問題でもあるが、併し是は非常に澤山あつて徒らに御話が長くなるといふに

止るからして、大體右の御話で支那はどれ位の鐵道を架けるといふ計畫があり、それから之に對してどれ位出來て居り、又之に對して外國の資本が幾ら還入つて居るといふやうなことの觀念を得ることが出來るであらうと思ふからして、是れ位に止めて置くのである。

此鐵道の事に付ては日本でも清國貿易調査會あたりでも調べて居る所のものもあるやうであるが、自分の見た所で最も能く秩序的に之を調べて居る書物はケントといふ人が著した『支那に於ける鐵道企業』といふものがあるが、之を見ると此鐵道の由來、其他が秩序的に書いてあるからして支那に於ける鐵道の大體觀念を得やうと思ふ人があれば其書物に就て御研究になつたら至極利益のあることであらうと思ふので、此書物を御紹介をして置いて、此鐵道の御話は此處で止めて置きたいと思ふ。

### (リ) 楊子江航路

清國に於ける交通のことは所謂南船北馬といふ言葉がある如くに、固有の交通といふものは支那の楊子江以北であれば馬で以て交通する、以南であれば民船で

以て交通をするといふことである。それで今日と雖も大體に於て南船北馬であるので、併し文明的の機關として今鐵道といふものが出来た。一方には又蒸氣船が揚子江を上下して居るといふことになつて居る。此文明的の機關の一部分の鐵道のことを大體御話をしたからし。順序として揚子江の交通の状況を是から大體御話をしたいと思ふ。

自分が清國を旅行して流石は清國であると驚嘆をしたものが三つある。其一つは萬人の唱へて居る所の萬里の長城であり、第二が明の長陵であり、第三が揚子江である。此三つは世界至る處殆ど其匹儔を見ざる所のものであつて、支那を旅行する者は此三つを見れば、支那の如何にも雄大にして殆ど他國に比類を見ないといふことが出来るであらうと思ふので、是非は一度見なければならぬものである。そこで萬里の長城の話とか、或は明の長陵の話とかは後に雑談として御話をする積りであるが、茲には揚子江のことを大體御話をして置かう。

此揚子江は世界に於て是程運輸交通の自由で且つ長距離に利く所といふものは比類を見ないのであつて、先づ今日の所約三千噸位な汽船が江口より遡り得る

哩數が約千哩と唱へられて居る。即ち上海より起つて鎮江、南京、蕪湖、九江、漢口、岳州、沙市を経て、宜昌といふ處に至るまでの間のことであつて、此間が約千哩、此千哩の間といふものは日本の巡洋艦の相當なものがドン／＼逆航をし得るのであつて、其上流になると所謂三峽の險と唱ふる瀬がある。此瀬があるが爲めに大船は上流には行けぬが、是を越すと尙ほ數百哩上流に相當な汽船が行くことが出来る。之を要するに揚子江の途中に於て今言つた三峽の險といふやうな障礙があるといふ事實はある。併ながら全體に於て千五六百哩の間相當な大きな船が航行することが出来るといふので、實に其宏大なること驚くに堪えたるもので、清國では俗に大江又長江など、呼んで居る。揚子江の河口の幅は日本の里數で約九里と稱せられて居る。漢口あたりで先づ幅が一哩位はある。此揚子江は右の如く大きな河であるからして従て時季に依つて例へば雨季とか或は乾燥季とかいふのに依つて江水の増減するの程度も非常に甚いので、一番減つた時と一番増した時との、其差が五十尺あるといふ話なので、其増水をした時季に揚子江を航行して見れば、恰も大海を行くが如き者であつて、兩岸は低く見え、其沿岸各處に湖水を湛へて居るといふ

やうなものであつて、全く内地で云へば瀬戸内海でも旅行して居る如き感がするのである。然るに一旦水が退いて極く水量の少い時になると、殆ど江底を行くのであつて兩方の岸が全く山の創立したる如くに見えるといふやうな話を聞いて居る。自分が通航した時は約三十尺乃至三十七八尺位増水して居る時であつたから、寧ろ海の中を行くやうな感がせられた。是で想像して見ると、丁度漢口の下流約五六十哩の處に蘇東坡の赤壁の古跡がある。此赤壁の古跡あたりは今日では其兩岸に山といふやうな者は無いと聞いて居るが、秋季水の減つた時位に其邊を所謂民船で遊覽して行けば山高く月小にといふやうな景色が見えるのであらう。尤も揚子江の下流域は黄河の如くに始終廣大なる範圍で以て動いては居ないやうであるが、兎に角稀有な大河で、非常なる水力を有つて居るからして今日山である處のものは明日は水底になつて居るといふやうなことはあるので、數年経てば其地勢は變つて、昔の赤壁とかいふやうな所があつた文章に在るやうなものであつたのかも知れぬが、今日では其容子を見受けることも出来ぬやうな次第である。

又揚子江に流れ込んで居る所の枝川が澤山ある。其枝川の中で丁度漢口の口に流れ込んで居る漢水といふ河があるが、此漢水の如きは矢張り大船は往かぬが、小船であれば約千哩ばかりの航行が出来る。昔の長安は此漢水の水源附近に在るので、夫の阿倍仲麻呂が支那に行つたといふのはどういふ道を行つたか、我々歴史家でないから能く知らぬが、斯ういふ方の道を通つて行つたのでないかと思ふ。右に類似する枝川が澤山あつて、揚子江の流域の廣袤は殆ど測り知るべからざる程である。又此河が氾濫する爲に附近の土地が害を被むるといふこともあるが、要するに此河に依つて餘程土地が肥されて清國の一大豊饒地を爲して居る英國が此處に眼を付けてヤンツァーレーは英國の勢力範圍といふ札を立てたのは、勿論英吉利が最も早く優勢を以て清國に利權を張つたといふ歴史上のこともあるが、其の眼の着けどころの高いことには敬服の外はないのである。

今日此揚子江及び其枝流に依つて貨物旅客の運搬されて居ることは殆ど數知れぬのであつて、清國固有の船の種類だけでも猶ほ八百餘種もあるといふことであるから、其數の幾らあるといふことは殆ど茲に言ふことは出来ぬが、實に想像に餘あることであらうと思ふ。尙ほ此揚子江には非常に大きな筏が浮んで居つて、即



ち材木を上流から筏に組んで出すといふことで、其筏の上には數軒の家が立つて居つて、數家族がそれに住んで、其筏を運搬して材木を賣り、其收入を以て又貿易品等を買つて歸るといふやうなことも頻繁に行はれて居るらしい。

それ等のことは唯大體であつて、計數上何等御話することも出来ないのであるが、茲に少しく計數上に付て御話したいと思ふことは、汽船に依る揚子江の航行のことである、言葉を換へて云へば、揚子江には文明の利器の如何に利用されて居るか、又此文明の利器を利用して居る上に於て、日本がどれ程の分け前を其處に有つて居るであらうかといふことを大略御話をして置けば多少の参考になること、倍するのである。

そこで揚子江に於ける汽船の航路の御話であるが、揚子江には種々な航路があつて、第一に上海漢口線といふのがある、是が五百三十五哩、第二に漢口を起點として宜昌に至る漢口宜昌線が三百八十七哩、第三に漢口を起點として洞庭湖の方に行く航路で漢口湘潭線といふのがある、是が二百二十九哩、第四に漢口常德線といふのがある、是が二百五十二哩、第五に漢口からズット下つて九江よりして潘陽湖

といふ洞庭湖に續く湖があるが、是は潘陽湖線といふのであつて、百六哩、第六に上海蘇州線、此上海蘇州線といふのは揚子江の本流ではないが、揚子江と水が連絡をして居るのである、此航路は五十八哩、第七に、上海杭州線、此航路が百十三哩、第八に蘇州杭州線、是が百五哩、第九に鎮江清江浦線、此の線路が九十二哩、御承知の通り鎮江は揚子江の河岸にあるが、此鎮江からして大運河を北に行くと清江浦である、右のやうな風に航路が分れて居る、それで此等の水路の航行を營業として居る汽船會社は今日の所では其數が約八つある、第一が我日清汽船會社である、此會社は別に説明を要しないが、清國では日清輪船公司と稱へて居つて、其名で以て通用をして居る、第二が招商局といふものである、此招商局は清國側のもので、半民半官の組織で、明治十三年に創立をして居るものである、外國人にはチャイナ、マーチャント、スチーム、ネグキゲーション、コンパニーといふことで知られて居る、第三が太古洋行といふものであつて、是は英吉利の所屬であつて、明治十年頃に創立されたものである、此會社は英名バタフキールド、エンド、スワイヤー、コンパニーと斯う稱へて居る、第四が怡和洋行、是も矢張り英吉利の商會であつて、光緒三年に創立されて居

る其英名はシャードン、マヂソン、コンパニーといふものである。此商會がインド、チャイナ、スチーム、ネジキグーシヨン、コンパニーといふものゝ代理店として船舶運送業をやつて居る。第五が鴻安公司、是が矢張り英吉利の會社で、光緒十年に開業したものであつて、英名をゲッデス、エンド、コンパニーといふて居る。第六が瑞記洋行、是は獨逸の會社であつて、光緒二十五年に開業をして居つて、ハンブルク、アメリカン、ライオンを代理店としてやつて居る。其行名をアーノルド、カーバーグ、コンパニーと稱へて居る。第七が美最時洋行、是も矢張り獨逸の會社であつて、光緒二十六年に開業して居る。ノルド、ドイツツァー、ロイド會社の代理店を營んで居る。之を外國人間ではメルチャース、コンパニーとして其名を知られて居る。第八が東方輪船公司、是は佛蘭西の會社であつて、光緒三十二年に開業して居つて、ラシーン、アツケルマシ、コンパニーといふものが代理店として働いて居る。此會社はコンパニー、アシア、チツク、ツ、ナヅキガシオンといふ名を以て歐米人には知られて居る。是等の八會社は孰れも上海漢口間の定期航運業を營業して居るものであつて、其他尙は各所の枝川にも交通を開いて居る。

右擧げた會社が上海漢口線にどれ位な船舶を有つて居るか、即ちどれ位な運送力を有つて居るかといふことを見ると、我日清汽船會社が船舶の数が六、其登簿噸數が一萬五百二噸、招商局が船舶の数が五、噸數が七千九百六十一、太古洋行が船舶の数が四、噸數が八千四噸、それから怡和洋行が船舶の数が四、噸數九千九百二十七噸、鴻安公司が船舶の数が四、其噸數が二千三百三十七噸、瑞記洋行が船舶の数が二、其噸數が二千二百九十噸、美最時洋行が船舶の数が三、噸數が三千四百五十一噸、東方輪船公司が船舶の数が二、噸數が三千四百五十三噸、之を合計して見ると、船舶の總數が三十一、全體の噸數が四萬八千三百二十四噸、斯ういふことになつて居る。

右の計數で以て之を見ると、大體に於て日本が一番多い、それから招商局、太古洋行、怡和洋行、是等がそれに次ぎ、其他は餘程落る、併ながら以上御話したことに依つて此揚子江の航路に付て日本は非常なる強敵を持つて居るといふことは明かになるのみならず、是等の數強國が互に揚子江の航路を競争をしてやつて居るといふ大體のことが分るであらうと思ふ。

次に漢口宜昌線を營業して居るものは日清汽船會社、招商局、太古洋行、怡和洋行、

此四つである。此又船舶噸數等を言ふて見ると、日清汽船會社が二艘で二千四百四十七噸、招商局が二艘で二千二百二十九噸、太古洋行が一艘で二千二百六十四噸、怡和洋行が同じく一艘で千三百五十四噸、總計六艘で五千九百九十四噸といふことになつて居る。

漢口湘潭線——此航路をやつて居るものは日清汽船會社、太古洋行、怡和洋行、此三つであつて、日清汽船會社が二艘で千八百四十三噸、太古洋行が一艘で九百三十噸、怡和洋行が一艘で六百九十六噸、合計船舶が四艘で噸數が三千百九噸である。

漢口常德線——此線路を航行して居るものは日清汽船會社と太古洋行の二つであつて、日清汽船會社は一艘で五百七十九噸、太古洋行は一艘で八百一十一噸、合計二艘で千三百九十噸、九江南昌の航路、即ち潘陽湖の線路、此線路をやつて居るものは日清汽船會社と太古洋行であつて、日清汽船會社は一艘で六百六十一噸、太古洋行も同じく一艘で千百七噸、合計二艘で千七百六十八噸、大體右の如き狀況である。尙ほ其他のものをも總合して揚子江並に其支流に於て各會社が動かして居る所の船舶の數及び其噸數等が如何であるかといふと、日清汽船會社が全體で十四艘

で一萬八千二百六十噸、招商局が八艘で九千八百八十九噸、太古洋行が七艘で一萬二千四百七十六噸、怡和洋行が四艘で一萬九百七十七噸、鴻安公司が二艘で二千七百三十噸、瑞記洋行が三艘で二千二百九十噸、美最時洋行が二艘で三千四百五十一噸、東方輪船公司が二艘で三千四百五十三噸、合計四十七艘で六萬三千八百三十三噸、斯ういふことになつて居る。それで揚子江の汽船航行の大體を見れば、約五十艘ばかりの汽船が、其大きいものは大概三千四百噸、小さくとも五六百噸位のものであるが、是が常に往來をして居つて、互に營業を争つて居るといふやうな状態に在るので、尙ほ右の數字を各強國の國旗に依つて區別して見ると、斯ういふことになる。日本が十四艘で、其噸數が一萬八千二百六十噸、清國が七艘で、九千八百八十九噸、英國が十九艘で、二萬七千九百九十噸、獨逸が五艘で五千七百四十一噸、佛蘭西が二艘で三千四百五十三噸、右の如きことになつて居つて、即ち英吉利が一番優勢であつて、次には日本、次には支那、次には獨逸、次には佛蘭西といふことになつて居る。此汽船の運輸は寧ろ貨物の方ではなくて、旅客の方を主として居る様で、此の如き多數の船舶が揚子江を常に相來往して居るので、自然に競争が其間に起る。日清汽船の

如きは多少の保護を受けて居るやうであるが、一體の營業向から云へば是等の強國に對して此航路を維持して行くといふことはなかく容易のことではないので、殊に英國は政治上に於ては同盟國であるが、此長江航路に於ては最も恐るべき所の強敵であつて、我日清汽船會社の當局者あたりは此揚子江航路に付ては苦心經營をして居るやうに見受けられる。併ながら此の如く日本が日露戰役後發展をして、揚子江の航路に於ても二とは下らぬといふまでに發展をしたといふことは清國を旅行する人が餘程人意を強ふする所であつて、此汽船會社に向つて將來を囑望せざるを得ない。

揚子江の航行の尙ほ詳細なることは日清汽船會社の支店等も東京に在ることであるからして、其處等に閉合はさるれば分るのであつて、大體のことは右の數字で了解されるであらうと思ふからして、頗る簡單ではあるが、此御話は茲で止めて置くことにしたいと思ふ。

### (又) 清國新憲法の概要

自分等の見た所では清國に於て最も注意すべき事柄が二つあるので、即ち一つ

は清國が如何にして財政を持つて往くかといふこと、一つは、如何にして清國がある大きな國を統一して往くかといふことである。財政の大體のことは前に御話をしたのであるが、此財政權を中央に集中して往くといふことは容易なる業でない。又財政と密接の關係を有する經濟の點に於て貨幣制度の統一といふことが容易に行はれぬことであるといふことも前に御話したが、此點は財政經濟の方面に注意する者が深く研究をして、將來支那が如何に此點に於て成行くであらうかといふことを見るのは最も面白く且つ有益なることであらうと思ふ。

一面に於ては清國が尨大なる各省の統一をして、中央の權力と人民の權利が如何に調和して往くであらうかといふことが、是も亦非常に注意すべきことである。又政治家などは最も此點は研究をして多大の趣味を感ずることであらうと思ふ。併し自分等は政治家でもなし、又此點に付て敢て自分の想像を御話することも避けたいので、如何に右等の點が進みつゝあるかといふことの現況だけを御話して置けば足ることであると信ずる。

清國は所謂中央の權力と人民の權利とを調和する爲めに我邦の制度等に倣つ

て他日憲法を作り、又は議會を設置して、所謂立憲政體を清國に於て實行をしたいといふ希望を有つて居るやうである。其希望は曾に有つて居るのみならず、既にそれ／＼形式上發表をして居ることであつて、此事が果してどういふ具合に住くかといふことは我々の見物であるだらうと考へらるゝ。それで今日まで清國が發表して居る所の憲政に關する大體の御話を茲にして置くことは無益のことでもあるまいと信ずるから是から御話をして置かうと思ふ。

清國が明治四十一年八月に於て憲法發布、國會開設に關する上諭を公表して居る。此詳しいことを御話することは避けるが、大體此憲法は先づ日本のものを基礎として立てたらしいので、此憲法を實施して議會を開設する點に付て之を十年經畫として發表をして居る。即ち明治四十一年を以て第一年とし、それから四十九年に至つて始めて憲法を實施し議會を開始する。斯ういふことにして居るやうである。

此順序に依つて見ると第一年目には各省に諮議局と云ふものを興し、財政整理規定を發布し、國民教科書といふ者を編纂し、其他民法、商法、訴訟法等を編纂し、人口

の調査をする、是等の外にも二三あるが、大體さうなつて居る。即ち教育の普及を圖り、法典を作製し、財政を整理し、戸口調査をするといふことが眼目になつて居る。

第二年にやる事項は、十數個條もあるのであるが、其中の主なるものを云へば、茲に御話した諮議局の撰舉を實行して、實際之をやるといふことが一つ、資政院といふものを設けて其撰舉を行ふといふことが一つ、此資政院のことは後にザツト御話をする、それから地方自治章程といふものを設けるといふやうなことが、是等のことと並に第一年でやることを段々程度を進めて、尙ほ細かにやつて行くといふことがあるやうである。

第三年に於ては資政院議員を召集して開院式を舉行するといふことがある。それから省、州、縣等の地方自治を實施すること、地方税章程を制定すること、各省官制を制定すること、新刑法を發布すること、各省歳出の總數を審査すること、或は戸籍法を編纂するといふが如きが主なることで、其他尙ほ數件準備としてする仕事があるやうである。

第四年に至つては會計法を作る、全國歳出入の劃一を調査する、地方税、國稅等の

章程を制定、發布する民法、商法等を尙ほ改正をして往くといふやうなこと其他裁判制度のことをやつて往くといふことがある。

第五年には右等一年から段々進みつゝある仕事をやると同時に國家稅章程といふものを發布するとか、或は戶籍法を發布するとか、内外官制を發布するとかいふやうなことがある。

第六年には全國の豫算を立て、見ることに、行政審判院といふものを設けることに、刑法を實行すること、其他民法、商法、訴訟法等を研究して居つたものを愈々爰で發表するとか、其他數種のことを實行するらしい。

第七年には決算を作る、爰で始めて會計法を發布する、尙ほ教育の側から言ふと、人民の文字を知る者を百分の一に達せしむることといふやうなことがある。

第八年には皇室の經費を確定すること、審計院——日本で云へば會計検査院といふやうなものを設置すること、會計法を實施すること、民法、商法、民事訴訟法等を實行すること、人民の字義を知る者を五十分の一に達せしむるといふやうなことである。

第九年に至つて始つて憲法を宣布し、皇室大典を宣布し、議院法を發布し、上下議員選舉法を發布し、上下議員選舉を舉行し、豫算、決算を決定し、明年度の豫算案を制定して議院に提出する準備をする、清國內外官制を實行すること、弼德院顧問大臣を置く、是は日本の樞密院顧問見たやうなものであらうと思ふ、それから人民の字義を知る者を二十分の一に達せしむること、先づ斯ういふことで清國が憲法を發布し、議院を開き、以て權力と權利との調和を圖ることをやるらしいのである、此中で前に御話した所で見ても、例へば財政整理といふやうなことに付ても既にやりつゝある又諮議局を設け、其議員の選舉もやつて居るとか、或は法典の編纂もやつて居るとかいふやうなことで兎に角上諭發布以來相當の着手はして居るらしい、併しながら此十年計畫の如く果して往くかどうかは、前途猶ほ長いことで、疑問に屬することではないかと思はれる。

右の中で御話をして置かなければならぬのは資政院といふものであるが、是は詰り議院の下地を成す處のものであつて、明治四十一年の八月に資政院章程に關する上奏といふものがある、此上奏文を讀んで見ると、其一節に、日本が立憲を豫備

するに當りては明治四年左右兩院を設け、七年地方官會議を開き、八年元老院を設け、二十三年終に憲法を發布して國會を開き、其議院の基礎を籌畫する所詳細を極む云々といふことがあつて、詰り日本の憲法政治の歴史等に鑑みて、先づ上下兩院を設ける前に資政院といふものを設けて、之をして地方諮議局といふものとの關係を保たしめ、諮議局を監督することをやるらしいのである。

此資政院の條例を見ると、資政院は有志に依り決を公論に取り豫め上下議院を設くるを目的とすといふことがあるが、是か即ち大體に於て此目的である、此資政院には正副總裁各二人、副總裁は時としては四人を置く、其議員は勅選に依る者もあり、又は互選の方法で以て出る者もある、其會議は年に通常會一回、其他臨時會を開く、斯うなつて居る、其議員の撰舉に付ては、一、王公世爵、二、宗室、受羅、三、各部員、衙門四品以下の者、但審判官、檢察官、巡警官は此限に在らず、四、資産額百萬圓以上の者にして諮議局議員の被選の資格ある者、五、各省の諮議局議員、此の如きものゝ中に、滿三十歳以上の者から撰舉するといふことになつて居る。

斯ういふ鹽梅の組織で詰り此資政院といふものは地方に諮議局を置いて、諮議

局の又上の締括りをする所の機關になつて居るらしいので、此等の關係は次に御話をする所で大體は御分りになることゝ考へる。

此諮議局章程は明治四十一年の七月に發布されて約六十二條から出來て居つて、なか／＼精細を極めた規定である、此章程に依つて見ると、諮議局は總督又は巡撫の駐在所に之を設くるといふ原則になつて居る、此總督、巡撫の駐在所は以前に行政組織の御話をする時分に述べたと思ふ、諮議局議員は複撰舉法を用ひて之を選任する、其議員の數は各省異つて居るが多きは百四十名、少きは三十名である、撰舉資格は矢張り是も日本の法制等に依つて居るのであるが、滿三十五歳に達する本省在籍の男子といふことであつて、左の資格を具ふることを必要とする。

- 一、會て本省地方に在りし學務及び其他の公益に従事すること三年以上に及び著しき成績ある者
- 二、會て本國或は外國の中學堂及び中學相當或は以上の學堂を卒業し其卒業證書を有する者
- 三、舉貢生員 以上の資格ある者

四會て實職 官吏文七品、武五品以上に任じ未だ免職せられざる者  
五本省地方に在りて五千元以下の營業資本或は不動産を有する者  
又本省在職の男子に非ざるも年齢二十五歳にして、本省に十年以上居住し、其居住地に於て一萬元以上の營業資本又は不動産を有する者は議員を撰擧することが出来るといふことになつて居る。

それから被選舉權はどうなつて居るかといふと、本省の籍に屬し、或は本省に居住すること滿十年以上に及ぶ男子にして滿三十歳以上の者は被選舉權を有することになつて居る。

其他選舉權並に被選舉權に付てそれ／＼例外等が設けてあるのは、矢張り内地の例に依つて略々同様な規定が設けてあるらしいさうして議員の任期が三年、正副議長の任期も同様になつて居る。

この諮議局の職務權限はどうであるかと云へば、

- 第一 本省の求めに應じ正に改むべき事件を議決すること
- 第二 本省の歳出入豫算を議決すること

第三 本省の歳出入決算を議決すること

第四 本省の税法及び公貨を議決すること

第五 本省の擔任義務の増加を議決すること

第六 本省單行章程規則の増補改修を議決すること

第七 本省權利の存廢を議決すること

第八 資政院の議員を選擧すること

第九 資政院の諮詢に答ふること

第十 總督巡撫の諮詢に答ふること

第十一 本省自治會の爭議を裁決和解すること

第十二 本省自治會或は人民の請願建議を受理すること

斯うなつて居る、それから此諮議局で確定した事件は總督、巡撫に上申をして公布施行する、併ながら總督、巡撫が之に賛成をしない場合には尙ほ諮議局に再議を求めて、尙ほ諮議局で前議を固執して居るといふ場合には總督、巡撫は之を中央の資政院に送つて其裁決を求め、諮議局で否決した事柄であつて總督、巡撫が之を



賛成しないといふやうな場合があれば、矢張り右の手續に依て諮議局に再議をさせ、尙ほ諮議局が應せぬ時には資政院に裁決を求むるといふ如き手續になつて居る。

通常會は一年に一回其會議が大體四十日間として、新曆の九月一日から十月十日までといふことになつて居つて、之をモット延長する場合等の規定も出來て居るやうである。

又此規程に依つて各省の巡撫、總督は諮議局の選舉並に會議等を監督するの充分なる權力を有つて居て、或は此諮議局を解散するとか、停會するとかいふ如き重大なる權利も有つて居るやうである。詳しいことは諮議局章程を讀めば明に分ることであるが、大體の組織は先づ右の如きものであつて、之を約言すれば各省に選舉に依る參政機關が出來て、此機關の決議したことを大體に於て總督、巡撫が實行し、此又上を括る爲めに北京に資政院といふものが置かるゝのである。地方に依つては此諮議局の選舉をやつて居り、又は既に終つたといふ話も聞いて居るのであるが、憲政の實行に付ての第一の豫備も出來掛つて居る状態になつて居る。

それで此の如き機關を先づ根本として、前に極く簡略に御話した如くに十年經書で以て清國が立憲政體にならうといふことである。併し此事に付ては色々政治家の中には説があるので、立憲政體を執ることが清國の爲めに利益であるや否やといふことが非常な問題ではないかといふ話もある。先づ其説に據ると、或は選舉の爲めに滿漢人の争を一層深刻ならしむるといふやうなこともあるとか、又は我邦憲政の施行當時に於いても多少其傾があつたのであるが、議員に出る所の者は何れも無資産とか、或は唯議論を玩ぶ者などがあつて、資産家其他眞面目なる業務に従事して居るやうな者は出ないといふことからして、寧ろ有害無益であらうといふやうな觀察をして居る人もあるやうである。併し是が果してどういふ鹽梅になるであらうかといふ將來の豫想等に付いては多少の意見があるが、政治論は避けることにして置かう。

### (ル) 利權回收

滿洲から掛けて支那本部全體を通じて、旅行者が特に感ずる所のことは、内地に於ても大分衆人の話頭に上る利權回收といふことであるので、是は管に日本人に向

つての利權回收といふことではないのであつて、外國一般に對して利權回收といふことの熱が各處に於て盛に行はれて居るので、此事は清國としては尤もな話であつて、今日清國が歐米若くは我邦等の列國に對して其文明の程度が後れて居るといふ關係から政治上は勿論のことであるし、經濟上に於ても動もすれば其利益を侵蝕せられて居るといふことがあるので、少しく海外の事情に通じて居る所者は勿論又海外の事情に通じない者にしても、清國の如き極く事大主義の盛な處に於ては此狀況を見て利權回收といふ觀念を起すのは無理もないことであらうと思ふ、我邦に於ても一度斯の如き時代を経験したことであつて、我々が清國の利權回收熱が非常に高いのを見て、俄に神經を起すとか、或は之を不快に感ずるとかは甚だ襟度の狭い話であつて、此の如きことが若し有りとすれば能く其間に處して相互の感情を害せず、相互の利益を發展するやうに文明的に公明で大なる考で以て進んで往かなければならぬと思ふ。

此利權回收は文明國に於て教育をされた者が主として之を唱道し、又是等の思想を鼓吹して居るといふ景況が見える、清國學生にして我日本に遊學して居つた

者が彼地に歸つて居る者が澤山ある、是等の者とか、或は清國の學生にして遠く歐米に遊んで、其の狀況を見て歸つて來て居る者等が、國の主權とか、或は個人の權利とかが發達して居る諸文明國の狀況を見て來て清國に歸つて來ると、どうしても此考は起らなければならぬので、日本で數千人の清國學生を養成しつゝあることは、則ちそれ等の者が清國に歸つては利權回收の首唱者になるといふやうな狀況になつて居る、是等の爲めに政治上又は經濟上に於て我邦のみならず歐米諸國等も不利益を蒙つて居ることが多くあるのであらうと思ふが、併し是等の現象があるために直ちに清國人の教育、訓練等を我邦に於て引受けてやるのは頗る面白からぬことであるといふやうな推論を爲すことは至極狹量ではないか、兎に角、日本の旅行者等が清國各所を遊歴して、屢々日本人の彼地に滞在して居る者から聽き、又は其他清國人から聞く所のことは、此利權回收といふことであるので、随分今日では此熱度といふものが高度に在るといふことは疑ふべからざることであるので、此高熱を冷して行くといふことは無論我國民等の注意して考へなければならぬことであらうと思ふが、併し前申した通り此事はさう心配をし、さう恐るるに足

らぬことではないかと斯う自分は観察して來たのである。

### (三) 新聞紙の勢力

次に清國に於ける新聞の勢力といふ者は日本人が内地に於て想像するよりも一層意外の勢力を有つて居るのである。北京を首め、天津、漢口、上海といふやうな所には随分今日では多數の新聞社があつて、其購讀者もなか／＼尠からぬものであるといふ話である。又此外に右の如き重要な開港場に於ては多數の外字新聞があつて、或は英字新聞であれば英國の利益を鼓吹する、獨逸の新聞であれば獨逸の利益を鼓吹する、佛蘭西の新聞であれば佛蘭西の利益を鼓吹するといふ鹽梅で以て、各所に此新聞があるやうである。それで清國の新聞がどういふものがあり、或は外字新聞がどういふものがあり、又は如何なる讀者を有て居るといふやうな詳細なことは、ちよつと手控が見當らないので御話をすることが出來ぬが、要するに此勢力といふものはなか／＼侮るべからざることであるので、北京に於て或日本人——此人々は随分清國には長く居る人らしいが、直隸省の主なる郡邑を巡回して歸つての話に依ると清國人が文明の思想を得ることは先づ以て新聞に依るの

であつて其新聞を讀むやうな所の人は、地方で云へば先づ村夫子といふやうな所の者で此人等が新聞紙上の色々の出來事を郷黨の者に話して聞かせて文明の空氣といふものが段々清國內の各方面に行渡つて來るといふ状態になつて居るらしいので、又前に御話した歐米若くは日本に留學をして居つたとかいふ者が此新聞に種々なることを書くとか、或は投書をするとか、又は其新聞に書いてあることを解釋演譯して話すとかいふやうなことで、なか／＼新聞の勢力といふものは侮るべからざるものであつて、文明の知識又は外國の事情を清國人が知るには之が唯一の機關で、其他には新教育の制度もそれ／＼發達しつゝあるが今日ではまた普及する場合に至らぬからして、却て新聞の知識が最も優勢を占めて居るといふことである。是は管に直隸省のみならず、各所に於て事情を聞いて見ると皆同様の筆法であるらしい。

それで新聞の勢力が右の次第であるからして、例へば日本の新聞雜誌等に掲げられたる所は、苟も事清國に係るやうな事柄は是等の新聞に皆轉載さるゝ此轉載された所の文字は所謂漢文であるからして、内地の新聞に書いて居ることよりか

は餘程大きく且つ意味が強く飾られて記載さるゝといふことになる。此文字を讀む所の者が其郷黨等に話すにはこれに尻尾が附いて行くから、我々が内地の新聞雑誌等に書いてあることで極く無意味に考へらるゝことも、是が清國人の頭に透入るのには随分意味のある大きな事として響くのであつて、清國に居る日本の有力者等は此點に於て餘程日本の新聞雑誌が清國のことを書く場合には注意に注意を加へて呉れぬといふと困る。所謂利權回收熱といふやうな風のものも益々其度を高め従て外交其他の關係に及ぶといふことを餘程心配をして居るらしいが、是は至極尤のこととおもふ。

右の如く清國に於て新聞の勢力が餘程有力であるといふことであるから、各國は何れも新聞紙を有つて居つて、而して世界の事情を報道するのみならず、自國の利害關係のことは遺憾なく其機關に依つて發表して清國人の頭に入れるといふことを力めて居るのである。是は最も必要なる手段方法であらうと思ふ。而して清國に於ける外國新聞の如きは、大體に於て購讀者はさう多くないし、又廣告の如きもさう澤山に集むることも出来ぬといふことで、新聞事業の經營としては餘り利

益がないのみならず、或國の新聞の如きは之に多大の補助を與へて居るといふやうなこともあるかの如く聞いて居る。併し是は清國に於て外國人の取る所の道として、は誠に然るべきことであつて、斯くして始めて清國人をして其諸外國の事情を明ならしめ、又清國人の感情を和げ、彼地に於て充分なる利益を獲得することが出来るのではないかと斯う思はれるのである。尤も歐米列國が左様に移めて居るのみならず、日本に於てもなか／＼此事は油断なくやつて居るやうである。自分が北京に於て見聞した所に依つても、例へば我時事新報の如き龜井某を派遣して、充分に彼處で日清事情の疏通を圖つて居る。又大阪毎日新聞は豊島某を大阪新報は長谷川某を派出して居るといふが如きことである。尙ほ此外にもあるらしい。要するに是等の新聞の代表者といふものは北京の事情にも能く精通して居り、従つて清國の事情も大體に於て能く觀察して居つて、相當に機宜の處置が執れるといふ人であるから、餘程此點に於て日本も有力なる勢力を振つて居る如くに見えるのである。

其他日本人は北京に於て順天時報といふものを出して居る。此順天時報は清國の文字に於て書かれる新聞であつて、上野某某といふか之を主宰されて居るやう

である。又清國語のみならず外國の文字即ち英語で出版されて居る所の新聞チャイナタイムスの如きは松本某などが行つて充分に働いて居るやうに聞いて居る。又先きにも一寸話したか各列強國からしてそれ／＼通信員を出して居つて此通信員がそれ／＼有力なる地位勢力を占めて居るやうに聞いて居る。其中でタイムスからは所謂先達までドクトル、モリソンといふものが出て居る。アッソンシエ、アット、プレススからはコール、ホルニツクといふものが出て居る。ロイナルからはコッターが出て居り、ニューヨーク、ヘラルドからはオールが出て居り、ノルド、ドイツ、ロイドからはクリューゲルといふ人が出て居るといふやうに、歐米各國がそれ／＼有力なる通信員を北京に置き、又相當に有力なる代表者を出して所謂自國と清國との間の事情の疏通を圖つて居るといふやうな有様である。

以上話した如く清國に於ける新聞の勢力といふものは侮るべからざるもので新聞が輿論を作るといふやうな時代であるからして將來と雖も尙ほ此事は益々進んで充分なる機關を設けて、さうして能く日本の事情を彼地に移し、又彼地の事情を日本に移して、互に誤解を來さないやうに、其真相を能く知つて、極く平和的に

通商貿易其他の事をやつて往くといふことは何人が考へても盡力をしなければならぬ事柄であらうといふことを自分は信じて居る。

## (7) 清國雜話

今日から支那に於ける雜談を始むることにしたいが、自分の旅行した地の順序に依つて段々と御話をして行きたいと思ふ。併し先以て御断りして置いた通り、別段に面白いことはなく普通の遊覽者が見るべき所とか、或は見た感じとかいふの一部分に過ぎないのである。

### 一 天津雜觀

支那本部に這入つて先づ自分の行つたのが天津であるといふことを御話をした。此天津は所謂支那の三大商業地の一であつて、商業上から見れば餘程觀察の値打する所であるが、遊覽とか見物とかいふやうなことから言へば殆ど値打のない所である。御承知の通り天津は白河を挟んで居つて、此の白河には所謂大運河が會流して居るので、舟楫は餘程便利に出來て居る。天津の支那市街は西北の部分に固

つて居る、此支那市街に直ちに接続をして居るのが即ち日本の居留地である、其他の外國居留地は白河を挟んでズット東南の方に伸びて居る、日本の次が佛蘭西、其次が英吉利、其次が獨逸、それから露西亞の租借地であるとか、或は白耳義の租借地であるとか、埃地利の租借地であるとか、伊太利の租借地であるとかいふものが右等の居留地の反對側に在る、便利から云ふと佛蘭西の租借地、英吉利の租借地、獨逸の租借地等が最も便宜な地位に在るやうである、それは海からは白河を遡つて來る船が此居留地の埠頭に着いて、荷物を積卸する便宜があるので、此邊は最も商業上に有利なる地勢を占めて居る、併し日本の居留地も矢張り白河に沿ふて居るので、同じく便利を享有すべきものであるが、日本の居留地の少しばかり下流即ち天津の停車場から佛西蘭の租借地に這入る所に萬國橋といふ橋がある、此橋があるが爲めに上流汽船が上ることが出來ぬといふので、日本の商店が貨物を輸入する場合には、主として英國租借地の埠頭を利用することになつて居つて直接に日本の居留地の埠頭で貨物の積卸をすることが出來ぬ、斯ういふ不便が此の居留地には伴つて居るのである。

居留地のこの話になつたからして附加へて御話をして置きたいのである、が元來居留地の經營に付ては御承知の如くに我邦では外國の專管居留地特別會計法といふものが出て居つて、此會計法に依つて居留地を經營するといふことになつて居る、此法律に依ると此特別會計は帝國專管居留地内の地所家屋の拂下代金其他一切の收入を歳入に立て、同じく居留地内の地所家屋の買收、居留地の設備其他一切の費用を歳出に立て、居る、尙ほ此會計の收入金額に不足のある時には百五十萬圓を限度として國庫内其他の會計から一時借入をすることが出來ることになつて居る、其他種々の規定があるが、兎に角斯ういふ法律があつて、外國に於ける專管居留地を經營する遣り口になつて居る、併し此法律は何處にでも適用はされて居らぬので限定されて居る、即ち此法律の適用を受けて居るのは天津專管居留地、蘇州專管居留地、漢口專管居留地、今日の所では先づ此三つに成て居る、而して帝國政府は天津の居留地には餘程注意を拂つて居るのである、從て自分等の行つて見た所に依ると、此居留地の建物其他は随分立派に出來て居つて、外國の居留地等に較べて見て甚しく遜色があるやうにも見受けなない、併ながら商賣の點から

云ふと、例へば英吉利の租借地の如きは建物も無論立派であるが、餘程商業等が振ふて居るやうである、それに續いては獨逸の租借地である、之に續くのが佛蘭西の租借地であるといふ鹽梅になつて居る、是等は最も各其國の勢力を代表するものであつて、然るべきことであらうと思ふが、唯茲に天津の居留地の者が遺憾に感じて居るのは、此地の外國貿易は無論其他の商取引に於ても支那人を相手にするのであるからして、一番便宜な場所と云へば支那の市街に直接に接して居る處であつて此點から云へば日本の居留地が最も便利な地位を占めて居るのである、併ながら右の如く便宜な地位を占めて居るにも拘らず其商業の状態はどうであるかといふと、他の三つの強國に比しては餘程振はないといふ狀況が旅行者に有々と見えるのである、此事は前に御話した船舶が直接に日本租界埠頭に着いて貨物の積卸をするのが出來ないといふ事情があるといふとも一つの原因であらうが、要するに外國の租借地では何れも其本國人の數は非常に少いのであつて、支那人を誘致して商賣をさすといふことになつて居る、英租界に行き又獨租界に行つて其商業地を見れば、立派な西洋風の建物であるが、其中に住つて商賣をして居る者の大

多數は矢張り支那である、然るに日本の居留地はどうであるかといふと、日本人は非常に多い、而して支那人も随分此中に混入つて仕事はして居るやうであるが、どちらかといふと支那人は寧ろ歐米の居留地に多く招致されて、日本の居留地には餘り招致されて居らぬといふやうな狀況があるらしい、或人の説を聞くと、日本の租界は一體警察がやかましい、或は清潔法をやかましくいふ、或は博奕等の取締が嚴重に過ぎるとかいふやうなことで、寧ろ警察權が苛酷に行はれて居るらしい、是は至極結構なことであるが清國に於て支那人の如き潔癖ならざる人間、若くは非常に射倖心に富んで居る人間と相俱に商賣をして行く上には餘り窮屈過ぎるので、清水魚棲ますの類ではあるまいか、又た一方から云へば歐米人は其數が少く主として支那人に仕事をさせ、又は支那人を招致して支那の商店を此處に開いて商賣をさすとかいふ方針を取つて居るが、日本の方は人間も多いし、又支那とは常に競争的に出て行くといふやうなことであるから、從て此處には支那人を招致することが充分に出來ないといふこともありはしないかといふ話も聞いて居る、是等も多少理由のあることであらう、自分等の旅行した當時は一般の不景氣に加へて

内地の不景氣を受けて此地も非常な不景氣を極め、商賈が萎靡し明家が非常に譯山あるといふやうな譯で、他の居留地から見ると數等劣つて居るのではないかといふやうな感が起つた。

右の如く此地の商業貿易が振はないといふことは即ち居留地の經營に付ても収入が少いといふことである。從て居留地を改善して往く上に付て充分なることが出來ないといふやうなことが起るのであるから、右等の點は餘程經世家の考へなければならぬことではないか。是等の事情は當に天津だけでないので、滿洲より支那本都を歩いて見ると、何れも日本の居留地は萎靡として振はないといふ状態を示して居るのであるから、居留地全體として充分なる注意を要することではないかと、斯う思ふのである。

天津では別に遊覽すべきやうな場所も多くはないので、唯居留地を散策して其様子を見るとき、いふことの外は、李鴻章の廟位なものである。御承知の通り李鴻章は長く直隸總督をやつて居つて久しく天津に居つたので、天津の商賈人等は李鴻章の恩澤を受けて居るのみならず、世界的の有名な人であるからして、李鴻章の廟と

しては此處の廟が一番大きいといふことである。自分も一應見物をしたが、其建築等は極く粗雑であるが、今日の建築としては先づ宏大なものゝやうに見受けられた。此李鴻章の廟は公衆の遊覽地になつて居つて、其中に茶店などがある。石を疊んだ樹木のない支那流の庭があつて、西洋流に噴水が湧いて居る。頗る沒風流ではあるが、兎に角一時の遊樂には適して居る。此他別に天津では見物すべきやうな處は餘り聞かなかつた。

次に北京の御話をしたいと思ふ。

## 二、北京雜觀

北京は随分譯山御話するところがあるので、漫遊者などが常に此處には數日を費す處であるらしい。けれども自分の御話する所は其一部分に止まるのである。北京城内の中央に皇居があつて、此皇居を廻つて人家が櫛比して居る。此城廓は長方形を成して、普通旅客が天津の方から來て降車する處は、北京内城の門の一つである崇文門(?)で此門を這入ると莊麗なる旅館其他外國銀行公使館とかいふやうなものゝ集團が、其附近にゾットとある。それで地形のことは別段詳しくは御話する必要



もないが北京で普通の旅客が見物をする處が孔子廟、國子監、鼓樓、鐘樓、觀星臺、天壇、雍和宮等であつて、城廓外で北京に近い處に白雲觀といふ處がある、尙ほ有名なる萬壽山、玉泉山、植物園といふやうな風なものがある、自分等も是等の場所をざつと見物をしたから此御話を少ししたいと思ふ。

右御話した中の雍和宮、孔子廟、國子監等は北京の東北の方に在つて、殆ど是は城壁に接した場所に在る。

## 孔子廟

今日孔子廟である處は以前に國子監のあつた所であるといふ話である、其建物等も非常に宏大で、且つ神寂びて居る風が見えて居る、孔子廟の中に柏の非常に古びて、青苔の生へた大木が幾つもある、滿洲の所で御話した如くに此附近でなかなか老樹大木を見るところといふことは稀であるが此廟には鬱蒼たる柏の老樹が澤山あるが爲めに、餘程尊嚴を増すといふやうな感じが起る、此廟の中に種々な建物がある、大成殿といふが祭殿になつて居る、此處に孔子の位牌、其他孔子の弟子、即ち顔子であるとか、或は曾子であるとか、いふやうな人の位牌がズット並列して祀つてある、其位牌は極く簡單なもので、其前に祭典をする机が列べてあつて、或は燭を燃し、

香を焚くといふ場所が設けてあるに過ぎないやうであつた、此孔子廟で最も人の喜んで見る處殊に文人墨客等が垂涎して去る能はずといふやうなものゝあるのは、一は大聖殿の兩側に長い廊下がある、其處に論語の石刻がズット立つて居る、即ち高さが一間餘もあるやうな石に論語が刻み附けてある、是等が餘程珍しいものであらうと思ふ、併ながら自分等は能く見る暇がなかつたが見る人が見れば餘程面白いものであるやうに感じた、尙一番面白いのは石鼓といふものがある、此石鼓は考證學者に言はずと随分面白いことがあるのであらうが、兎に角三千年前のものであるといふことである、其石鼓は其名の示す如く、丁度太鼓の形を成して居る石であつて、其石に文字が刻んである、其文字は周の宣王の時分の文字らしいので、傳記に依ると周の宣王の使臣史籀といふ者が始めて大篆といふ字體を作つたので、其字が詰り石に刻み込んである、其字が三百八十六とかあるといふ話である、今日では時代が古いのであるからして非常に毀損して居つて、文字も切れ／＼になつて居つて、分る字は少いのであるが、昔此石鼓はどういふとに使つたかといふこと等は能く分らぬのであるが、或人の話を聞くと、政令を出す、即ち布達をするとい

ふやうな場合に、此石に其事件を刻んで村間の入口といふやうな處に持つて行つて置くのである。さういふものに使つたといふことであるが、果して然るものかどうかが自分等は詳しいことは知らぬが、兎に角珍しいものらしいので、一見するの値打があると思ふ。

國子監

國子監は丁度孔子廟の隣にあるので、是も亦孔子廟と略ぼ同一模型の建物であるが、跡に記すべきことはいない。唯此國子監といふ處は御承知の如く、儒教の祭典を掌る處であつて、建物等が宏大であるといふだけで、何等別に見るべきものも無かつたやうである。

雍和宮

此孔子廟と國子監の直ぐ東の方に所謂雍和宮といふものがある。此雍和宮は今印では喇嘛教の廟である。なせ雍和宮と言ふかといふと、以前は親王の府臺であつたといふことを言つて居る。清朝が政略上喇嘛教を餘程尊敬をして、之を各所に傳播せしむるといふやうな意味から、特に喇嘛教に之を寄進して、さうして此處に喇嘛塔主を置いたといふことになつて居る。雍和宮は喇嘛教の大體の模様が見えるのみならず、此處に清朝あたりの親王の府臺といふものは如何なるものであつたか

といふことの様子が分るので、最も人の見物をする處であるらしい。此雍和宮の門前に所謂牌樓と稱へる所の門がある。即ち照泰門とか雍和門とかいふやうなものがあつて、其中に各種の建物があるが、就中雍和宮、永佐殿などといふものが立派な建物であつたやうに記憶して居る。

喇嘛教

此雍和宮のことを話する序にちよつと御話をして置きたいのは、喇嘛教のことであるが、此喇嘛教のことは支那に關する各種の本にあるから明であるが、極く大體を御話すると、喇嘛は則ち矢張り佛教に外ならぬのであつて、佛教の一つの變體である。此喇嘛が印度から支那に運入つて來て紅教といふものが第一に起つた。此紅教は則ち西藏に一番最初運入つたものであつた。なせ紅教と稱へるかといふと、其坊主が皆紅の衣を着て居るといふことから言つたらしいので、今日でも北京あたりを歩くと赤い着物を着た坊主がポツ／＼歩いて居るのを見るが、是れは即ち紅教に屬する喇嘛教徒であるらしい。此の紅教は傳へ聞く所に據ると、妻帯することが出來るので、段々衣鉢を自分の子孫に傳へて行くといふことになり、又其の教旨が主として日本で言へば切支丹といふやうな傾があるらしいので、神變不思議

の術を行ふて人を驚倒せしむるといふやうなことを以て専ら布教したらしいのである。此の紅教は徒らに奇術異法で以て其の教旨を擴めて行くといふことであつたからして一般の宗教心を養成するといふ上に付ては餘り効果がなかつたらしいので、それで喇嘛教に黃教といふ一種の他の宗派が起つて來た。此黃教は傳記に依ると八思發といふ者が始めて拵へたらしいので、即ち切支丹的では逆も一般を心服さして濟度して往くことが出來ないといふことを看破して、眞面目なる佛教の思想を喇嘛教に入れて來たので、又教徒は名の現はす通り丁度紅教が赤い着物を着て居る如く黄色い着物を皆着て居る。今日清國あたりに喇嘛教として尊敬を受けて居る所のものは大體此黃教に屬して居るものである。其坊主は妻を娶らない。其教旨に依ると誰か矢張り其衣鉢を受くべき人が自然に再生して出て來るものである。即ち茲にえらい坊主が居つて、其坊主が死ぬるといふことがあれば必ず復た何處かに再生して來るといふやうな信仰を持つて居つて、相當に德行の高いつ坊主を見附け出して、さうして其衣鉢を繼かしめる。斯ういふことになつて居るといふ話である。清朝では此黃教を専ら利用して北邊を治めて居つたので、御承知

の通り西藏は矢張り喇嘛の宗旨であつて、政教一致の政體を執つて居る。それで西藏を抑ふるに付ても矢張り清朝が熱心なる喇嘛教の信者であるといふことの手で往くことが政略上宜しい。又蒙古とか或は新疆省等に至ると矢張り是も宗旨は喇嘛教である。此處等も成べく喇嘛教を盛にしてえらい奴は皆坊主にして仕舞ふさうして又清朝は喇嘛教に歸依して、喇嘛教はえらいものであるといふことを示して歸服さすといふやうな政略を取つて居る。蒙古新疆等の西藏と違ふ點は喇嘛教の教主が所謂宗教の長であつて、政治の長ではない。それで政治に付ては清朝から別に人を派し之を牽制して居るといふやうな次第になつて居るといふ話を聞いた。兎に角清國が宗教政略に苦心慘愴して以て餘程其効果を奏して居つたやうに見える。今日雍和宮は即ち喇嘛教の本山みたやうなものになつて居つて、是が清朝との關係は餘程密接であつて皆之を信仰されるといふことになつて居るらしい。それで最初雍和宮には喇嘛教の坊主が千人程も居つて、此千人の坊主には一人に毎月銀一兩五錢、白米三斗といふものを給して居つたといふ話である。然るに段々清國も財政窮乏といふやうなことになつて來て、光緒年間に右の僧侶の數を半

減し、又給金給米といふものを半減することを斷行して、今日では此處に五百の僧侶が居るといふことになつて居る。

尙ほ又此の雍和宮にも例に依つて如何はしい佛像が無數に祀つてあつて、是までは遊覽者が好奇心に驅られて頻にそれを見物をしに行つたものであるが、今日ではなかく其佛像を遊覽者等には示さぬやうな方針を執つて居るらしい。是等の佛像のことも宗教上から研究して見ると、面白いことがあるのではないかと思ふ。併し自分等は右等の知識がないからして詳細のことは茲に御話することは出来ない。雍和宮の本堂で老僧が數十名の雜僧に説教をして居る所を見聞したが、其言語は蒙古語か西藏語であつて、頗る強い力のある語で、露語とか獨逸語とかよりも一層ギク／＼して居る。併し聽者をして感奮激昂せしむる様な音調で餘程面白く感じた。

鼓樓鐘樓

次に鼓樓鐘樓といふものがあるので、是は支那の大きな都會には必ずあるものであつて、別段見物を値打する所のものでもないが、兎に角市街中に嶄然と聳へて居るので人の耳目を惹く所のものであつて、北京にも矢張り此鼓樓鐘樓といふもの

觀星臺

のが存在して居つて市街を歩く時などは大變目當になつて宜い、閉く所に據ると元の世祖の頃に夜を警める指令塔として鼓樓鐘樓を造つて、鼓樓に時計を置いてあつて太鼓を打つとか、鐘樓で鐘を敲くとかしたもので、其建築等に付ては宏大なものではあるが、特に御話する程のこともない。今日北京の鼓樓鐘樓の如きは餘程頽廢をして居る如くに見受けた。

それから觀星臺といふものがあるが、此觀星臺は北京の東南の方の城壁に接した處に在るので、詰り名の現はす如く天文を観察する場所である。支那の天文のことは或書物に依ると回々教から來て居るらしいので、回々教が詰り支那に天文のことを始めて輸入して、其知識に依つて清國が天文のことを研究したらしいので、丁度元の時分に郭守敬といふものがあつて、是等が餘程天文の事に精通して居つて、此處に色々な天文に關する機械等を据へて星を占ふといふことをやつて居つたらしい。現今残つて居る所のものが天體儀、赤道儀、黃道儀、地平經儀、地平緯儀、紀限儀といふやうなもので、孰れも銅製のなかく立派なものである。是等は從來あつた所のものが頽廢して新調になつて、康熙年間即ち千六百七十三年頃造つたもので

あるといふ話である。併し清國の天文のとは今申したやうに回々教から出て居るといふのであるが、又明の時代あたりには歐米人を使つたものであつて、即ち明の利馬竇といふ人——此人は伊太利人らしい——此男が清國で天文の事を研究し曆を正すといふことをやつたらしいので、明から清に移つた後も、清の道光十八年即ち紀元千八百三十七年頃まではズット引續き外國人を雇ふて、天文のことは専らやらして居つたといふことが書物に見えて居る。團匪の亂の時に聯合軍が北京に侵入したといふことは何人も知つて居ることであるが、此時に佛蘭西と獨逸の軍が右の天文臺に在る天體儀等を占領して自國に持つて歸つた。其後此の如き其國の文化の歴史をなすやうなものを戦利品として持つて行くことは、所謂公徳上不都合であるといふことから、佛蘭西はたしか之を返したといふ話である。獨逸に行つて居るのはまだ返らないとか、返つたとかいふ話を聞いた。鬼に角是等は北京に行つて一見を値打する所のものであると、自分は斯ういふ風に感じて來た。

## 天壇

次に天壇の御話であるが、此天壇は北京の南方即ち内城の外に在つて、隨分宏大なる構へのものであるので、此天壇の在る邊は北京では外城と稱へて居る。城廓が

二重になつて居るので、こちらの方は外廓になつて居るからさういふ風に稱へて居るらしい。此天壇はどういふものであるかといふと、支那は非常に天を畏ぶ國であつて、何事も吉凶共に天に祈るといふことをやる。或は五穀豊作を祈るとか或は雨を祈るとか、いふやうなことで、此の如きことをやる儀式の場所であつて、其構への周圍が一里斗もあるといふことである。此天壇の廓内は老木が鬱蒼として居つて、一種の遊覽地に適して居る。其構内に齋宮といふものがある。即ち皇帝が天を祈られる時に其處に行つて沐浴齋戒をされるといふ所であらう。又皇乾殿といふ建物がある。右等の建物を經て行くと圓丘といふものがある。環宮は名の示す如くに圓形を成して居つて、全部白色の大理石で疊まれて居る。野天であつて、下から上つて行くこと三段四段位に大理石の段階がある。此處に皇帝が臨御されて、或は豊年を祈らるゝとか、雨を祈らるゝとかされるのである。其圓丘の周圍には篝火を焚くものが置いてあつて、其處で篝火を焚いて夜祭をされるのであらう。此祈禱は今日でも矢張り行はれて居るので、丁度自分が山海關に着いた折に其話を聞いたのであるが、山海關に着いたのは六月の八日頃と記憶して居るが、其時に清國が早魃で雨が降

らぬといふやうなことで詔勅が出て、皇帝が此天壇に雨を祈られたといふことがある。其後七月七八日頃であつたが、上海で聞く所に據ると此祈が効果を奏して、さうして非常に雨が降つたといふので、今度は天徳を謝する爲めに又特に此天壇に勅使を立てられて御祈禱があつた。して見ると今日でも天壇は盛に利用されて居るらしいので、兎に角規模の宏大にして、殊に右に御話したやうに白色大理石で以て悉く疊んであるといふやうな所は、ちよつと他に類の無い見物を値打する處であるらしい。

尙ほ園丘の北方に祈年殿といふものがある。是も相當に立派な建物であつて、此處では其名の現はす如くに矢張り疊作等を祈られる所であるらしい。此祈年殿の内部に透入つて見ると、非常に大きな殆ど堂一杯の佛像がある。其高さが何間位あるものか分らぬが、兎に角六七間以上もある奈良の大佛といふやうなものが置いてある。此佛像は一本の木をさういふ風に彫刻したのだとかいふことで、案内する人が其功能話をして居つた。是も兎に角木製の佛像として殆ど比類の無いやうなものであつて一見するに價值があることであらうと思ふ。

白雲觀

北京の城廓内で見物すべき處は尙はあるであらうが、普通人の行くやうな處はさういふのであつて、其大體を御話したが、尙是等のことは北京あたりで賣つて居るガイドブック見たやうなもの、即ち北京概観などといふ小冊子にも一寸したことが書いてあるから、旅行者は是を購求して見ればさつとしたことが分るであらうと思ふ。

廓外に特に珍しいものは白雲觀といふもので、是も一見を値打する所である。此白雲觀は北京の西方に在るので、我公使館あたりから白雲觀に行くのには瑠理廠といふ處を通つて行くので、此町が矢張り日本人などに能く膾炙して居る場所である。此處には骨董品或は古本を鬻ぐ店が軒を列ねて居つて、北京に到る人は必ず此邊の骨董店或は古本鋪等を漁るので有名になつて居る。此處を通つて西使門を出て暫く行くと、道路が極めて悪しく到底馬車で行く譯に行かぬので、約十數丁といふものは徒歩して行かなければならぬ。此白雲觀は所謂道教の本山であつて、其建造物は昔元朝の大極宮といふものゝ跡であるといふとである。支那では此道教の本山が二つあつて一つが即ち此白雲觀、之を道教の方で全真派と稱へて居る、一

つは江西省に在つて龍虎山と稱へて居つて之を正一派といふのである。元來道教なるものは老子の教が根本になつて居るといふのであるが、老子在世の時分又は其歿後暫くは所謂道教なるものは無かつたのである。老子歿後五百年頃に老子の教に佛教を加味して一種の道教といふを興した此時代に所謂方士といふものが起つて——即ち道教の坊主である——是が仙人又は奇術等のことを類に説いたものである。歴史に依ると支那のえらい人が随分之を信仰して居つたので、例へば秦の始皇帝、漢の武帝、宋の太宗の如きは道教の熱心なる信仰者であつたといふことである。即ち秦の始皇が不老不死の薬を求むるため我日本へ使を出したといふことも御互共の耳に残つて居る。元の太祖の如きも矢張り此道教を始終信仰をされて居つて、傳ふる所に據ると、太祖が尙ほ足を清國に容れない時分、即ち蒙古の方に居つた時に特に道教の有名な坊主で長春真人といふ者を蒙古に召して國を治むる道人世に處するの道及び安心立命の道等を聽いて大に會得したといふ話であつた。此時に長春真人といふ者は何處かの山に隠れて居つたのが、十八人の弟子を率いて蒙古に行き、常に元の太祖の參謀になつて居つたといふ話が歴史に遺つ

て居る。元の太祖が此の如きことをやつたのは眞に道教といふものを信じて居つたか否やといふことは疑問で、先きに清朝が喇嘛教を政治に利用するといふ御話をしたが、それと同じことで、道教を利用して清國を統一するの方略であつたかも知れない。兎に角元の太祖といふ人は廣く各地方より各種の知識を有つて居る者を自分の幕下に纏めて、是等の知識を辿つて清國を統一し、進んでは歐羅巴までも兵隊を向けたといふえらい人であるから、右の如きことを政略上やつたのである。といふことは強ち嘘でないかも知れぬ。兎に角道教は神仙の術を説くことが教義の一番根本になつて居るらしい。此長春真人といふ者は元の太祖に右の如く非常に信用されて居つたから、太祖が支那に來て都を燕即ち今の北京に置いた時に長春真人の爲めに白雲觀といふものが造られたのである。即ち白雲觀の祖師といふものは此長春真人になつて居る。此白雲觀は矢張り堂々たる立派な建物で、其構内には各種の殿堂が澤山立つて居る。即ち靈官殿、老律堂、丘祖殿、四御殿、三清閣、長春殿など——いふ無数の殿堂が建つて居る。

此白雲觀の坊主が非常に日本人に好意を表して居つて、緩々見物に出懸くると

精選料理などを振舞ひ、なかく優待をするといふやうな話も聞いて居つた併し此日の晩に公使館へ振貝子殿下が来られるので、七時から自分等も案内を受けて居つたから、白雲親の見物は僅かに二十分間はかりであつて、さういふ優遇に接する時がなかつたか、坊主が出て来て連りに愛嬌を振舞いて居つた、其坊主達の風采を見ると、丁度日本の掛物などに能く描いてある寒山拾得といふのがあつた、あの様な風で、頭に二つ程角が生へて居るやうで結髪をして僧服を纏つて居る、僧服の色相などは一定して居らぬものと見へ鼠色のやうなものを着て居るもあり、青味掛つたものを着て居るものもあつたが、兎角に餘程古風なものであつて、一見一種の趣味を感ずる、此白雲親の後方に花園があつて、各種の草花を培養して居つて立派であるといふことだ、是も行って見ぬかといふ話であつたが、自分はそれを見る時間になかつた、丁度日露戦役以前は露西亞の公使のボコチロフなどといふ人が殿堂の一間を借りて別荘の如く住つて居つたので、露國人は總して大に優遇をされて居たといふことである、此露西亞の先生が白雲親に居つたといふことは、所謂別荘に安逸を貪る爲めではなく、此白雲親の坊主が北京の朝廷には非常なる信任を

萬壽山、  
玉泉山、

受けて居つて、常に宮廷に出入するので露西亞の方では此坊主を懐柔して、政略上に使ふたといふ話である、其後白雲親の坊主も日本の勢力範囲にはいつて我邦方よりも何角と便益を興へてやつたので、今日は日本人を非常に歓迎して、少し著名な人が行けば前に言つたやうな精選料理を饗して懇話に時を移して歸すといふやうな風になつて居るといふことである、

要するに北京で喇嘛教を観察すると同時に、又此道教を観察すると餘程面白い土産になるであらうと思ふので、一般の遊覽者等に必ず此處は行つて見物されたいことを勧誘して置きたい、

次に有名な萬壽山、玉泉山に行つた御話をするが、萬壽山は近頃無住であるが、尙ほ之を自由に見物することは出来ない、一箇月に僅か一度と記憶して居るが、特別に許される日があるので、其外は見物を許されないといふことであつて、自分等も萬壽山の内部を滞在中に見物する機会を得なかつたのである、此萬壽山に行く道は丁度北京の西方西直門といふのがあつたのであるが、是から殆ど一直線であつて、非常な立派な道が出来て居る、御承知の通り萬壽山は頤和園と稱して所謂西太後の離



宮であつて、西太后御存命の時分には清國の施政悉く此願和園から出た譯で、西太后が常に北京と往復される爲めに造つた道であるからして、清國に於ては稀に見る立派な道路である。其道路の兩側には柳が植つて居つて餘程西洋風に出来て居る。此萬壽山は北京を距る約四里位で、自分の行つて見たのが六月の二十一日であつたと思ふ。案内をする人が自動車借りて呉れたので——北京も御承知の通り以前は非常に陋隘な町であつたさうであるが、今日では外形上は丁度タイムスのチロルが来て驚いた如く文明的になりつゝある。道路なども自動車走せて差支ないものが随分出來た。北京に自動車を貸す所があつて、其所に儘が二三臺位は車があるやうに見受けた——其自動車で坦々砥の如き大路を快走するので仲々に快心のことであつた。此萬壽山離宮の様子は小高き丘の上に四層斗の樓閣を成して立つて居るので、内部の構造其他は詳細に見ることは出来ぬとしても外形だけは兎に角能く見えるのである。内部に這入つて見ても近世の建物であるから例によつて壯大とは評さるべきも別に眼を驚かすやうな處もないといふ話である。

萬壽山を繞つて之に隣接して居る玉泉山といふ方に行つた。此萬壽山から玉泉山に行く路は、逆も自動車などが通る道でない。腕車が幸ふじて通る。石が敷いてある部分は非常な凹凸を極め、石の敷いてない處は砂塵が五六寸も積つて居るといふやうな譯で頗る悪い道で、雨天等の際には殆ど通ることの出来ないうやうな道である。斯の如き道路を約半里斗行くと所謂玉泉山である。此玉泉山は一名靜明園と稱へて居つて、此丘上には玉峯塔影と稱へる七層ばかりの塔が建つて居る。是は數里の外からも能く見ることが出来る。此處が昔約七八百年前金の時代に行宮であつたといふ話である。今日玉泉山の名高いといふのは所謂玉泉が山の麓に涌出るといふことから、建物としては龍王の廟がある位なものであるが、併ながら比較的樹木もあり、風景に富んで居る。又山嶺からの眺望が非常に廣濶で、北京の街を鑿鑿の間に見ることが出来る。又附近の水田の模様、近くは萬壽山を眼下に見下し、所謂萬壽山の昆明湖などが手に取る如く見えるので、先づ萬壽山も中に這入つて見なくても、玉泉山から瞰下すれば略々どういふ所であるといふと分るのである。所謂玉泉の落つる處は極く淺い小さな池をなして居つて、其池の岸上に今

申した龍王廟がある、龍王廟の下突元せる岩の中から冷泉が湧いて出て居る支那は御承知の通りに非常に水が悪いのであるが、種々なる試験の結果、此處の水が一番良い所の水としてあるらしいので、一説には此水は普通の水でなくして、鑛泉の種類であるといふことである、萬壽山の昆明湖の如きも矢張り此玉泉山から出る水等が運入つて出来て居る湖であるといふやうな話も聞いて居る、龍王廟も極く小さい唯一棟の建物で、而も今日は大分頹廢して居る、併ながら炎天に汗を流して登山した際などに此處で行厨でも開いて少飲するには屈強の場所である、其處に同治帝の「永澤皇殿」といふ額が懸つて居る、其處には乾隆帝の「玉泉翊爽」といふ碑が建つて居る、其の又下の玉泉の湧く岩に「天下第一泉」といふ字が是も同じく乾隆帝の筆で刻してある、此玉泉を搦へたる池には小さいボートが浮めてあつて、舟守に多少の酒手を呉れてやれば其ボートに棹して池水に優遊することが出来るやうになつて居る、此池は前申した通り非常に淺くて極く深い處でも四五尺位しかないやうである、池底に生茂れる藻草は殆ど透明に見えて、魚類の如きは少しも棲まな、唯田螺みたやうな種類の貝が岩にボツ／＼とくつ附いて居るといふ位であつて、其

農事試験所

處等の點から見ても是は普通の水でなくして鑛泉の種類であるといふのが本當らしい、兎に角玉泉山は支那北部の荒寥なる景色に慣れて来た眼には如何にも清涼に感ぜらるゝといふことは争はれぬ、  
 此外に北京の郊外で見ると、是は先づ植物園一名農事試験所位のものである、此農事試験所には日本の大木某といふ技師が傭はれて居つて、其人が主として植物の世話をして居る、創設以來未だ二三年を経過したのみであつて、盆栽類とか、草花類とか果樹とか、多少造つてあるといふだけで、別段に植物園などとして見るべきものでもない、併ながら其規模は随分大きなものであつて、中に立派な喫茶店等もあつて、此處に杖を曳いて北京の黃塵萬丈の苦みを一洗するには屈強の所のやうに見受けらるゝ、植物其他の事に付て大木といふ技師から段々話を聞いて見たが、別段に支那には日本で珍しいといふやうな種類のものは餘り無いといふ話であつた。

右のやうな處が普通北京城内又は北京の近郊に於て觀覽をする場所の極く大體のことであるが、尙ほ少し離れて北京に行つたものが、是非一見を値打する所は

前にも僅か御話をしたと思ふが、湯山の温泉、八達嶺の萬里の長城、明の十三陵、此三箇所である。自分も幸に是等の場所をも見物するの餘暇を得て行つて見たから、其御話を少しくして見たいと思ふ。

此方面に向つて遊覽を試みるには先づ最初八達嶺に登り、明の十三陵を訪ひ、湯山に浴し、北京に歸るといふことが順序であるらしいので、以前に御話した如くに八達嶺は兎に角北京、張家口線といふ鐵道が通つて居る處であつて、此處に行くのには鐵道を利用し得ることが出来る。自分が行つたのが丁度六月の十六日だと思ふ。其日に西直門外の北京、張家口線の停車場から南口といふ處まで汽車に乗つた。此汽車のことは前に鐵道の事を御話する際申した如く支那の資本で、支那の技師で總て外人外資を俟たずしてやつたといふ鐵道である。此西直門停車場から南口までが大體三十哩位と記憶して居る。午前十時に正直門を出ると、十一時半には南口驛に到着する。此南口驛からして所謂南口街までは尙ほ一里ばかりあるが、別に道路らしきものはなく、申せば廣漠たる河原を行くので徒歩するか、或は驢馬に乗るかでなければ行けない。此驛の附近にも宿屋はあるが、八達嶺に行くには本驛に

八達嶺

泊つて居ることが便利であるので、此處に澤山の驢馬が用意されて居つて、其驢馬に乗つて南口の本驛に着くと井兒店といふ支那宿がある。此宿は極く粗末なものであるが、八達嶺、萬里の長城あたりを見物する旅客が常に泊るので、案外に清潔であつて、支那風の家であるが、ベッド位が備へ附けてある部屋もある。此處で晝飯をしたためて、一時半頃から例の驢馬で八達嶺に向つて登つて行つた。此處を南口といふは八達嶺の北門の鎖鑰に對してある。

南口から登り始めて一番最初見物すべき處は居庸關といふ所である。此居庸關は南口から支那の里數(六町一里)で十五里と云ふ。是は丁度大體の處南口と北門鎖鑰の中間に在つて、往昔は此處が極く必要なる砦であつて、萬里の長城を超えて來る胡軍も此處に至つては喰止められて内部に進むことが出来なかつたといふやうな非常な要害な處であつたらしい。此處には種々城壁であるとか、或は狼煙臺といふ狼煙を揚げる臺であるとか、澤山ある。所謂三里に一墩、五里に一堡といふ譯で、三里毎に一つの狼煙臺が置いてあり、五里毎に十人ばかりの兵隊が屯る場所が置いてあるのであるが、斯ういふものが澤山其附近にあるのも今日では唯廢頽に

委せらるゝの状況である。

此居庸關の殘趾は隧道みたやうな風になつて居つて、此隧道の中に種々な彫刻がある、色々な佛像が彫刻せられ、或は蒙古、西藏、其他支那文字で種々なる經文が彫刻してあるのである、是が自分等の見た美術的製作品としては非常に珍しいものであつて、其彫刻などが如何にも良く出来て居る、其文字などは讀めぬが、餘程面白い文字が澤山書いてある、傳ふる所に據ると、千三百二十六年位前に是が出来たのであらうといふことで、考古學者などは垂涎して見て行く處らしい。

此居庸關を経て支那里數で約三里登ると彈琴峽といふ處がある、此處は今日ではそれ程でないが、名が詩的であつて、昔は此附近を滌流が流れて居つて、其川の潺湲たる音が彈琴のやうであるといふ所から此名を附けたのかも知れぬ、見上ぐる如き岩壁の上には佛舎などが出来て居つて一寸風景に富んで居る所である、固有の名は五階洞と云つて其上の方は隧道があつて張家口行の汽車が通つて居る、佛閣の兀立して居る岩壁に彈琴峽とか、其他詩的の文字が彫刻してある。

彈琴峽より支那の里數七里を登ると北門の鎖鑰即ち萬里の長城の一部に出て

來るので、此處に着いたのが午後の五時頃であつたと記憶して居る、此北門の鎖鑰は蒙古に對せる萬里の長城の門であるか、其門に北門鎖鑰と題してある、此門を一度出て前方を眺望するに平野千里で、内蒙古の部落平原が眼の及ぶ限り續いて居るのである、此處よりずつと先きに外廓をなせる長城があるが、其距離は何百里といふて餘程遠い、此外廓をなせる長城は八達嶺附近を走せて居る、長城の如く完全なものでなくて極く簡單なものであるらしい、北門鎖鑰の一角から直ぐ萬里の長城に登ることが出来る、此處では長城が東方に廻々として谷に下り、峯に攀ぢて馬鬣の如く續いて居る状況が見える、併し西方は能く見ることが出来ないが、長城に依つて西方約半里を登つて行くと、西方に長城の脈々として居る状況が手に取るやうに見えるのであつて、此方が寧ろ景色は壯大である、併ながら其處に行くには煉瓦で敷いてある壁上を登るのであるから靴穿では餘程困難で、自分等の一行中途中まで行つて絶頂とおぼしき處まで登ることが出来なかつた人もあつたやうに記憶して居る。

此八達嶺の絶頂に登つて内蒙古の平野南口、北京の方面を見渡す、此展望の良

ことは言葉又は筆紙に迎も盡すことは出来ぬので、如何にも素の始皇あたりの雄大なこと、又支那の廣大無邊であることの無限の威が直覺的に起るのである。

此萬里の長城は八達嶺附近では大體の所が高さが約三丈ばかりであつて、幅が一丈三尺位なもので、是が長さが一尺三四寸、幅が六七寸、厚さが四五寸位ある大きな煉瓦で全部積み上げられて居つて、さうして中央は砲車でも牽くことの出来るやうな風になつて居つて、今日で云へば銃彈、昔で云へば弓を射るやうな場所が出来て居る。又約四五丁毎には簡略なる城塞様のものが續いて出来て先づ大體斯様な構造に出来て居る。假りに今日此長城を一問造るとせば五百圓掛るといふ話をして居つた人がある、さうすると全部を造る工費といふものは殆ど算盤に置けない位で、此點から推測つて見ても、長城の規模宏大であるといふことが想像される。

低徊久ふして六時頃より降山し始めた例により、驢背を借ることであつたが北海道以來馬に乗らなから、だから臀部の痛むこと甚しく我慢して乗つて行くと、兩三度より墜さるゝといふ次第儘よ書生時代に練いたる膝栗毛に依ることゝし八時

頃より徒歩を始めた尤も驢馬でこつ／＼行くよりは多少速い併し道路といふ道路ではなし、暗さは暗し石ごろに踏き清水のじた／＼流れに踏込み杜につき當り歸り路急ぐ黒豕の群に突つかゝり無二無三に山路を降りた同行者の蹄の音は遙かに聞えやがて聞えずなる同行者の一人菅谷氏が驢馬が上手で常に同列を抜いて一同其影を見失ひ心配をして探して歩行くのであとで同氏に忠言をしたことあれば自分がすん／＼先きに行き同行に心配を懸くれば菅谷氏の二の舞であへこべに注意を受けるから蹄の音が聞えなくなると少し立留つて遙かに聞ゆる頃又あるきだした自分に漸く續かれたるが町野氏ですらりとした白の洋服を着しヘルメットを戴き驢馬にてこつ／＼關中をたどられた姿を往來の支那人が西洋婦人と見間違へたことなどは唯一の奇談であつた斯くてとう／＼山の麓まで來ると旅舎の主人が氣をさかして小僧に淺草觀音で見るやうな高さ三尺もありそゝうな大提燈を持たして迎へによこした井兒店に無事歸着したのが夜の九時四十五分であつた一行も續いて歸着晚餐をしたゝめ快談に時を移して夜半安眠した十七日の朝明の十三陵に向ふ豫定であつた例により驢馬で行くのである、しかる

に自分は驢馬には懲りくした上三里半の山路を無二無三に跳廻つた故逆も驢馬に乗る勇氣がない愈々降参して轎をとることにした轎といへば贅澤の様であるが全部木製の椅子に竹の棒を二本通して擔ぐのである八時半頃南口を出發して例の畝道をたどつて十一時半頃に十三陵の内の長陵の門前に着いた此距離が支那里數にして約二十五里である是から十三陵の模様を大略御話しよう。

明の十三陵は北京の北方約十七八里の天壽山といふ山の山腹にあるので山は餘り高くはないが脈々として左右に羽翼を張つて居る十三陵は長陵即ち明の第三世永樂帝の陵を中心として向つて左には獻陵(四世仁宗裕陵)六世英宗茂陵(八世憲宗)泰陵(九世孝宗)康陵(十世武宗)廣陵(十四世光宗)がある右には景陵(五世宣宗)照陵(七世穆宗)永陵(十一世世宗)定陵(十二世肅宗)德陵(十五世熹宗)思陵(十六世莊烈王)がある何れも數丁の距離を保つて赤壁黃瓦が嚴然として居るしかし一望し得らるゝは此中約九陵であつて他は山懷に蔭れて居る其構造等は大同小異であつて是を巡見する必要もなく其粹なる長陵を見物せば足るのである御承知の通明の一世二世の陵は南京にあるので三世永樂帝が始めて都を燕京即ち今の北京に移さ

## 明の十三陵

れたのである永樂帝は初め燕王に對せられて居つたことゝ其雄略常に北邊の鎮撫に苦心された結果茲に遷都したのであらう此長陵は恐らく支那に現存する最も雄大な建造物であらうと思ふ支那に遊んで支那らしい感想を起すのは此長陵と長城及揚子江である長陵は西曆千四百三十五年即ち約四百七十年前の築造であつて工事に三年半の日子を要したらしい清朝となつても陵はおろそかにせず司香大監を設け其修繕祭祀等を司らしめ是れに守陵人戸を隷屬せしめたやうである清朝の明主たる乾隆帝の時代には大修繕をしたといふこともある陵の正門から寶城即ち土饅頭のある所までは約一里餘もあるであらう北京から昌平州を経て長陵に到るには此正門よりするが順路である自分は南口より歸り道のこと故突っかけ陵の内門に出て來た此内門を入ると數箇の殿堂があるが其内正面の拜殿とでもいふべきは所謂陵恩殿である其結構の偉大莊麗なる驚いたものだ先づ十數階の大理石の階段がある其階段の中央に龍を刻した一枚の大理石がある參拜の帝王は其上に歩を運ばるのである殿内は凡二抱半もある太さで長さ約十間許もある木の圓柱約五六十本位で支へられて居る其柱の受けが八尺四方位

な一枚の大理石で天井は申すまでもない高麗張である其格子の内の唐草模様丹碧の色合等流石は明の盛代の作であつて奉天あたりの東陵北陵等はとも比較にならぬ唯光緒以來清朝の國帑多端のためにや修繕行届かず所々剝落し屋根瓦の如き數間も墜落せんとするなど又大理石で疊みたる階段の相間に雜草漫蕪丈餘をなして居るなど轉感懐を深うせしめるのである稜思殿の後部寶城の前は數間の爪先上りの隧道になつて居つて其先きが左右の上り段になつて丁度隧道の上部に當る所に樓閣があつて成祖文皇帝之陵と刻せる一大石碑がある支那の風と見えて斯の種の碑は常に大龜の上に安置してある其由來は知らぬが仲々莊嚴なものだ此樓閣から左右に背後の土饅頭を圍りて人道がある土饅頭といふも随分大なもので其上には雜木が鬱生して居る唯偉大といふより外に贅辭がないのである長陵内門を出て約一二町許に長さ五六間の大理石の橋がある此附近の通路は何れも巨大の大理石様のもので敷き詰めてある尤も現今は荒れるに任せて居るが昔日の壯觀が想像さるゝ暫く行くと所謂石人石獸が十數丁に亘り立つて居る石人は總計十二で四勳臣四文臣四武臣の石像で其彫刻等も先づ巧みに出來

て居る石獸は合計二十四で馬四つ麒麟四つ象四つ養院四つ獬豸四つ獅子四つで各一對は立ち一對は伏して居る何れも巨大で高さ約一丈もあるべく臺石とも一枚の大理石(蠟石の類か)で彫刻も頗る巧みに出來て居るには一態を喫した此附近は數十萬株の松柏鬱蒼として所謂石人石獸は其下に眠つて居つたといふ話であるが今は煉瓦にて疊みたる道路も荒れ果て樹木としては一株もなく附近は悉く麥畑と變じて居る石人石獸を通り脱けると樞星門がある尙十數町行くと碑亭があつて仁宗の建てられたる大明長陵神功聖德碑が例の礎の上に建てられて居る其裏面に乾隆帝の哀明陵三十韻がある其文句は記憶せぬが餘程面白きものに感じた附近に交龍を浮き彫にした數丈の石柱が二箇あつたやうだ是も一本の大理石らしい瑞西のベルン府などで同趣向の石柱があつたと記憶して居る又倫敦や巴里などで埃及あたりから分捕した石柱があるが先づあれだ尙十數町行くと大紅門がある大理石の一大門で希臘羅馬あたりの古跡にも斯の如きものは見なかつた尙十數町大理石橋がある此邊がつまり昔の長陵の入口であらう何しろ鴻大なもので逆も筆や口には載せられぬ又見物當時より大分時日が立つので精しくは記

憶して居らぬ。

## 湯山温泉

長陵の見物を早々に畢り湯山に向つて急いだ十三陵から約三里餘の昌平州に着いたのが午後の一時半頃であるとある支那宿で晝食をした。めそこくに出發した昌平州から湯山までは約五里で遙か手前から平地に兀突せる大湯山小湯山が見える此山麓に二百許りの人戸がある是を湯山と稱する様である丁度大湯山の麓にまで来た時大砂風に出逢ふたしかも此附近は珍しく水田続きであるが荒れに荒れたる一陣の猛風は十數里の外より砂塵を飛ばし數分の内に洋服は忽ち砂をあびた様になつて同行者の顔を見ると何れも下女の厚化粧の如き體たらくであつた北京の所謂風もこれで經驗して話の種を得た譯だ七時頃目的地に着し宿はと見れば關帝廟である此附近の民家は何れも茅屋で廟の外は到底宿泊する場所はない湯山は其名の示す通温泉の湧く地であつて清の雍正帝が此地に行宮を置き浴場を設けられた今は行宮も荒れ果て、外國人は其温泉に入浴することを默許されてあるとかで北京公使館では此地に遊ぶ常連があるものと見え關帝廟の一室を借り切つて居るので自分等も其處に宿泊することが出来たのである此

處に着いた頃は八達嶺際栗毛の疲れが出たこと、奉天以來の齒痛とて身體のゆるみを覚え暫く休憩の上温泉場に行つて見たが何分闇夜のことであるし様子が分らない化物屋敷見た様な所へ案内さるゝ儘行つて約四坪許の温泉壺に入り疲れを醫し道傍にごろ寝せる支那人にすんでの事眺くなどのことあつて歸宿晚餐を認めて其夜は寝に就き翌朝早く起きて温泉場の實況を見るべく出懸けた行宮は關帝廟の直ぐ向ひ一二町の處で廟前などにも温泉は沸々湧き出るので支那人は路傍の土を掘り所々に小屋をかけて入湯して居る丸でやたい店の様である行宮の地域は數萬坪もあるであらう湯壺に行つて見ると先づ大湯壺が二つあつて一は周圍百六十四尺の長方八角形で深さ三十尺あるといふ盡く白色大理石で疊んである勿論野天であるが立派なものだ其温度は丁度沐浴に適して居る中に入りて游泳を試み深さを驗するに數十年放擲せることゝて泥が一尺餘も沈澱して居るが立つて手を延ばせば水面に達するのである他の一方も略同型であつて温度極めて高く沸々湧き居りて迎ても入浴には適せぬ様である此等湯を延いて兩方に小湯槽が設けてある前夜入浴したのは其一つであつたのだ行宮の建設物は



全く荒廢して居るが随分立派であつたらしく深雪心神と扁額せる一大殿宇は稍外形を存して居る其他後面の庭園泉池堂亭等昔日莊麗の面影を僅かに存して居る構内を一周して感に堪えなかつた庭園等も段々麥畑に變するらしい惜しいものである園内に珍らしき松がある是は玉泉山等にもあるが幹枝の肌が猿滑りに似て緑地に白の斑のある様なもので葉は内地の松と少しも違はぬ行宮の有様は先づこんなものださて關帝廟には四五の客室があるやうで極下等な西洋人も一人居つたやうだ食事は廟村の者が粗末な支那料理をして呉れる甚だ下卑たことであるが例により便には困つた廟の後の畑で勝手にするといふことで行つて見ると幾組も見える斯うなると仲々衆人環視の中では出来ぬものだ幾度か地を相し其目的を達したが此時野糞十種が出来たこれを皆吹聴するは恐入るが其内の二三を擧ぐれば

蝶追ふて廟を出づれば野糞哉

地を相し石に上れば蜥虫かな

糞十種廟に題して日永哉

こんなものである午前八時半湯山を發し砂河站停車場に出で北京宿舍に歸着したるは其日の午後三時頃であつた。

八達嶺十三陵及湯山行は正金の町野氏が案内の勞を取られた氏は七八回も同地に旅行されたとのことで八達嶺通である又支那語に通じ寫眞なども心得られ非常の便宜を得たことは同氏は勿論案内を同氏に依頼された實相寺君に感謝せざるを得ない町野君は各所で寫眞をとられたが其寫眞に題した駢句がある其内にこんなものもある。

居庸關 卯の花や胡人の馬蹄輕く飛ぶ

彈琴峽 絶壁や天狹ふして揚雲雀

北門鎖鑰 關一つ蒙古に續く夏野哉

八達嶺上 雲の峯始皇の大を嘆すらく

井兒店 麥の秋馬より落ちて轎の客

石人石獸 畑打は明の民とぞ申しけり

湯山温泉 行宮は畝一畝と麥畑

沙河車站 夏瘦の京師の人も交りけり

後に御話するが長江南京邊でも駄句があつた歸京の當時一二の新聞に出たものもあつたやうだ或日鳴雪翁に遇ふた其評が面白い新聞では名吟がある様に評して居るが是は昔日の明庵自分の俳名君を知らず役人の句として賞めて居るのであらうといふことであつた是は當らずと雖も遠からざる批評であるとおもふ阿々。

二十一日會

北京の雜話を畢るに當り尙ほ一言したきは二十一日會のことである此會は聞く所によると毎月二十一日に開くので此名をつけたらしい在留の日本紳士の氣焔會とでもいふべきもので公使を始め文武官學者新聞記者等の寄合である六月には開かぬ豫定であつたが自分の北京滯留中當番幹事下瀬醫學士本堂少佐などが特に此會を催された自分も喜んで出席して見た場所は憶か林屋ホテルの奥座敷で西洋式で日本料理の晚餐會であつた此日集會された方々は三十名餘であつたやうに記憶して居る公使は差支へて出席されなかつたが阿部、小田、松岡等の公使館書記官を始め巖谷博士、杉學士、龜井時事、豊島大阪毎日等何れも歴々の人達で

來客としては自分等一行村田博士後藤教習等であつた酒闌にして下瀬幹事は此會の憲法として來賓の演説を乞ふとのことで自分は先づ立つて清國と本邦との關係につき樂觀論をやつた所が龜井時事の反駁論あり議論に花が咲き仲々盛であつた其言論頗る無遠慮で罵言もある御維新頃の書生の討論會は斯くやあらんと想像された併し頗る無邪氣で一種の趣味のある會である聞く所によると言論の末つかみ合位は朝飯前のことであるとのことであつた北京の如き何等娛樂機關のなき場所では斯の種の會合は仲々面白く感ぜらる滿韓に在留する本邦人が亂暴な遊興をするが是も土地相應のことで一面からいへば此種の元氣も必要であつて強て答むるに足らぬので二十一日會の如きも此土地自然の産物である云はねばならぬ兎に角他には見られぬ一種の集會である夜の十一時頃まで諸名士の演説討論等絶えず何時盡くることが分らぬ自分は大概の時分に辭し去つた去るに臨み記念の爲備付の帳面に何でも駄句を二三句書きつけた今は記憶して居らぬ自分は來會諸君の好意を感謝すると共に此特殊の會あるを讀者に紹介せざるを得ない。

北京のことは大底此位にして置くことにしよう二十二日の朝九時半京漢鐵道にて北京を出たが途中は廣漠たる平野の外何も見る物もない黄河の鐵橋に差懸つたのが夜半十二時四十五分位で闇夜ではあつたが欄干に電燈が煌々として照つて居るので河流または橋の工合などは能く見ることが出来るので其長さが三「キロメートル」即ち約三十町餘で工費に八百萬弗を要したものであるとのことだ是は是非見物せなければならぬもので一寸紹介して置く河南湖北の境に近き信陽の關隘までは例の平野一望で風物に何等の趣味もないが此關附近よりは地勢が流急に山通り草木も稍鬱蒼として居る二十三日の午後三時頃に漢口に着いたのである此漢口附近の雜話を少しく話さうと思ふ。

### 三 漢口雜觀

#### 居留地

漢口と武昌、漢陽の地勢の大體は此談話の冒頭の所に述べて置いた通りで漢口の支那市街は寧ろ漢水に枕して居つて各國居留地が楊子江を控へて居るのである支那市街は仲々繁華であるが道路の狹隘汚穢なる支那の特色を發揮して居る支那街に直接して居るのが英租界で露、佛、獨が順次に相隣接し日本租界が一番下

流にある即ち支那市街を最も離れて居る、各居留地の江岸は所謂バンドで廣濶なる道路で乗客の乗下り貨物の積卸紳士貴女のドライヴに供せられて居る申す迄もなく英租界が最も繁華であつて横濱正金銀行支店、日清汽船會社支社、三井物産支店などは皆此租界に在るのである即ち商業の中心になつて居る、家屋の構造等も相當に立派である露租界は順豐新泰などいふ磚茶の製造所を二三持つて居る、佛租界には領事館、印度支那銀行、旅舍位で餘り振つて居らぬ獨逸租界は着手が新しい丈整頓はして居らぬが活氣は充分見へて居る、日本租界ときては三菱の建物以外は見ると足るものなく、空地だらけで誠に寥々である、帝國領事館も三菱の長屋にあるのである、此向ては租界の經營も尙前途遼遠であるやうに感じた、大倉組の受負て出來て江岸の護岸壁は中々立派である、日本租界に接して漢昌公司の磚寸製造所がある明治三十八年頃の設立で資本金が三十萬圓位といつて居る、職工二千内外を使用し仲々盛に製造して居つて毎年五六萬圓も製造するといふことである、此會社の隆盛に連れて日本製磚寸などは漸次に驅逐されて今日では殆ど隻影を見ないといふ次第、支那人も仲々振つたものである、支那海關千九百八年

漢口の貿易

の報告に依ると同年に漢口に入出した汽船の数が三千六百六十三艘、四百三十四萬九千餘噸で帆船の数が二千六百七十三艘、二十二萬七千四百九十餘噸である、それで揚子江上流約六百哩にある漢口の入船は同年四百五十七萬六千五百餘噸で我横濱に約二百四十五萬噸許少いのである貿易額は支那全體の八億三千五百萬兩の内漢口が約一億二千萬兩で上海の約一億三千七百萬兩に少しく譲る計りで天津の約七千九百五十萬兩には餘程超過して居る、詳細なことは貿易年表に譲るとして輸入品の大部分は勿論綿糸綿布類で銅石油、麥粉、砂糖等が其重なるものだ、輸出品は茶、大豆類、棉花、胡麻、桐油等の如きものである、輸出品の内茶のことは少しく御話をして置きたい、露國は世界中殆ど無比の喫茶國であつて舊來此地には重きを置いて居ることは世間の承知して居ることであらう、千九百八年税關報告に依ると茶の輸出額が七百三十三萬餘兩になつて居る内譯を見るに

オデッサ	五四、一六二兩
ベラルーグ	二六、一六八兩
浦	九七三、一五三兩

ニコライスク

八二六、三四七兩

其他露領

一〇九、〇二二兩

日本

一三二、〇〇兩

天津

一、六三五、二五五兩

上海

三、七〇七、八二八兩

右の内天津上海行とあるものも其大部分は露國に行くものである正金銀行調に依ると昨年の賣買約定高が七四四、三九八、一、四一八は歐洲に輸出されたものであるといふ紅茶の出廻り期間は毎年五月であつて八月には終る此季節には七八隻の汽船が漢口に集り滿船茶を輸送し去るといふ天津に出るもの、大部分は陸路、キヤンタを経て露領に入るものか多い様に記憶して居る紅茶の産地は湖北省の滄山、宜昌、長壽街、藍田、江西省の邵門、寧州、湖南省の新家市、安化、羊樓洞、大沙平、禮寧、桃源等である、紅茶取引商には歐米のもの十八ありドウエルとかモルチヤノフとか云ふ類である、又支那茶行が十許ある謙順安とか永泰源とかの如きである製茶資金は重に上海に仰ひて居るといふ話である即ち

茶行團體は上海の同業者と聯絡を通じ上海に取締を置き此者が毎年必要に應じ製茶人に前貨をなし製茶人は茶を茶行に持込み債務を消すのである茶行は製茶を外商に賣り込み代金を得て上海に回金する故に製茶出廻りの頃より資金は上海に歸ることになつて居る茶の大體の狀況は先づ右の様であると思ふ兎に角漢口の水路は長江漢水を控へ京漢鐵道の終點及將來敷設さるべき川漢粵漢兩鐵道の起點至極有望の場所である長江が氾濫する時は大部分水に浸るのであるが市街の背後を繞れる城壁を毀ち張之洞が堤防を兼ねて立派な道路を造つた爲少しは其害を受くるとか減じた様である併し右様の所であるから頗る不健康地でマラリヤの如きが非常に多く日本人は一度は此病に罹るとか稱して居る是も衛生次第で云ふ程でもないであらふ此地は夏期は随分熱度が高く歴々百度以上に昇ると聞いた自分の着した日より二日計は雨天であつた爲め霽れても滞留中は餘り苦熱を感じなかつた廿四日に大倉の橘君製粉所の池田君など、漢陽に渡り鐵廠を見物した其話を少しまよう漢陽は龜山といふ小丘を圍繞して街を爲して居る鐵廠は其東北方漢水に面して居る此漢陽鐵廠は千八百九十二年即ち明治廿五

## 漢陽鐵廠

年に時の湖廣總督張之洞が盛宣懷の説を納れて官營として創設したもので千八百九十四年に製鐵に着手したが經理宜しきを得ざりし爲官營としては持ちきれず千八百九十七年に官營より民營に移り盛宣懷をして經營せしむることにした其節官府に要する鋼鐵材料は一切同廠より買入れ同廠の製造する鋼軌及各種の材料石炭等は十箇年間免稅し且是迄官の投じたる五百萬兩餘の資本は當分其儘に貸付くることとし將來清國の鐵道会社が同廠より軌條を購入する日より始まり製鐵高一噸に付銀一兩の割合を以て償還することに定め尙ほ鐵廠の外に大冶鐵礦興國滿鐵江夏馬鞍山炭礦及これに附屬する鐵道汽船工場其他の財産を引き渡した盛は株式百萬兩を募集し不足分は借入金で以て經營し來りたるが昨年此鐵廠と大冶鐵礦局及萍鄉炭礦局とを合併し經營することとなつた是れが鐵廠歴史の概要であるさて當時李維格といふ人が總辦として専ら經營の任に膺つて居る清癯にして一見事務家らしい人である工場は仲々廣大で相當に整備して居る様に見受けた最初は白耳義の技師が大分入込んで居つた様であるが現今は少數の白獨技師とグラスゴードセツフキールド當りの留學歸りの清國人でやつて居

茶行團體は上海の同業者と聯絡を通じ上海に取締を置き此者が毎年必要に應じ製茶人に前貨をなし製茶人は茶を茶行に持込み債務を消すのである茶行は製茶を外商に賣り込み代金を得て上海に回金する故に製茶出廻りの頃より資金は上海に歸ることになつて居る茶の大體の狀況は先づ右の様であると思ふ兎に角漢口の水路は長江漢水を控へ京漢鐵道の終點及將來敷設さるべき川漢粵漢兩鐵道の起點至極有望の場所である長江が氾濫する時は大部分水に浸るのであるが市街の背後を繞れる城壁を毀ち張之洞が堤防を兼ねて立派な道路を造つた爲少しは其害を受くるとか減じた様である併し右様の所であるから頗る不健康地でマラリヤの如きが非常に多く日本人は一度は此病に罹るとか稱して居る是も衛生次第で云ふ程でもないであらふ此地は夏期は随分熱度が高く屢々百度以上に昇ると聞いた自分の着した日より二日計は雨天であつた爲め霽れても滯留中は餘り苦熱を感じなかつた廿四日に大倉の橋君製粉所の池田君など、漢陽に渡り鐵廠を見物した其話を少しまよう漢陽は龜山といふ小丘を圍繞して街を爲して居る鐵廠は其東北方漢水に面して居る此漢陽鐵廠は千八百九十二年即ち明治廿五

## 漢陽鐵廠

年に時の湖廣總督張之洞が盛宣懷の説を納れて官營として創設したもので千八百九十四年に製鐵に着手したが經理宜しきを得ざりし爲官營としては持ちきれず千八百九十七年に官營より民營に移り盛宣懷をして經營せしむることにした其節官府に要する鋼鐵材料は一切同廠より買入れ同廠の製造する鋼軌及各種の材料石炭等は十箇年間免稅し且是迄官の投じたる五百萬兩餘の資本は當分其儘に貸付くることとし將來清國の鐵道会社が同廠より軌條を購入する日より始まり製鐵高一噸に付銀一兩の割合を以て償還することに定め尙ほ鐵廠の外に大冶鐵礦、興國滿俺鐵礦、江夏馬鞍山炭礦、及これに附屬する鐵道、汽船、工場其他の財産を引き渡した盛は株式百萬兩を募集し不足分は借入金で以て經營し來りたるが昨年此鐵廠と大冶鐵礦局及萍鄉炭礦局とを合併し經營することとなつた是れが鐵廠歴史の大要であるさて當時李維格といふ人が總辦として専ら經營の任に膺つて居る清癯にして一見事務家らしい人である工場は仲々廣大で相當に整備して居る様に見受けた最初は白耳義の技師が大分入込んで居つた様であるが現今は少數の白獨技師とグラスゴー、セツフキール、ド當りの留學歸りの清國人でやつて居

る英國には現に尙數名の留學生を出して居る様である事業の現況は先も餘り話すことを好まぬやうであつた此鐵廠で使ふ鐵鑛は八十哩餘下流の大冶鐵山のものであるが張が何故に大冶の鐵廠を起さずわざ／＼漢陽に持つて來たかといふと當時張も此説を承知して居つたか清國人は由來工業に關する智識が乏しいので直接間接に工業心を吹き込みため繁華の都會に持つて來たと云ふことである是は一理あることだ

漢陽には其他見るべきものは無い晴川閣といふ樓が武昌の黃鶴樓に對して聳へて居る晴川歷々漢陽樹とは此事であらう漢陽の西方長江に沿ふた州が所謂鵝州で今日は長江を下る材木の置場で盛に堆積してある又其附近は筏で一杯である併し芳草萋々鵝鵲州の風景は今日でも残つて居るのである沒風流な鐵廠の裏は此詩的の風景でゴントラストが頗る面白い

廿五日には高橋領事の案内で武昌に陳總督を訪問し市街を見物した武昌は湖廣總督の政廳の在る所で展望すれば清楚たる一市街だ併し内部に入ると例に依つて不潔極るのみならず沼が所々にあつて瘴氣の氣が充ちて居る様である長江

武昌

に沿ふては張之洞の遺物たる織布局とか紡紗局とか官糸局とか製麻局とか各種の工場があつて僅かに煙を立て、居る有名なる黃鶴樓の舊跡は此地に在る樓は江に臨んだ黃鶴山といふ丘上に在つて屢々火災等に罹つて重建されたが數年の祝融で今は昔日の形も見ることには出來ぬ唯礎と多少の遺物があるのみである併し今日でも風度闊何々樓名を逸すなどがありて就て見れば別段に値もないが遠望は相當に宜しい樓閣の前面に煉瓦の建物などが出來て無風流極つて居るが展望は依然として絶佳て長江を横へ晴川閣鵝鵲州など指呼の間に在つて所謂黃鶴西樓月長江萬里情の風情は儘かにある黃鶴樓に登る道すがら賣卜者が櫛比して居るのは奇觀だ老人も居れば小僧も居る支那の占は如何なる風であるか好奇心に驅られて一番最らしい老人の賣卜者に運星を見てもらつたそれは小さい赤紙の籤を二個引いて賣卜者に渡せば先生は是を開き符牒の如き文字を小さきポールドに寫し取り是れに漢字を充てはめ考案するのである其占が斯うであつた今は財政上不如意であるが七月(清曆)になれば金の出來ることがあるといふ意味であつた前段は儘かに適中した後段は適中しなかつた當るも八卦當らぬも八卦と

はよく云つたものだ運といへば直ぐ金銀上の運のとに取るのも是も支那流だ。武昌に洋風の大建築が四つある甲乙丙丁に區別して居る乙丙は江に近く甲丁は街の後手に在るように記憶する乙は商品陳列館の如きものになつて居る丁には川漢鐵道の事務所がある甲には粵漢鐵道の事務所がある事務所に曲尾技師を訪問したが在留本邦技師等の内半数即ち約十二三名は歸朝さるゝとのと同技師も一兩日中には出發とのとであつた田中技師にも十數年振て面會した兎に角今度の改革で本邦技師の前途は稍心細き感かせられた此地は自分の親友安久津技師が多年居られて種々話も聞いたとのあるので一層強く感を引きつた兎に角斯の如き瘴氣滿々の地で本邦技師諸君が奮勵せらるゝとは同胞として感謝に堪へぬ次第である武昌では勸工場も一覽したが別に御話する程のこともなかつた。漢口附近の雑話は大略此邊でよして同地方のとに關しては統計は少し古いが水野學士著の漢口といふ書物に委しく載つて居るで紹介して置く歸朝後自身をして非常に痛悼せしめたとは高橋領事の訃音である同君は高等商業學校出身で漢口で會見するまでは交際はなかつた人た尤も自分が露國に居つたとき行違に

故高橋總領事

露國公使館詰として來られて其名は聞いて居つた體格もどちかといへば偉大の方で快活で極めて親切の人であつた隨つて同地に於ける評判も頗るよかつた儘か六月廿六日の晩であつた領事館舎で令園同席で一行が饗應に預かつた其他三四日間漢口に滯留中は公私極めて親切に幹旋の勞を取られ一行深く其好意に感謝して居つた其後途中も繪葉書などを取換はし互に交情を温めて居つた然るに老少不定とはいひながら同氏の訃を聞きたるときは夢の如き心地せられた茲に漢口談を御話するに當り同氏を追想して止む能はぬので一言此事に言及して置くのである。

#### 四 大冶鐵山

廿七日の夜九時頃そぼ降る雨を饒して鐵廠の小蒸汽船漢陽號で大冶鐵山へ向け漢口を出發した赤壁の古趾は夜中故見るを得なかつた廿八日の朝六時頃石灰窰といふ所に着いた時に潦雨が沛然として降つて居つた出迎の諸氏に伴はれて農商務省の出張所に案内された茲には西澤技師を始め數名の日本官吏が居る朝飯を認め畢る頃天氣快晴となつた西澤君に就き此鐵山の歴史を聞と斯うであつ



た張之洞が製鐵の必要を認めて鐵礦の發見に腐心して居つたが大冶といふ地名に因て其附近に鐵の原料がなくてはならぬ、昔は干城莫耶の劍なといつて名刀があつたが吳の都即ち今の蘇州に名匠が居つたやうである、何でも此地方をかけて鐵山があるであらうとの考へで獨逸の技師に命じて探見させた、獨逸技師は第一に鐵門礦附近に鐵渣を發見し次で砂帽翹山を發見したらしい、此事が或行懸より獨逸をして大冶鐵山の採掘權を要求する事になつたが種々入込みたる交渉の結果同國より技師及び鐵路機械等を購入する事とて落着し支那政府の手で採掘する事になつたのだ、食後西澤君の案内で鐵山を観るとになつた現今採掘して居る所は獅子山鐵山の兩礦である石灰岩より鐵道がある得道灣といふ場所より支れて獅子山に行くものと鐵山に行くものとの二線になつて居る、總延長が約廿五哩といふ事である、是を大冶鐵道と唱へて千八百九十二年に約六百萬兩の工費で獨逸技師の建設した所で枕木が皆鐵で出来て居る、此等の材料は皆獨逸製のものだ、沿道の兩側には山脈が連亘して居つて西澤君の説明に依て右手の山脈は悉く石灰であるらしい、右手の山脈は殆ど鐵礦で滿庵、石炭、石灰、苦灰も交つて居る、是等は何

れも製鐵に必要なものだとの話である、最初先づ獅子山を見物した山の高さは約四五百尺位で礦石を運搬するため約二百尺許の急阪に二條のケーブル、カトがある、是に取り付いて上るのである、別に苦もないが降りには目の舞ふ様な氣持がせらるゝ、採掘の場所に行つて見ると、全山皆鐵礦でダイナマイトでどん／＼砕いて行く、何の苦もないものだ、其鴻大なとは話に聞いたより遙かに以上である、見物畢りて事務所で辨當を認めたが西澤氏手製の蒟蒻が大に風味が宜く呼物であつた事、務所を預る同知候補張君を初め石灰岩より同道した大冶礦務局の役人の人々、何れも親切に待遇せられた夫より鐵山の見物に出懸けた鐵山の取付が獨逸技師の發見したといふ鐵渣の山である、唐時代には此邊は幾百戸の鍛冶村を爲して盛に製鐵に従事したものであるが、其後星移り物變りて全く廢滅に歸したものである、との事だ、此鐵渣の量は是亦量り知るべからざる程で、唐時代の製鐵の方法は幼稚であつた爲、尙百分の五十内外は鐵を含んで居るといふ、大冶鐵礦は含鐵分百分の六十七内外で瑞典の百分の六十、米國の百分の五十、獨逸の百分の三十四の含鐵に比せば餘程良好のもので、鐵渣でも米國礦と伯仲して居る、鐵渣は其形も面白く年

敷を経るの久しき苦など生ひて風雅のものなり自分も紀念の爲兩三片を携帯し歸つた此鐵渣の上を登る時日光の反射で非常な苦熱を感じた此鐵山も例によつて極めて壯大で鐵の無盡藏の威かせられた何でも大冶の鐵は年に百萬噸づゝ掘つて七百年の生命があるといつて居る是は事實であらう今日では波止場人足を合せ二千六七百人の勞働者を使つて居る又此鐵山の爲八九千人が生活して居るといふ話だ現今採掘して居る高は年によりて相違はあるが三十萬噸内外であるらしい石灰窑と得道灣との中間位に下陸といふ停車場がある此處で三十噸の秤器で出鐵高を量つて居る通常一貨車十二噸内外を積載して十四乃至十六貨車を一列車とし一日八回で千四五百噸を運送して石灰窑に出し江岸に長さ四千四百二十三尺幅百十三尺の波止場があつて茲から船積をして居る吃水廿五尺位の船は常に横付になるらしい重に出て行く先きは漢陽の鐵廠と日本とである是が大冶の梗概である午後四時頃石灰窑西澤君の寓に歸り鄭重なる晚餐の饗應を受け便船を待つて居つた漢口上海通ひの船は石灰窑の上流約三里の黃石港には寄港するが茲には寄らぬ故に此處を通行する際飛乗をするのである飛乗りといへば

樂な様であるが仲々そうではない此處で長江の幅一哩餘もある故に船の通行する頃を見計ひ民船を浮べて置いて船が見へると懸命漕ぎ附けるので仲々心配な骨の折れたものだ此日も午後十二時頃には遅くも汽船が通行する筈であつたが日清汽船會社の大理丸に飛乗つたのか廿九日の午前三時頃であつた西澤君夫婦其他所員諸氏は殆ど微霽自分同行を歓迎された其厚意は今以て深く感謝して居る西澤君とは始めての面會で僅かに一日交遊したのみで氏の性行伎倆等は素より分からぬが自分は或意味に於て大に同君に敬服した同君は數年此地に在つて自由に清語を話され支那人と交遊するゝ所を見ると丸で同胞である隨て事情は能く疏通し支那人側より非常に尊敬されて居らるゝ同地に尙十數人の日本人が居住するが是亦一般の信用と尊敬を受けて所謂排日などのことは夢にもなき様である是れ畢竟西澤君の力に依ることゝ信せらるゝ斯の如き場合は支那を旅行して殆ど見る能はざる所で在留邦人の龜鑑とすべきことであらうと思ふ徒らに紳士を品隲し敬意を失するかも知らぬか自分の感じた所をありの儘に申せば斯うである。

五 九江附近

貿易

此日の午前九時頃に九江に着いた御承知の如く九江は鄱陽湖の西岸に立つて仲々繁華の都邑である開港場の一で船舶の出入貨物の輸出入も随分ある千九百八年の統計に依ると汽船の出入が三千六百三十四艘五百九十四萬九千餘噸で帆船の出入が百七十二隻約三萬四千噸である輸入が約千四百卅二萬兩で輸出約千六百卅五萬兩合計約三千卅六萬兩で輸入の主要品は例の綿布類で釘類、團扇等が是れに次いで居る輸出は木材、茶、鹽、竹類、豆類、落花生、麻、紙類等である九江は江西鐵道の起點であるので明年此鐵道が完成せば餘程有望な所である茲には江西全省鐵路總公司なるものがあつて明治卅七年頃に設置され江西全省に鐵道を敷設する特權を得て居る其經書によると全延長千八百三十三哩で第一期線が九江南昌間百十哩で尙南昌吉安線百五十哩吉安雄線二百哩南昌光澤線百六十哩南昌玉山線百七十三哩南昌萍鄉線二百九十哩の豫定が出来て居る九江南昌間の内九江を起點として約廿五六哩は土工は出来て居る様であるが鐵路公司財政の事情より目下は一吋中止の姿に成つて居るさうだ此線路は結り廣東に連絡する線路ではそれが

江西鐵道

蕪湖

開通せば九江の貿易に一新紀元を作るのである聞く所によると此線路の沿道は物資豊富であるが道路の不便のため九江の輸出は存外少い又或人の説によると廣東の商人が此沿道に大分入込で居つて商業機關等の關係上多く廣東の方向へ輸送されて居るとのことである兎角に注意を要する鐵道であるから一言して置く鄱陽湖口の風景は一吋見るべきものがある正午頃には小孤島附近を通過した此邊洲が極めて多く小孤島は江中に突兀せる草木鬱蒼たる岩島で江の單調を破つて一寸面白い安慶、大通、蕪湖等に寄港し南京に着いたのが三十日の午前六時頃であつた蕪湖は開港場の一では最も繁華な都會らしい千九百八年の統計に依ると出入船舶の總數が四千二百二十六隻約六百二十二萬噸である輸出入貨物が約二千四百四十三萬兩で内輸入が約千二百二十六萬兩輸出が約九百十五萬兩である輸入品の重なるものが石油、袋類、扇類、綿布類等で輸出の重なるものが米、木材、蠟、紙類等である大冶から南京までは先きに陳べた通約五百三十哩許である長江の夜行は所謂月明かに星稀といふ有様で非常に面白く感じた船長が詩歌が數奇て此良夜の感を何か讀んで呉れとの所望であつた其所で種々考へたが月夜の此雄大の

月夜長江を下る

句を得るに苦んだ不圖浮んだものが斯うである。

月や西江や東に風涼し

其他「涼船の灯流れの星落ちぬ」などの歌句もあつたが今は記憶して居らぬ。

### 六 南京雜觀

南京の船附は下關といふ所で津浦鐵道の南の起點浦口と向へ合せになつて居る南京の市街までは約二里半強もあつて此間に南京市街鐵道といふが敷設されて居る此鐵路は延長七哩計で廣軌式で極めてあつさりとして出来て居つて乗り心地がよい南京市街を圍繞して居る城壁は延長九里許もあるとのことで其一端は下關の直ぐ傍まで来て居る南京の盛な時代には下關まで人家續きであつたといふ今日では市街の在る所は南端の一部分で昔の鼓樓鐘樓のあたりも野原になつて居る後承知の通長髮賊の變に巨魁が十年餘も此地に籠城して居つた會國藩が亂を平げた頃は市街の大部分は兵燹に罹つたものらしい現今は多少回復したのであるか名を聞いて居つて此地を實見すると荒涼を感ぜざるを得ない併し今日でも南京は開港の一であつて千九百八年の統計に依ると船舶の出入が約五百二十

### 總督端方氏

萬噸位で輸出入貨物の價格が約千五十萬兩になつて居る内常に輸入勝の所で約六百九十萬兩の輸入に對して輸出は約三百五十萬兩位である要するに南京は寧ろ消費地で毛皮類とが絹織物とが多少の生産物もあるが著しいものはないらしい極り舊都であると兩江總督の駐在する所とで持つて居る位であらう隨つて本邦人などの同地に在る者は數十名あるが商人は殆んどなく大多數が教習連である井原領事の案内で總督端方を訪問したが總督衙門などは實に古風なもので轅門の工合など仲々堂々たるものだ端方氏は今の直隸總督で頗る圓滿なる政治家であるとのことだ應對等仲々親切で支那人は勿論外國人にも評判が宜しい大の骨董好きで又日本の盆栽なども愛翫さるといふことである南京に蓬萊館といふ日本旅舎がある其主人は元大久保邊の植木職で端方氏に僱はれて植木の世話をして居る日本から買つた盆栽が二萬圓以上になつて居るといふことである支那の大官連中にも盆栽趣味を解する者は餘り多く聞かない端方氏の如きは此道に異彩を放つて居る又訪問者は骨董攻めに遇ふといふ話も聞いて居つたが自分の訪問した時は直隸に交迭の際草々のことで其話も出ななんだ。